

機動戦士ガンダム外伝

歴史の狭間に～不運の名将～ 一巻

一巻

序

- 1 幻想の中へ
- 2 子悪魔と黒い竜巻
- 3 再会
- 4 遭遇
- 5 月
- 6 クリア・サテライト
- 7 月面
- 8 人として
- 9 地球降下作戦前
- 10 女神
- 11 来襲
- 12 作戦開始
- 13 富良野攻略
- 14 ブラック参陣
- 15 札幌戦線

二卷

- 1 6 艦隊司令代行ライ・クラウン
- 1 7 法廷の暗殺者
- 1 8 密談
- 1 9 宇宙へ
- 2 0 コロニーの落ちる日
- 2 1 戦の間に
- 2 2 父との再会
- 2 3 束の間の道楽。蹂躞戦
- 2 4 その心は徒然に
- 2 5 メールシュトローム作戦
- 2 6 最終決戦前
- 2 7 最終決戦

序

時は宇宙世紀0087年。七年前の戦争に疲弊していた人類にようやく平和が訪れようとしていた。地球圏のジオンの残党もすでにあらかたが殲滅され、昔日の勢いはなくしている。地球経済も立ち直り、アナハイム社をはじめとする大企業も目覚しく発展してきた。しかし、地球の復興に尽力してきた連邦軍の内部は平和に腐敗し始め、ティターンズの台頭を許す。ティターンズの台頭により地球連邦政府に反感を持つものたちが、今まさに反抗作戦を開始しようとしていた。エゥーゴ。この反抗勢力の中枢にはかつて赤い彗星と呼ばれたジオンのエースパイロット、シャア・アズナブルがいた。彼の持ってきた情報によりエゥーゴでは新たなモビルスーツを開発する。完成したMSはリック・ディアスと呼ばれ、ジオン系MSと連邦系MSの両者を合わせた設計思想である。ここに、エゥーゴの組織の特性が如実に表れている。

忘れてはいけないのはジオンの残党である。彼らの大半は火星に潜伏し、小なりとはいえ国家を形成するにいたっている。その名をアクシズ。現在の王は先の一年戦争を起こしたザビ家の三男ドズル・ザビの娘、ミネバ・ラオ・ザビである。彼女はまだ幼いために、今は亡きジオン公国時代アクシズ方面の司令官マハラジャ・カーンの娘、ハマーン・カーンが摂政として政治・軍事両面の指揮をとっている。これが現在の情勢である。

幻想の中へ

我が炎は町を焼き尽くし
我が牙は人を食い殺す

汝見よ

歩兵が盾を構え剣を掲げるを
騎兵が槍を並べ山野を駆けるを
その数千の人の御霊は猛るも
我が咆哮に一瞬に碎け散る
矢は鱗に弾かれ
法術も縛らず
人は敵う術を知らぬ

空を翔け常に自由
雷鳴に疾駆し血は猛る
その身は漆黒にして狂気に躍り
善悪を超越し自らに往く
邪竜と言われ
天地に生まれ
在る

知れ

ただ
狂気を帯びし英雄
人の姿のをした怪物
彼らのみが我と相見え
干戈の響きに我を知り
凡夫は屍となりて
我と彼らの足元に
我等を知らぬまま散る

懐古して語ろう
我が翼より生まれし
黒い竜巻
その破壊と憂いの物語を

子悪魔と黒い竜巻

「赤い彗星。お久しぶりですな。」

「子悪魔といったな。今の私はクワトロ・バジーナだ。それ以下でも、それ以上でもない。」

「どちらにせよかまいませんよ。あなたがあなたであるのには変わりはない。」

「ところで子悪魔、何用か？」

「本来はキシリア様の仇討ちといきたいところですが・・・今回はそういう用件ではありません。さる方の依頼で私の配下をエウーゴに協力させよとのこと。あいにく手づるがありませんので、ブレックス准将への紹介状をいただきたい。」

「ハマーンか・・・。」

「いえ、ハマーン様のほかにもう一人、クリスタルピースグループの副会長からも依頼がありました。」

クリスタルピースグループ (CPG) とは、アナハイムとも協力関係にある企業である。アナハイムの下請けや技術協力もするが、軍需産業よりは日用品の取り扱いのほうが多い。一年戦争時代になりあがってきた新興勢力である。経済界にも、軍事方面にもかなりの影響力を持っている。

「CPGの副会長・・・。オニワとか言う東洋人だな。しかし会長ではなく副会長か・・・。」

「副会長といっても会長の家宰のようなものですから CPG 首脳の考えと取って差し支えないでしょう。」

「了解した。」

そういつて紹介状を書く。

「准将、お初にお目にかかります。CPG会長代理グラナダ支部長補佐ライ・クラウンです。」

「これはクラウン殿。このたびはエウーゴに参加してくださるそうですな。正直言って一人でも多くの味方がほしいときです。ご好意ありがたく・・・。」

「お待ちください。こちら商売ですから、好意ではありません。こちらにもいろいろな事情があるそうなので・・・。しかし、ご安心してください。協力を惜しむつもりはありません。とりあえずこれくらいをキャッシュでお譲りせよとのこと。」

アナハイムの五分の一の額だが、かなりの額である。

「足りなくなればまたご相談ください。アナハイムには及びませんが、わが社もそれなりの出資は出来ますので。あと、日用品についてはわが社をひいきにさせていただきますとこちらとしても助かります。それと、私どもにエウーゴの一艦隊をお任せいただきたい。」

「艦隊ですか・・・。こちらにはまだ艦隊といって良いほどのものはありませんが。」

「いえ。艦艇及びMSも少しはたくわえがありまして。サラミスタイプ一隻とムサイタイプ一隻。MSも、ジムタイプ数機ならあります。当座はこれくらいですが、余裕が出来たら増やせばよいでしょう。ちょうど艦隊司令に適任な人材が一人おりまして。」

「どなたですか？」

「黒い竜巻です。」

「なんと。ジオンの黒い竜巻といえば知る人ぞ知るエースではないですか。今はデータが紛失し見れませんが戦後直後のデータを見ました。敵機撃墜88。わずか十九にして一艦隊を任せられたという鬼才。一年戦争で一度手並みを拝見しましたが、一糸乱れぬ艦隊の前に味方はことごとく沈められました。頼もしいですな。」

「そう言っただけだと幸いです。今離れた所におりまして人を迎えにやっておりますが、そちらで開発されているペガサス級巡洋戦艦の完成のころにはこちらに到着する予

定です。」

「そうですか。では一艦隊はお任せしましょう。また後ほど詳しいことを決めましょう。」

「爺、俺が自ら黒い竜巻ブラック・スターを迎えに行く。ハマーン・カーンにも用があるからな。CFGのほうはお前に任せるぞ！」

「お待ちくださいタカノブ様。私がアクシズへは参ります。」

「オニワの爺、年寄りのお前に火星まで行くのはつらかろう。俺が行く！」

「そうって仕事をサボる気ですな！」

「そうだ！」

「そんなはっきりといわないでください。」

「ともかく任せた。後、カスミとライとドレンにも声をかけておいてくれ。じゃあな！」

「わかりました。御武運を。」

「やはり俺には戦場のほうがあっているな。ハマーンは信用ならんが、ミネバさまはキシリア閣下の姪御に当たる。かつての厚恩を少しでもお返しせねばなるまい。」

CFG会長タカノブ・イシガヤ。彼は一年戦争において敵味方を問わず軍上層部にその名を馳せた英雄である。いや、英雄ではない。子悪魔の仇名のとおり忌み嫌われた存在であった。幼少時、まだその権力を確立し切れていないデキン・ザビの娘キシリア・ザビにその能力を見出され、機械工学でかなりの教育を受けさせられたが、それ以上に暗殺者として育てられた。とはいっても、後年言われるキシリア・ザビの冷徹といわれる面からは想像はしにくいだが、イシガヤはモルモットとして育てられたわけではない。徒然にではあったかもしれないが、家族同然に扱われていたのだ。とはいってもザビ家のほかの面々とそれほど面識があったわけではないが。ともかく、キシリアとは数歳離れていたが、彼にとっては上官であるまえに姉のような存在であったのだ。そのキシリアは一年戦争の終局の一日前、シャア・アズナブルに暗殺されている。彼を暗殺する機会があったが、彼は有用であったがためにそれはしていない。

「しかし、ハマーンの専横だけは防がねばなるまい。ハマーンもなかなかの御仁ではあるし、つかえるに足る人物ではあるが、ミネバ様をないがしろにするようならば、ザビ家の臣として討たねばならんからな。まあ、どっちにしる面倒な仕事から開放されてよかったあ。オニワの爺に感謝せんとな。」

オニワの爺と呼ばれる CFGの副会長は先代からの腹心である。すでに68という高齢ではあるが、会長が会長であるために第一線から下がることは出来ない。しかも、先代会長はイシガヤの親ではなく伯父であるがためにいくら数年間イシガヤがトップに君臨しているとはいえ、いまだ信服しきっていないものも多い。それをまとめるには、やはりオニワという高い能力と人望、経歴を持った人物が必要なのだ。

「それにしてもティターンズは気に入らん。30バンチ事件などあの一年戦争を思い出させる。」

それは0085年にサイド1コロニーの30バンチで起こった事件である。反地球連邦組織エウゴの活動を阻止するためにティターンズはCGガスをコロニーに注入した。一年戦争で起こったブリティッシュ作戦以来の大虐殺である。イシガヤは当時ジオン公国軍のキシリア旗下の特務将校であった。そのキシリアの命によりギレン・ザビへの援護を命じられ、二基のコロニーへの毒ガス注入部隊のMS小隊を指揮したのである。その行為により果たして何万人を殺したのであろうか。例え戦争でも、人として越えてはならない一線があるのではないのか。

三ヵ月後・・・アクシズ

「ハマーン様、チベ級戦艦雛菊発進準備整いました。」

「ふむ。新兵の訓練、よろしく頼む。」

「了解いたしました。」

アクシズの摂政、ハマーン・カーンの命令をまだ若い大佐が受ける。彼こそは七年前のジオン独立戦争で『黒い竜巻』の勇名を馳せたブラック・スターである。今年26歳。この歳で大佐といえば、ほかにシャア・アズナブルくらいしかいない。

「ところでブラック、新兵にニュータイプはいないのか？」

「残念ながら。」

「そうか。目下このアクシズでNT専用兵器ファンネルを使えるのは私と貴様だけか。」

「NTの発掘は急ぐべきですな。そろそろ地球圏も荒れてきたことですし。」

「さすがは貴様だ。私の心のうちを読んだか。」

NT能力の高いものは相手の心のうちさえ読むことができるという。戦闘においてその能力は遺憾なく発揮され最強の兵隊となりうるのだ。

「私の能力では到底そのようなことは出来ません。せいぜいファンネルを不器用に動かす程度ですよ。しかしながら、ここアクシズの物資は乏しく地球圏には物資があります。私には政治の才能はありませんが、戦略家としては地球圏への進出に魅力を感じます。」

ブラックの戦闘指揮能力はアクシズではトップクラスである。アクシズの政権を握るハマーン・カーンでさえ彼の戦略立案能力にはかなわない。IQ190に加えて幼少のころから兵学を学び、一年戦争という激動の時代を生き抜いた士官である。パイロットとしても黒い竜巻の二つ名は伊達ではない。もっとも、それだけ能力がありながら、政治能力とカリスマがないために表立った有名さはない

「ではハマーン様。雛菊はアクシズ外周にて訓練を行います。ごきげんよう。」

「お帰りなさい大佐。」

副艦長であるミキ・ナカサト中尉とドメス・ロウゾ中尉がブラックを出迎える。彼女等もまた一年戦争では四十機近い撃墜スコアを持つエースである。当時からブラックの指揮下で活躍し、現在はアクシズにて教習部隊を任されている。

「出迎えご苦労。何か変事は？」

「特にはありません。しかし、MSは何とかなりませんか？反応速度なんか最悪じゃあないですか。それに、ガザとか言う試作機は変形システムを組み込んでいるとか言いますけど、あんなのよりゲルググを改良したほうが良いと思います。」

ドメスが愚痴る。雛菊にはろくなMSがないのだ。それだけアクシズの物資は逼迫しているのである。訓練艦に回す戦力はない。さらに言えば、ハマーンはブラックの力を恐れてもいるのである。シャア・アズナブルがいない今、ハマーン・カーンに対抗できるだけの能力を持った人材は彼しかいないのである。彼の采配があれば雛菊一隻でも相当な戦力になりうるのだ。さらに、雛菊にはミキ、ドメスといった百戦錬磨のエースパイロットがいる。いくら一年戦争の生き残りがいるアクシズとはいえ、現在の戦力は新兵が大半であり、もしブラックらが反旗を翻したとなればアクシズの戦力の30パーセントが沈められる危険がある。

「戦争は近い。じきに良いMSがいただけるはずだ。」

「だけど戦争なんて起きて欲しくはないけどね。エースなんていっても所詮人殺しには変わんないし。」

「ですね。しかしそうすると私たち平和になじめない人間にとっては退屈かもしれませんよ。」

「ドメス、勝手に決めないでよ。私だって女の子なんだから、買い物とかだって楽しいわ。あんた次の休みにはお供しなさい。」

「ともかく。雛菊発進。これよりアクシズ外周での訓練に向かう。」

再会

「三番機、射撃時のタイミングが遅い。敵機補足と同時に砲撃をするように心がける。五番機はもっとチームプレイを心がける。司令部が求めているのは突出したエースではない。チームとして確実に命令に従うパイロットだ。」

しかし反抗的な新兵が口答えする。

「大佐は突出したエースパイロットではないですか！」

「否定はせん。私一人でも貴様ら十人分の働きは出来るが、基本能力では私に劣っていてもドメスとナカサトが連携したら、私は絶対に勝てない。事実シミュレーション上では三十戦三十敗だ。」

「しかしおふた方もエースです。」

「そもそもわれらがエースなのは、チームプレイをしていたことの副産物である。アクシズのライブラリには研究資料としてわれらが所属していたブラック・ストーム隊の一年戦争時の記録映像が残っている。それを観てみることだ。」

これには閉口するしかない。ブラック・ストーム隊の記録はジオン軍には珍しく完全な形で残っているのだ。ブラック・ストーム隊の記録は地球圏ではイシガヤしか所有しておらず、また連邦政府やジオン共和国などからはブラックの名前さえ出てこないほどに消し去られている。戦争犯罪を追及されないために、イシガヤが部下のハロルドを頭とする一年戦争生き残りの工作部隊を使って消し去ったのである。

「艦長！太陽に不審な影を補足。」

「各機帰艦せよ。」

「メインパネルに拡大映像を投影します。」

「これは・・・ムサイ級だな。アクシズの航路予定にはないはずだ。」

「長距離通信です。当方は貴艦との模擬戦闘を希望する。春菜艦長。です。」

「ブラック、春菜ってもしかして。」

「おそらく。しかしナカサト、ドメスの両名はMSを発進させ万が一敵が模擬弾でなかった場合は速攻撃に移るように。これより雛菊はムサイ艦を仮想敵として模擬戦闘に移行する。」

「しかし艦長、不審な艦の言うことを聞いてよろしいんですか？」

「おそらく私の知っているものだ。万が一の場合もMS隊に任せておけ。」

「有効射程まで後三分。」

「主砲用意。ミサイル管開け。」

「後一分。」

「敵艦よりミサイル！」

「アンチ・ミサイル発射！」

雛菊よりアンチ・ミサイルが十発放たれる。それは確実に春菜のはなったミサイルに直撃していく。

「急速下降！対閃光防御！」

「えっ！わかりました。」

そう舵手はよくわからないまま艦を下降させる。直後春菜からのミサイルの数本が閃光を上げる。閃光弾であったのだ。

「ばかな！こんなの全うな戦術じゃあない！」

オペレーターの一人在悲鳴を上げる。その直後、雛菊のもといいた地点に数条のビームが

通り抜ける。

「主砲放て！ミサイル水平扇うち！」

「敵艦回避しました。続いてミサイルきます！」

「散弾だ。急速上昇！前方に機雷。」

ブラックの予想通り春菜からのミサイルは散弾であり大量の弾をばら撒くが、こちらも大量な機雷により攻撃を防ぎきる。

「ミサイル大量に來ます！」

「主砲で焼き払え。艦速をあげろ。」

「この状況で艦速をあげるのですか！？」

「敵はそうしてくる！」

「敵艦視認。」

「まずい。春菜の艦速のほうが早いか・・・。」

「敵艦よりビーム！」

「回避行動。対空機銃用意！撃て！」

「うわあああああ！」

操舵手が思わず叫ぶ。雛菊のすれすれを春菜が機銃を撒き散らしながら通過したのだ。さらに機雷が散布され春菜後部からミサイルが放たれる。

「機雷、ミサイルともに着弾を確認。実戦であれば撃沈されました。」

「・・・さすがだな。」

雛菊の乗組員は沈黙する。アクシズでも五指には入るブラック大佐が負けたのである。しかも敵艦はほぼ無傷である。ありえないことだ。

「春菜より入電。こちらに向かうとのこと。」

「了解したと伝える。」

「久しいな。」

「ああ、デラース抗争以来だな。てか、まだこんなところで教習部隊の指揮をしてたのか？まあいい。ハマーン様に連絡はしてある。悪いが案内してくれ。」

「艦長、この方はどなたですか？」

オペレーターの疑問ももつともである。黒い竜巻の異名をもつブラックに模擬戦で勝った上にアクシズの最高司令官であるハマーン・カーンとも面識があるようである。さらに、ブラックより少し若く思われる。

「私のかつての戦友でイシガヤというものだ。現在はアクシズの物資補給にも貢献している地球圏の会社の会長だ。」

そう説明されたオペレーターは驚く。会社の会長が、正規の現役軍人であるブラックに勝ったのだ。それに、雛菊に勝てるということは、ほかの乗組員もかなりの腕前があるはずである。

「しかし・・・どうして春菜は私たち正規軍に勝てたのでしょうか？」

「わが春菜を唯の民間船とか、私の趣味だとは思わんでくれ。この艦の乗組員は通常一年戦争などで出来たデフリから、わが社の施設を守る任務についているが、時折MSなどを持ったテロリストなども出没することがある。それらの殲滅も任せている。雛菊は訓練艦と聞いたが、われらは実戦を経験している。その差だな。」

「しかし仮に計算したのですが、先ほどの機銃での撃ち合いにおいてわが艦の命中率は二十パーセントに過ぎないのに、そちらの命中率は八十パーセントを超えております。これはあまりに不自然ですが。」

それにはさすがのイシガヤも答えられない。何せ、自分でもなぜそんなことになるのか

まったくわからないからだ。確かに一年戦争当時から、イシガヤ艦の被弾率はほかの艦に比べて格段に低かったし、命中弾でも不発弾は多かった。しかし、偶然としか言いようがないのだ。

「ってか、やっぱり少尉じゃん！ミキ、ドメス兩名帰還しました。」

「久しぶりだな。」

「春菜は確かに被弾しにくいけど、それはやっぱり少尉の強運のせいじゃない？そういえば今は軍辞めてるから少尉じゃなかったけどまあいいか。」

それにドメスも相槌を打つ。

「その強運のおかげでカスミ元中尉と結婚できたんですね。」

「さもあるう。」

ブラックもうなずく。

「本当に強運のせいなのですか？」

オペレーターは納得いかないようだが、それとしか言いようはないのだ。一年戦争では、オデッサ戦、ジャブロー戦、ソロモン戦、ア・バオア・クー戦といった主だった戦場の一線にいて、かなりの戦果を挙げている上に、戦死者はゼロ名。負傷者にしても、治療をすれば傷跡さえ残らない程度の怪我である。まさに強運としか言いようはない。対してブラックのほうは、イシガヤ隊を指揮して同じ戦場にいたが、ア・バオア・クー戦においては旗艦更級を撃沈されるなど、かなりの戦死者も出している。

「ところでイシガヤ。お前がじきじきに来たということは・・・。」

「あんた、またなんか厄介事持ってきたんでしょ？」

「そうだ。非常に厄介な用事だ。しかしここでは言えないな。ハマーン様のところで言う。ついてきてくれ。」

「よくぞ参った。いつもいろいろと世話になる。ところで今日はこういった用件であるか？」

「お久しぶりですハマーン様。まずはこれが今回提供できる目録です。」

「ほう。生活物資のほかには・・・ガンダム MK の設計図とエウーゴの新型の設計図だな。よくやった。」

「ありがとうございます。本題に入りますが・・・ブラック・スター大佐とミキ・ナカサト中尉、ドメス・ロウゾ中尉の三名を私にお貸ししたいのです。」

ハマーンは瞬時渋い顔をする。

「貴様のことだ。エウーゴにでも参加するつもりだろう。しかし彼らはわがアクシズにとっても重要な戦力なのだ。」

「わかっております。しかし、エウーゴに参加して、ティターンズを潰すというのはアクシズのとっても利益はあります。」

「なぜか？」

「ハマーン様が、このような辺境で一生をお過ごしになれる人物とは到底思えないからです。そして、地球圏にお戻りになれるなら、今回のように戦乱が起こりそうな時を置いてはほかにありません。また、組織的にもろいエウーゴを勝たせたほうが、後々都合がよろしいかと。」

またしても渋い顔をする。先ほどブラックに考えを読まれたばかりであるからだ。イシガヤは一年戦争で成り上がった商人でもあるし、ブラックとは友人であり先ほどもあっている。さらに言えば、ファンネルを動かすことさえ出来ないが一応 NTではある。地球帰還の考えを知っていてもおかしくはないが、やはり一抹の不安を覚える。

「どうですか？ブラック・スターをあえてエウーゴに参加させれば地球圏の動向もいく

らかは探れますし、戦争が起これば連邦軍とエウーゴが疲弊していくのは明らかです。」

「そして、そうすればお前の CFG は潤うということであろう。」

「いえいえ。すべてはアクシズのためを思ってでございます。」

皮肉を言ったハマーンにわざとらしく世辞を言う。

「よくわかった。三名を呼べ。」

「ブラック・スターほか二名到着いたしました。」

「入れ。」

ブラックたちはイシガヤを横目で見ながらハマーンの前へ進む。

「ブラック、貴様は先ほど地球圏侵攻の話をしたが、貴様ら三名に先発隊の任務を与える。地球圏到着後はエウーゴに参加してその動向を探るに加え、連邦軍の戦力を減少させる。ただし、アクシズ危機の場合のみ速やかに帰還するように。」

「しかと承りました。しかしながら、エウーゴ潜入などはどのように致しますか？」

「それらの件はすべてイシガヤに任せてある。イシガヤと相談しよきに計らえ。」

「了解いたしました。」

ハマーンとしては複雑な心境である。ブラックは一方では危険なほどの才能を持ち家柄もよく、反旗を翻したとなればアクシズの危機を招く恐れもある。しかし、その実直な性格はそこいらの士官どもより信用が置け、かつその才能は頼りにもなる。どちらかといえればアクシズにとっては損ではある。ただ、やはり厄介払いが出来たという気持ちもあるのだ。

「ブラックにせよ、イシガヤにせよ、私の器量しだいでもうとでも動かせるか……。」

翌日

「ブラック、お前たちは準備を開始してくれ。三日後にアクシズ宇宙港に集合だ。」

「ふむ。」

そうやってイシガヤは急ぎ春菜に戻る。いろいろ忙しいのだ。

「トモアキ・オニワ、お前はアステロイドベルトに資源採掘プラントの建設の準備をし置き。数週間後には資材を乗せた輸送船団が到着するはずだ。ハマーン様からの許可は取ってある。アクシズにはこちらの損にならない程度に協力をしろ。」

トモアキはオニワの爺の孫であり、イシガヤの腹心の一人である。歳はイシガヤと同じで祖父に似てなかなかの経営手腕がある。また、私設軍隊の司令官としても有能であったし、パイロットとしてもなかなかの腕前である。というより、シミュレーション上では実戦をいくつも潜り抜けたイシガヤよりも腕は良い。それゆえに、いつ情勢が動き出すか分からないアクシズに派遣したのである。何かあってもなるべく資産を放棄しなくてもよくするためである。

「了解しました。」

「レイチェル・フレイム、お前は当分こちらからの連絡の取次ぎとアクシズの情報収集を頼む。ハロルドのところから五名ほど工作兵を引き抜いてきたからその指揮をとってくれ。オニワと十分に協力してな。」

レイチェルは、一年戦争当時イシガヤの指揮するこの春菜の索敵手を務めていた。妖艶で接待などに都合が良かったためイシガヤの秘書の一人として CFG に再就職したのだが、このアクシズに派遣できるほどの人物が少ないために拝み倒してオニワの秘書という名目でアクシズに派遣したのである。本人はあまり乗り気ではなかったためかなりのボーナスを自腹で弾んだおかげで少々懐が寒くなってしまった。

「分かりましたあ。ところでえ、アクシズにはあブランド物のお店とかあるんですかね

え？」

「少なくとも、俺が運ぶ荷物の中には入っているが・・・なんならくるとき教えた俺の口座を使って取り寄せても良いからともかく情報収集とかは確実に。」

「了解です。でもお、こちらに来る前にくれた分はもう使い切ってしまったのでえ、お金入れといてくださいねえ。」

「・・・わかった。」

その口座に入れておいた額は日本円にして五億である。インガヤにとってはそれほどの額ではないが、一般人にとってはかなりの額なのにこんなにすぐ使い切るのならば少なくとも三十億は入れておかないといけないかもしれない。しかし、それだけ出してもレイチエルの情報収集能力はかなりのもので十分な採算は取れるのだ。

「ともかくアクシズとの交易用の輸送艦隊は一週間以内に到着する。それも任せた。俺は地球圏でひと暴れしてくるから万一の際はオニワの爺とトモアキで何とかしろ。じゃあな。」

そういつてムサイの後部輸送ユニットをはずす。これで残りは戦闘要員だけである。

「各員、これより春菜は地球帰還後、エウーゴに与しティターンズを敵に回しての戦闘を行う。貴君らは志願してこの春菜に乗艦したのだが、もし恐れをなすのであれば地球帰還後に春菜を退艦しても良い。以上。」

投げやりではあるが、士気の低いものを統率するのは面倒なのだ。

「早かったな、ブラック。」

「ふむ。ところでMSなどの装備はどうなっている。また、エウーゴへの侵入方法は。」

「MSのほうはまだ用意できていない。一応一年戦争時のミキ用のドムを俺用にしたのとドメスのゲルググは持ってきているが・・・グラナダに着けばサラミス級一隻とMS数機を用意している。他も建造中だ。戦力は問題ない。そんで、エウーゴにはもう報告済みだ。艦隊が出来次第お前が艦隊司令だ。」

「そうか。」

「って！少尉！あんた勝手にそんなこと決めて！しかもグラナダまでの戦力がそんなじゃあしょうがないじゃん！」

ミキ中尉が怒鳴る。

「ゲルググは一年戦争当時のものだが、ドムの方は改修をしてあるからまあ何とか戦えるはずだ。それに、グラナダまでなんだから、何とかなる。」

「何とかなるって・・・。」

「フム。あのドムなら何とかなるう。」

「はあ。大佐がそういうなら仕方ないか。」

「大丈夫ですよ。ミキ中尉は私が守りますから。」

「・・・ありがとうドメス。」

お気楽な人々を目の当たりにし、さすがのミキも黙るしかない。

「それでインガヤ、グラナダまでのルートと、日程、作戦要項は？」

「現状では三ヵ月後にグラナダに到着する予定だが、細かいルートと日程は後で渡す。そして、われわれが地球圏に到着するころにエウーゴで開発中の新造巡洋戦艦とMS三機が作戦を開始する。艦長にはヘンケン・ベッケナー中佐という一年戦争を潜り抜けた連邦士官が予定され、パイロットにはクワトロ・バジーナ大尉以下二名のジオン残党が予定されている。」

「ヘンケンはそこそこの艦長と記憶している。バジーナ大尉とは？」

「シャアの偽名だ。」

「一介のパイロットになろうとは。赤い彗星も地に墜ちたな。」

シャアといえば、知らぬもののないエースである。おそらく、知名度では一番であろう。撃墜数はブラックのほうが多いが、知名度では足元にも及ばない。そのシャアも、以前はアクシズにいたのだが、ハマーンとの確執がうわさされて以来突如行方をくらましたのである。

「しかし、ほかの戦力は？」

「・・・いまだティターンズに対抗しうるだけの戦力はない。巡洋艦4隻、MS12機ほどは確実なのだが、他はゲリラみたいなところを吸収して増やすそうだから、なんともいえんな。しかし、数ヵ月後にはMS80機を正規軍として運用可能にするそう。それまでは適当に遊撃でもしていればいい。」

「そうか。ところで、春菜の乗員は現状維持なのか？」

「そうだな。一応俺のこの社員だし、艦が増えても俺が指揮を執る。お前には悪いが、お前の艦にはエウーゴからの兵を使ってくれ。」

「ふむ。」

やはり戦力は少ないようである。ブラックにはイシガヤという資金源がついているので戦闘を繰り返したとしてもさして物資の補給に困ることはないであろうが、本隊のほうは別である。いくらアナハイムとてMS80機の運用は簡単ではないし、第一、会長自体イシガヤほど力を入れていない。所詮はただの戦争商人なのだ。

「・・・・・・・・ブラック、何考えてるかは知らんが、俺も一応は戦争商人だということを忘れるなよ。」

ブラックの政治的能力は高くないので一応ここで釘をさしておく。さすがのイシガヤも、出資できる額には限りがあるのだ。もっとも、ブラックよりもイシガヤ本人のほうが金に物を言わせることがあるのだが。

「分かっている。資源は大事に使おう。」

「よし！準備も出来たところで春菜は地球圏に帰還する！春菜発進！」

遭遇

「とまあ、地球圏に戻っては来たが、いきなりティターンズの連中に引っかかっちゃまった。」

「ふむ。」

「ったく！少尉も大佐も呑気にしている場合じゃないでしょ！」

「俺は呑気じゃないぞ。」

「ふむ。」

「・・・はあ。それでどうするの？」

ちなみに敵の戦力はサラミス改級が三隻である。搭載MSはハイザックかジム が各艦四機が妥当である。

「春菜では逃げ切れまい。討って出るか。」

「すまんブラック。ゲルゲグ調子悪くてバラしちゃった。組み立てするのに2時間はかかる。ついでに CFG所属とばれるのはまずい。民間船は装えない。」

「つらいな。」

「いや、俺がドムでしんがりするからお前たちは戦線を離脱してくれ。」

「無茶よ！少尉一人じゃあ。」

ミキが声を荒げる確かに、百戦錬磨のイシガヤとはいえ、一年戦争時のMS撃墜数は15機に過ぎない。それでどうして一度に12機近くの敵を相手に出来るというのか。

「しんがりなら、私かナカサト、ドメスのほうが妥当であろう。」

ブラックもそういう。能力的にはこの三人のうちの誰かにしたほうが確実である。

「さて。まず、俺のドムじゃあドメスは思うようには戦えない。重火器系の調整があまりにも違いすぎる。それに、近接戦闘に持ち込まれると、ドメスはまずいだろ。」

ドメスはスナイパーとしての能力においては超一流であるが、他の能力は並に少し色を付けたぐらいでしかない。しんがりに残せば確実に撃破されるだろう。

「次に、ミキを残したらドメスに殺される。」

これは冗談である。が、理屈はともかくさすがのイシガヤもミキをしんがりにする気にはなれないのだ。

「最後に、ブラックに万が一のことがあったら今までの苦勞が水の泡だ。ブレックス准将に顔が立たないばかりかCPGの信頼に傷がつく。それに、お前をここで残すくらいなら火星までいちいち行かない。」

「ふーむ。」

「というわけで、俺が残るしかないって事だ。」

「ですがイシガヤさん、あなたに万が一のことがあるとCPGが困るのではないですか？それに、こちらの行動にも。」

「ああ。そいつは問題ない。現在ここから約一時間のところにすでに後事を託すに足るやつが着いている。思ったより早くサラミスが完成してな、資源採掘用の小惑星にこさせてランデブーを早めてある。そいつが全部やってくれる。それと、CPGの方はいつもほったらかしだから、俺の腹心が俺の影武者を務めてくれるはずだ。」

「・・・なかなか周到ですね。」

「そうか、ではイシガヤには救援がくる2時間の間ここで奮戦してもらおう。サラミスの責任者は誰だ？」

「一年戦争で俺の副官だったミネルバ・バイブルだ。」

「そうか。健闘を祈る。」

「って！ブラック、もうちょっと考えてよ！」

「・・・考えた。変更は無い。」

「・・・・・・・・・・でも、確かに少尉なら殺しても死にそうに無いか・・・。」

結局はここである。なんとなく、死にそうに無いのはイシガヤだけなのだ。

「というわけで、イシガヤ機いきま～す！」

「いつの間に・・・」

どうやら、彼女らが問答している間に出撃してしまったらしい。気配をきづかせないあたりはさすがである。こうなっては変更もくそも無いのでいち早くサラミスと合流し、戻るだけである。

「春菜、全速前進。」

数分後、イシガヤの表情はすでに通常の状態ではない。イシガヤは時に二重人格のような状態になるのだ。この状態の彼は戦闘センスも冷酷さもブラック以上ととってもいい。

「さて、ティターンズのパイロット諸君に告げる。ジャミトフの私兵と成り果てる定め
の己を悔い改めるのならば、武装を放棄せよ。そうでなければ我が刀の露と消えるがいい。」

独自に開発した通信ジャックシステムにより連邦軍の回線に割り込んでそう流す。不意に、敵兵からの通信を受ければ混乱することがないでもない。一年戦争においても多用した手である。しかし、そこに返答してくるパイロットがいた。

「その声、その機体はイシガヤ少尉ではありませんか？」

「久しいな。ナリッジか。」

かつて一年戦争においてイシガヤの部下だったパイロットである。なかなかの腕があり、戦後は経歴を偽り（その手引きをしたのはイシガヤである）連邦軍にもぐりこんでいた。おそらく、その腕を買われティターンズに入隊したのであろう。よくよく思えば、自尊心の高さや攻撃的な性格もティターンズに向いている。

「今なら武装解除をすれば命の補償はします。」

「ほう。なかなか言うようになった。しかし、それはそのままお返ししよう。かつての仲間も多数エウーゴに入隊している。貴様もどうか？」

「戯言を。MS 12機に巡洋艦3隻を一人で相手にするつもりですか？ 栄光あるティターンズがそうそう一機の敵にやられるわけないでしょう。」

「元ジオンの軍人が、連邦に尻尾を振るようになってはお終いだな。来るがいい。」

そういつて戦闘の火蓋が切って落とされる。

「イシガヤ！ 俺はあんたのことが気に入らなかつたんだ！ 操縦能力ならあんたより上なのに、それを認めようとしなかつた！」

先頭きって突撃してくるナリッジ機後方の敵を二機狙撃する。機体を止めて撃っているだけ正確な射撃であり、二つの大輪の花を咲かせる。なかなか見事である。

「技術だけなら認めていたさ。」

さらに二機を撃破する。

「うそをつくな！」

すでに射程圏には入っているもののイシガヤ機には当たらない。一步も動いていないのにもかかわらずだ。

「くそ！」

接近戦に持ち込むためにさらに加速する。

「死ね！」

ナリッジが吼えるが、この間イシガヤ機は微動だにしていない。

「この甘さが命取りだったのだ。いまさら遅いが。」

まさに瞬殺。イシガヤ機はただ、ナリッジの操縦するジムにサーベルを突き出しただけである。ナリッジの攻撃を回避さえしない。それだけで決着がついた。

「くっ！ナリッジを討ったのか・・・しかし、かつての知り合いに対する一瞬の躊躇。人殺しとしては甘すぎる。」

ナリッジは最期の咆哮も出来ずこの世から存在を消す。躊躇するものとしめないものとの差であった。イシガヤ自身も、ナリッジを討った瞬間には一瞬正気になったが、それでも子悪魔の二つ名は伊達ではないのである。そう、敵ならば討つ。これがイシガヤの真理であるのだ。

「さて、まだ六機いるが・・・。」

かつての部下に対する感慨さえ無く最後のバズーカの弾丸をサラミスに向けて放つと加速を開始する。近接戦闘に持ち込むためである。ザクマシンガンなら装備されているが、敵が多い以上普通に銃撃戦をやっていては勝てないのだ。イシガヤの能力では止まって撃つ限り命中率は高いのだが、動いたとなると命中率が一気に下がる。本来射撃戦は苦手なのだ。

「しかし・・・。深淵の宇宙にひらく桜花。」

ハンドグレネードのようなものを投げる。閃光弾である。イシガヤの戦闘の特殊性はまさにここにあるとあって過言ではない。なぜならば、こういった閃光弾は正規の兵装ではないのだ。ゆえに、適応力の少ないパイロットにはかなりの衝撃を与えることが可能でありよれにより撃破が容易になるのだ。しかも、この場合ティターンズパイロットは地球出身が多く宇宙戦が得意ではない。またエリートであるがゆえに実戦経験が少ない。こういった戦法には免疫が無いのでより効果的である。

「それにしても、この程度の腕でティターンズとは・・・。風に散らして星の雨かな。」
さらに二機を撃破しながらつぶやく。

「くっ！何だ奴は！こっちは処女航海だとはいっても決して腕は悪くないはずなのに！」
ある艦長が言う。しかし弱いはずである。彼らは宇宙での実戦はこれが始めてであるのだ。

「たかがドムの分際で・・・しかしあのドム・・・普通のドムじゃあないな・・・見たことがある。あれは・・・マキタが言っていたイシガヤとか言う奴の指揮下のドムか・・・。それならこの状況も説明がつくか。」

彼の乗るハイザックは回避行動をとりながらそう考える。

「あのハイザック・・・他とは違うな。」

すでに敵MSはあのハイザックだけである。ただ、あのハイザックのパイロットの腕自体はたいしたことは無いが、しかし最も戦闘センスは高い。

「隊長機か？」

そうは思うが、中では一番戦意が無いように思える。常に射程圏内に入らないようにしているのだ。ともかく、それは置いておいて一隻のサラミスのエンジン部にミサイルを放ち沈める。普段のイシガヤとは思えない手馴れた行動である。

「ここまでだな。撤退する。」

ハイザックのパイロットがそういう。

「しかし、カワグチ中佐、敵前逃亡です。たかが一機のMSにやられたなどと！バスク大佐に申し訳が立ちません！」

「ふん！バスクになにができる。死にたくなければ退くしかない。言い訳など何とでも

なる。」

「しかし！」

「なら、お前は死ぬ。一番艦はしんがりを勤めよ。二番艦は退却するいいな。」

そうやって彼は一番艦を見捨てて退却していく。その手際はいいが、残された艦のほうは必死に戦うしかすべは無い。ああいってしまった手前退却するわけにもいかないし、おそらく退却したら命令違反で銃殺である。

「総員心せよ！生き残りたければあのドムを撃破するのみ！たかが一機のMSにやらせてなるものか！」

確かに、通常なら一機のMSにサラミスが沈められることなど無い。それだけの火力はあるのだ。しかし・・・所詮はMSに普通程度の力しかない場合のみのことである。

「艦長！対空砲当たりません！コンピューターの計算では確実に当たるはずなのに！」

「やらせはせんぞ〜！」

「エンジン部に被弾！出力低下！」

「やらせはせんぞ〜〜！」

「各砲座沈黙していきます！」

「やらせはせんぞ〜〜〜！」

「うわああああああああ！」

ブリッジ正面のガラスにドムのモノアイが光る。漆黒の機体、紅い瞳。まさにそれは死をもたらし悪魔とその魔眼に他ならない。

「ティターンズに栄光あれええええええ！」

ドムのヒート剣がブリッジに突き刺さり直後、ドムをも巻き込んで大爆発をする。

「こちらはCFG所属巡洋艦滄海です。そちらは春菜ですね？責任者は応答しなさい。」

「こちら春菜。責任者のブラック・スターだ。君はミネルバ・バイブル殿で相違ないか？」

「はい。」

「ならば都合がいい。イシガヤが現在しんがりを務めて敵と交戦中だ。すぐに救援に行きたいのだが。」

「了解しました。滄海にお任せください。貴艦はこのままグラナダへお向かいください。制宙圏は確保してあります。」

「了解した。」

「ちょっとミネルバ！私とドメスも一緒に行ってもいい？もし敵が強ければ役に立つわよ。」

「お久しぶりですミキさん。では、あなた方二人はこちらに来てください。」

「それにしても、少尉は大丈夫かな。」

「そうですね。ですが会長は強運ですから。殺しても死なないでしょ。」

そうやってミキもミネルバも笑う。彼の旧部下の間では『殺しても死なない』というのがイメージに定着してしまっているのだ。現に、一年戦争時において特攻一回、自爆二回というはっきり言って死んでもおかしくないことをしながらピンピンして生きているのだ。さらに言えば、過去に何度も直撃コースの攻撃を受けながらその強運によって確率を無視した防御が出来ていたのだ。

「そういえばミネルバ、あんた今えーと、CFGの支部長かなんかだっけか？」

「ええ。地球の旧日本地区の旧北海道にあるCFGの支部で、地球におけるCFGの活動の管理を行っています。」

「うーん。それってどれくらいえらいの？」

「そうですね。会長がイシガヤさんでして、オニワという方が副会長です。その次に本部長がおりまして、それで、いくつか支部があるのですがその支部長という順番ですね。支部長の権限は、大体中規模の会社の社長に匹敵します。」

「そういえば、ライは？」

ライ・クラウン。彼はかつてブラック・スターの副官を務めていた男である。ブラックがMS戦においても多大な戦果を挙げた影にはライの類まれなる艦隊指揮能力によるところが大きい。背後を気にしないでいいというのはそれだけで士気があがるものなのだ。

「クラウンさんは月のグラナダの副支部長です。今度イシガヤさんの参謀長に転任なさいますが。」

「そうなんだ。ところでさ、ミネルバは支部長なのになんでこんなところにいるのよ。エウーゴに参加するの？」

「いえ。今のところ大きな仕事が無かったと、艦の指揮能力を買われて会長とブラック大佐のお迎えに上がっただけです。グラナダに着き次第、旧北海道支部に戻ります。」

「そうなの？残念。また一緒に戦えると思ったのに。でもそうすると副艦長に事欠くようになるんじゃないのかな？」

そうつぶやく。イシガヤはともかくとして、ブラックがMSで出ると出ないのとでは戦力に大きな差が出るのだ。

「そろそろ問題の宙域ですね。索敵手、敵影は？」

「ありません。MSや戦艦の残骸だけです。しかし・・・味方識別機も確認できません。」

「よく探さない。識別信号を出す機械が壊れているだけかもしれません。それに、MSクラスの熱源は確認できなくておかしくはありません。損傷していれば。エンジンを停止して、生命維持装置ぐらいしか作動してないでしょうから。MSを発進させて調べます。ドメス中尉、ミキ中尉任せます。」

「はいよ！」

「三番機、熱センサーはひとの体温に設定して。ドメスは目視でも探してね。」

「了解。」

ちなみに、ドメスの視力はおそらく7.0くらいである。さらにスナイパーとして優れているために動体視力も抜群である。生半可なセンサーに劣る彼ではない。

「ミキ中尉、イシガヤ機のバズーカを発見しました。回収します。」

「了解。三番機はドメスのいるほうに向かって。」

「さらにザクマシンガンも確認。」

「确实ね。私もそちらに向かう。おそらくイシガヤ少尉はそのあたりにいると思うわ。注意して。」

そう指示する。かつての戦争において、イシガヤがマシンガンを手放すのは最後の最後であった。撤退するとき敵への牽制のため少量の弾薬を残しておくのが常套手段であるのだ。本来常套手段とは無縁の彼ではあるが、少なくともそれだけは忠実に守っていたのだ。

「しかし、ナカサト殿。この状況で本当にイシガヤ殿は生きておられるのでしょうか？」

『イシガヤ殿』こういった末端の兵士はイシガヤが自分の所属している会社の会長のことを知らされていないのだ。イシガヤのことを知っているのは社内でも上層部だけである。さすがに隠密行動をするときに顔が知られているのは都合が悪い。

「大丈夫。あの馬鹿、一年戦争時のア・バオア・クー戦とかにセイバーフィッシュとかで放り出してもピンピンして生きて帰ってくるから。たかだか12機のMS程度で死にはしないよ。」

暴言である。

「ミキ・・・俺はセイバーフィッシュのほうが絶対MSに乗ってる時より強いぞ。」

「そうだよな～。って！少尉何でまたそんなところに。」

ミキ機のモニターいっぱいイシガヤが映し出されている。不気味である。

「呼ばれた気がしたから来ただけだ。お迎えご苦労。」

「こちらミキ・ナカサト機。全機に通達。バカ発見！繰り返す。バカ発見！」

「手数かけて悪いな。あっちにドム転がってるからそれも回収しておいてくれ。ついでに音声回してくれ。」

「こちら馬鹿者、もといイシガヤだ。怪我ひとつしていないので心配は無用。敵はすでに撤退している。われらもこのまま反転し月へとむかってくれ。じきにパトロール隊が来ないとも限らん。」

「イシガヤさん久しぶりです。ですが、自分の地位ももう少し考えてください。」

「善処する。」

イシガヤがミネルバに怒られる。まあ、当然である。

「会長、すでにこの滄海はすでに万全の状況ですが、建造中の漣の状況に問題がありません。」

「何か？」

「会長の設計した索敵機器を作れる技術者がいないのです。CFGの専門ではないところが痛いですね。唯一作ることが出来るのはグラナダ支部のランス工場長だけですが、来てもらってもかまいませんか？」

「かまわん。索敵機器の技術者が足りないのか・・・ランスに技術者を育てさせろ。もしくはハロルドを使って元ジオンの技術者でも招聘せよ。技術者は数百人単位で抱えてもかまわん。目標としては火星に資源供給用の支部を建造する計画がある。どうせ人が必要になるからちょうどいい。」

「了解しました。」

「春菜はいかがしますか？」

「とりあえず俺の乗艦にしておく。戦力が低下するからゲリラどもには気をつける。特にお前のとこの北海道支部にはどの軍も一切近づけるな。あそこだけは軍需産業に大きく携わっているからな。特に、俺の私物の女神にはお前以下信用なるものしか絶対に近づけるなよ。」

「分かっています。そちらももうじき完成する予定です。ですが、あの女神・・・危険では？」

「そのためのシステムだ。システムはすでに搭載しているのだな？」

「はい。あれがある限り強奪などは出来ません。ご安心を。」

「ああ。すべて任せる。」

そのときドアがたたかれる。

「少尉？何やってんの？もうすぐグラナダだよ。」

「今行く。」

そうやってドアを開ける。

「少尉、カスミちゃんいるんだからミネルバ連れ込んじゃダメなんだからね。」

「分かってる。新型の開発状況の報告を受けていたんだ。」

「でも、少尉には前科があるからね。まあ、ミネルバを襲ったら少尉の命が無いだろうけど。」

イシガヤには一度前科がある。かつての部下であるユミにちょっかいを出していたこと

があるのだ。もっとも、もとはユミから迫ってきたのだが。もちろん現在はそういうことは一切ないし、ユミも今はトモアキに惚れられて妻となっている。

「ミキさん。私もか弱い女ですよ。あなたとは違います。」

「私だってか弱いわよ。ねっ！ドメス？」

いつの間にかいるドメスに話をふる。

「もちろんですよ。ミキ中尉に勝る女の人なんてそうそういませんよ。こう見えて意外と料理も裁縫も上手ですし、可愛い物が好きで内気なんです。」

「『こう見えて意外と』はよけいよ！」

ミキがドメスを小突く。

「・・・負けました。」

「・・・負けている。」

ミネルバとイシガヤが同時につぶやく。ミネルバは料理も裁縫もてんでダメだし。イシガヤの妻のカスミはあまり料理をしてくれない。というより、自分の道に行くタイプであるからそういう面倒なことはしない。もっとも、イシガヤは料理をしてもらうことには興味がないが。

「・・・でも、人それぞれですからね。」

ミネルバが乾いた笑いをしながらそういう。

「・・・でも、カスミ君のほうが何十倍もいい！ぐわ！」

イシガヤがそう叫んだ瞬間、足の甲を踏み潰される。そう、踏まれると言うより踏み潰されるといったほうがあっている。

「何か言いました？タカノブ・イシガヤ少尉？」

「いや・・・俺もカスミ君よりミキ君みたいな奥さんがほしかったな。ぐわ！」

さらにぐりぐりとされる。

「空耳かしら？」

「カスミ君も最高だが、ミキ君の夫になるやつも最高だろうな！」

「そう、それでよし。」

やっと解放される。

「会長。以後お言葉にはお気をつけください。」

「・・・よく分かった。ミネルバも仕事が出来るとても魅力的な女性だぞ、うん。ぐわ！」

「そういったことは軽々しく言わないことです。」

ミネルバにも踏まれる。

「・・・女心と秋の空。・・・ドメス、俺の屍は拾っておいてくれ。」

遠い目をしながら言う。

「・・・善処します。」

ドメスもどう対処していいかわからずそうつぶやくのみであった。

月

「滄海、入港します。」

「しんがりご苦労。」

「この俺が殺されるたまかよ。ミネルバ、俺がいない間のことは任せるからな。」

「了解しました。」

「ではブラック。ブレックス准将を紹介しよう。」

そういつて、CPG社の応接室に案内する。

「ほう。あなたが高名な黒い竜巻ことブラック・スター殿ですか？」

「はい。はじめましてブレックス・フォーラ准将閣下。微力ながら閣下の志のお手伝いをさせていただきます。」

「ありがとう。戦争後どちらに？」

さりげなく探りを入れる。

「はい。イシガヤ会長の庇護を受けまして火星近辺の資源調査船団の護衛を勤めておりました。」

「火星ですか？あそこにはジオン残党がいると聞きますが？」

「ええ。とはいっても、われわれを襲うほどの気骨があるものはいないようで平穏な警備をするのみでした。」

「何かジオン残党についてお知りになったことは？」

「アクシズの指導者はマハラジャ・カーン提督からご息女のハマーン・カーンに変わったと聞きますが。私の見るところなかなか国民はまとまっているようですが、戦力はどうでしょう。もともと優秀なパイロットはそう多くいない辺境基地ですし、MSや戦艦にしても、資源がいかほどあるものか。一個大隊程度の戦力の維持がせいぜいではないのでしょうか？」

「なかなか詳しいですな。」

「上官であったキシリア閣下とアクシズのカーン提督はそれなりに昵懇の仲でしたので当然知っております。」

「接触は無いのですか？」

「残念ながら、警備隊の司令がゲリラのような輩と昵懇になるわけにはいきません。」

ブレックスは疑いを解く。アクシズにいたのであればこう淡々と一切の表情の変化も無く嘘をつけるわけではないと思ったのである。ブラックはそれだけ実直な青年に見えるのだ。しかし、これは誤解である。ブラックの感情はもともと人と比べて少なく、それにくわえて感情の起伏が甚だしく少ないので人間通なひとでさえ、彼の表情は読めないのだ。それに、おそらく嘘発見器でさえも嘘かどうかの区別はつくまい。

「イシガヤ殿もアクシズについて何か知りませんか？」

「そうですね。確かに人道的な立場で水および食料、日用品などの貿易はしていますけど、兵器類や重金属、化学薬品などはそれほど注文はされませんね。もっとも、アクシズは資源も少ないですし、そんなものまで購入する金が無いといったところが本当のところでしょうね。取引額が一兆円に満たないですから。」

これは事実である。イシガヤが軍需面で提供しているのは工業製品ではなく最新技術と技術者であるからだ。しかも、アクシズには金がないためにほとんど原価で提供しているのだ。もちろん CPGの金ではなく、兆に上るイシガヤの個人的な資産からであるが……。注意しておくが、CPGおよびイシガヤは、主に日本円を使用している。

「なるほど。アクシズは当方に協力する意思は？」

「さぁ？内部事情までは知りませんよ。しかし、一個大隊程度の戦力で出てきますかね？」

「どちらにせよ、自力でやるしかないようですね。」

「兵書もそうっております。」

「そのための CFG です。私はこれからいろいろと用がありまして、以後連絡はグラナダのオニワにしてください。私がいなくても彼がすべてやりますので。それと、スター司令も艦長就任の挨拶などありますので失礼させていただきます。」

「はい。これからもご協力してください。」

「さすがだな、イシガヤ。」

「なに、これでもなりあがってきた戦争商人だ。あの程度はどうということはないさ。」

「大佐！お久しぶりです。」

「ライか。久しいな。」

滄海の搭乗口でブロンドの美青年が出迎える。彼の名はライ・クラウン。かつての戦争でブラックの副官を務めた百戦錬磨の指揮官である。ブラックの声望が高いのも、彼の活躍があつてこそである。MSでブラックという司令官が出撃している間の艦の指揮、あるいは艦隊指揮までも彼が一手に受け持っていたことがしばしばあつたのである。また、反対に彼が MS 隊の指揮を取ることもしばしばあつたのだ。そして、現在は CFG の副会長補佐をしている。

「よう、ブラック。元気だったか？」

「ドレンか。久しいな。」

同様に体格がよく、無精ヒゲを生やした三十歳前半くらいの男が言う。彼もまたブラックの旗下で勇戦したパイロットでドレン・フルーレという男だ。撃墜数は四十機を超え、指揮能力も相応のものであつたが、現在はサイド 6 の CFG の自衛隊全 8 機の MS 部隊を指揮していたはずである。

「お久しぶりです。」

「イセサキ殿、もといイシガヤ婦人が、久しいな。」

「イシガヤ婦人はちょっと・・・カスミで結構です。」

同様に日本女性がそういう。彼女はイシガヤの妻であるが、やはり一年戦争において三十機以上の戦果を挙げたエースである。

「おいおい、そりゃ無よ。恥ずかしいのは分かるが・・・。」

「冗談よ。」

「冷や冷やもんだ。久しいなカスミ君。五ヶ月ぶりか？元気してたか？とりあえず、ブラック、かつてのメンバーに招集をかけておいた。ともに戦うのに快く同意してくれたから戦力は十分だな。」

「までやイシガヤ！快くってより半ば無理やりじゃねえか！お前は妻同伴だからいいが、俺とハニーは離れ離れだぜ。」

「まあまあ。サイレントさんには了解とつてあるし。言い値でボーナス弾むからさ。」

「そんならいいや。十億くらいもらうからな。」

「ああ。問題ない。お前さんとサイレントさん両方に十億で問題ないか？」

ドレンはかなり吹っかけたつもりであつたが、簡単に了解された上にさらに倍増である。皮肉にもならない。

「ブラックとかは軍人だからともかくとしてお前さんは民間人だしな。」

「・・・いくらなんでも・・・。」

カスミがつぶやく。確かに友人だからといってボーナスを弾みすぎである。とはいって、彼女自身美術を好み、戦後は美術教師をしていた傍らしばしば創作活動をしているのだが、購入した絵画がいくつかあり、美術館も作ったので、すでに出費はウン百億を超えている。・・・まあ、それさえもイシガヤにとっては微々たる物である。

「カスミ君、二十億でも安いくらいだ。ドレンが戦場に出れば少なくとも二十機くらいは敵を撃墜してくれるだろ。仮に素人を乗せて戦わせて、たいした戦果も挙げずに搭乗機を落とされるとMS建造費の百億単位の痛手だ。しゃれにならん。比べれば20億の安さが分かるだろう？今日、スポーツ選手だってそれくらいもらっている。」

「・・・それはわかるけど・・・。」

「と、まあそういうことなので万事問題なしと。」

半ば無理やり納得させる。こういうところはある意味非人道的であるので話を早く打ち切るに限る。下手に士気低下をまねいてはいけないのだ。

ともかくも艦橋に移動する。

「ところで作戦だが・・・イシガヤ、何か意見は？」

「そうだな。准将はすぐにグリプス偵察に向かうそうだ。俺たちは准将とは別行動をしよう。とりえず戦力の増強が先決だが・・・あいにく巡洋艦二隻はまだ建造中だしな。現在は春菜、滄海の二隻しかない。ついでに言うが、春菜は旧式艦だから新造艦建造後はCPGの護衛艦に戻す。」

「そうか。ティターンあたりからマゼラン級の戦艦の奪取は出来ないか？」

「あいにく。それはちょっと無理だろ。地上には連邦に技術将官の知り合いがいるが、宇宙にはそれほど協力してもらえないやつはいない。」

「ならば強奪をする。」

ブラックが淡々と言う。

「大佐！あんたそんな無茶言うなんて少尉じゃないんだから！」

「ミキ中尉の言うとおりです。」

ドメスも続ける。

「だが面白そうじゃねえか。」

「右に同じく。」

ドレンとイシガヤは賛成する。

「ともかく検討すべきです。大佐の考えは？」

ライが話を促す。

「春菜搭載のコムサイだが、計算上マゼラン改級にぶつかってもなんら問題なく敵艦最深部の装甲版に到達することが可能だ。また、戦艦級にしても乗員は三百人未満だ。私、ドレン、ドメス以下三十名ほどで白兵戦を展開すればやれないことも無い。」

「それじゃあ俺も出番があるな。」

「お前が？俺様とお前じゃあ大人と子供くらいの体格差があるぜ？」

ドレンが疑問に思ったことを口に出す。確かにイシガヤは背が低い。ドレンが190センチほどあるのに対して、イシガヤは160センチに届かないのだ。チビとっていい。

「格闘技は苦手だが、殺し合いは得意だぞ。」

「信じらんねえええええ！」

そういったドレンの額にすでに銃口が向けられている。突然のことに叫ぶしかない。

「パン！」

「うぎゃあああああ！」

ドレンが叫ぶ。もちろん発砲はしていない。口でパンといただけである。

「・・・イシガヤ少尉、趣味悪くない？」

カスミが言う。艦内ではイシガヤ少尉というように言っている。・・・言わなくてもそうするだろうが・・・。さすがに艦内で夫婦というのをおおっぴらにするのは良くないのだ。

「つま、まあ、細かいことは気にしないでくれ。ドレンも悪かった。」

「びっくりした！寿命が縮まるぜ！おい！」

「・・・ではイシガヤにも手伝ってもらおう。各員の殺人経験は？」

「生身の人を殺したことはありません。」

ドメスが言う。

「少し陸戦したこともあるけどよ、二、三人くらいじゃないか？」

ドレンが続ける。

「・・・私は経験が無いな。イシガヤは？」

ブラックが尋ねる。

「百人くらいかそれ以上か？」

「おいおい、MSでやったにしても多くないか？」

「・・・ドレン。MSで殺した数はそれどころじゃないぞ。あいにく大戦初期に対人兵器を使用したこともある。百人以上というのはせいぜい携行武器で殺した数だ。」

さすがに絶句する。殺しすぎなのだ。激戦区であってさえこれだけ殺せる人物は少ない。

「よし。では二隊を編成し私とイシガヤで各隊の指揮をしよう。しかし、他に人材はいないものか？」

「安心してくれ。俺に心当たりがある。」

「そうか。では人材の確保はイシガヤに一任する。私は作戦要綱を考えよう。」

「まった！お前らそんな簡単に決めていいのか？」

考えなしのドレンでさえ二人の即決に疑問を感じる。

「俺の人材確保に問題あるか？」

物資確保、人材確保などに優れるイシガヤが言う。現にドレン、カスミ、ライの優れた人材が『確保』されている。

「・・・いや。」

「私の作戦立案に問題があるのか？」

鬼謀の才を持つブラックが言う。

「・・・・・・・・いや。」

「ならば問題ない。」

すでにドレンの出る幕ではないらしい。完全に口を封じられる。

「では、解散。」

「さてハロルド、戦艦を制圧しうるだけの知識と戦闘力を持った人物はいかほどいる？」

「はっ！少佐と私、後はウエンの三名だけです。」

「少佐はよせ。お前には、今回はあくまでグラナダにいてもらわねばならぬし、ウエンは火星か・・・。では、私とブラックが指揮して戦艦制圧に十分役に立つものは？」

「ではお答えします、イシガヤ殿。暗殺、工作に十分に役に立つものは十名、指揮と使い方だけで役に立つものは三十八名、工作員としてのみ役に立つ可能性があるものは四十三名です。うち、すぐに動員可能なものは八ス力率いる『魔眼』の十五名と、私の指揮下の五名のみです。」

「そうか。では『魔眼』を動員するとして。お前の手勢はグラナダ支部の維持に使い、私の手勢も加えれば二十五名確保できる。十分だ。」

「了解であります。しかしイシガヤ殿の手勢は諜報戦向けでは？」

「戦艦の制圧には味方との通信伝達の円滑さに加え敵の通信の妨害も必要になる。十分

だ。」

「失礼致しました。」

イシガヤの配下には五百人ほどの特殊工作員が存在する。かつてのジオン公国の支配者の一族であり少将であったキシリアの配下の生き残りがおおく、諜報、暗殺、工作などありとあらゆる特殊技能を持ったものがおおい。戦後職を失ったところをイシガヤに登用されたのだ。また、一小隊は二十人ほどで構成され、各隊共に専門化されている。この五百人の隊の副将たるはハロルドという青年でありイシガヤこそが大将である。このメンバーの力によって、CPGの今日があるとも言える。

「では、ハチスカに伝えておけ。三日後に入港中の春菜に乗艦。各装備はそれまでに整えること。また、仕事しだいで報酬は十分に弾むとな。」

こういう特殊技能者は手厚い待遇をするに限る。もともと数が少ないのであるし、万一敵に寝返られると味方の手の内が完全にばれてしまうからである。また、表立った賞は与えることが出来ないためにやはり金銭に頼るしかない。

「了解いたしました。」

「そうだ。言い忘れたが、私のことを間違ってもかつての階級で少佐とはいわずに会長とも言わせるな。イシガヤ殿とでも言わせるようにしろ。また、臨時で雇った人材ということにせよ。私の腹心だと知れると都合が悪い。」

「はっ！」

「ついでにまた忘れていたが、ミネバ閣下へ親書と我々の現状、ティターンズ、連邦政府の動向、連邦の新型の各設計図の情報を長距離レーザー通信で送っておけ。」

「エウゴのものは？」

「送るな。さすがにこちらの手が筒抜けになるのは良くない。どうせその情報を利用するのはハマーン様だ。俺は今でもザビ家の、ミネバ閣下の臣下であるが、ハマーン様の私兵ではない。」

「ハチスカ以下十五名到着いたしました。」

「ご苦労。今回の作戦の成功はお前たちの肩にかかっている。よろしく頼むぞ。」

「はっ！粉骨砕身の覚悟であります。」

十五名の魔眼の隊員が敬礼する。一糸乱れず壮観ではあるが・・・。

「堅苦しくするな。ここでの俺はお気楽な艦長だ。それでお前たちは寄せ集めと言う設定だからな。」

「わかりました。そんじゃあイシガヤ殿、お任せください。でもですなあ、これほどの小気味のいい作戦はランバ・ラル大尉の作戦以来ですぜ。」

「あの大尉か。惜しい人を亡くしたな。面識は無いのだが、おうわさはかねがね聞かせてもらっていた。」

「ラル大尉の隊から転属になったときは落ち込みもしましたよ。おかげで今も生きているわけですが。」

「言葉使いが戻っているぞ。」

「おおっと。こりゃ失礼しやした。」

「では、大佐のところへ向かうとするか。」

そういつて春菜艦橋に向かう。

「ブラック、連れてきたぞ。」

イシガヤは途中自分の手勢を加えて二十五名を紹介する。

「殺人プロ3名、工作のプロ5名、諜報のプロ5名、後の12名はオールマイティーにそこそこつかえる。確認済みだ。」

「そうか。確かに入室した直後にほとんどの者が私がテーブルの下に構える拳銃と、隠し置いた伏兵に気がついているようであった。」

そういつてふと思う。中でもイシガヤは入室直後にわずかに移動し、カスミの壁になりうる位置にいる。偶然でないとするれば、イシガヤの能力も思っていた以上に高いのかもしれない。

「なあおいブラック！いったいどこに伏兵がいるんだ！？」

魔眼のメンバーが半ばあきれることを言うのはドレンである。この期に及んでどこに伏兵がいるかわからないらしい。

「ドレン……。ライ、教えてやれ。イシガヤ、このメンバーをどう分ける。ある程度、グループになっているのであろう？」

「そうだな。分けるとすればハチスカ以下五名はひとくくりにしたほうがいい。一応ハチスカがこいつらのリーダーってことにしてある。後、琥珀、梟、鷹という三名は俺の手元で使いたい。気が合うからな。他は特に区別の必要はないんじゃないか？」

「……………そうか。」

名前からして偽名であるし、三名はおそらくイシガヤの手勢なのだと察する。ただ、他のものまでそうであるとは分からないらしい。

「ではハチスカ殿、私がブラック・スターだ。よろしく頼む。」

「へい。金さえもらえばなんだってやりますぜ。」

「しっかしよう、ハチスカって変わった名前だなあ。顔からするとアジア系みたいだけだよ。」

「ドレン……。ハチスカ殿はあの高名な蜂須賀小六殿の御子孫か？」

「よくご存知で。あっしはこれでも家柄だけは悪くありませんぜ。」

とは言うものの、微妙である。蜂須賀家は日本国の江戸時代に大名であった家であるし、明治期には爵位ももらっている。唯……初代の蜂須賀小六は盗賊の頭のようなものだったといわれている。しかし、それゆえに今回の作戦には役に立つのかもしれない。

「高名な蜂須賀殿の御子孫であれば心強い。」

「お任せください。」

「では、作戦要綱を説明する。イシガヤの調べによると、マゼラン旧戦艦一隻が処女航海後 D104暗礁空域で試験運用を行うとのことだ。後続の艦艇も無くここから近い狙うには最も都合が良い。これを強奪する。」

その後をライが続ける。

「問題ですが、今回は通常の強奪作戦とは違い宇宙空間で、かつ戦闘中に戦艦を強奪するものであります。これには古今あまり例がありません。また、戦艦はあくまで制圧が目的であり撃沈するわけにも行きません。そして、この作戦に投入可能な戦力が、春菜と MS 二機のみということが重大な問題です。」

そこで装備についてイシガヤが口を挟む。

「そうだな。あくまで敵に気づかれずに隠密行動をするには少数で無きゃならん。春菜は電波妨害およびミノフスキー粒子の散布が出来るに加え、長距離通信、高精度索敵にも優れている。これ一隻であれば敵に気づかれる心配はまず無い。また、MS だが、敵艦制圧用の機材に加え、捕獲艦艇の緊急修理用の機材、また、前述の装備を搭載した結果、搭載可能機数が二機になっちゃった。無理に搭載すれば、艦速が低下する恐れがあるので二機のみで作戦を行ってくれ。おっと、忘れていたが、突入に関しては『楯』という装備を搭載しておいた。」

「ふむ。コムサイの突入は、通信室の近くを狙う。次に兵員についてだが、イシガヤを隊長とする五名で敵艦の第一、第二通信室を押さえてもらう。私を隊長とした十五名が敵

機関部の制圧に向かい、ドメスを隊長とする五名がコムサイの維持、各隊の統制を行う。兵員の割り当てはイシガヤに一任する。敵艦およびMS隊に対しては春菜の指揮はライ、MSはナカサト、イセサキ兩名が対応せよ。」

「よし！コムサイは俺が動かす。」

そして、細部をブラックが説明して作戦会議は終了した。

「前方、マゼラン艦一隻発見しました。」

「よし。チカゲ、艦内にそう連絡せよ。シノンはよりよく索敵だ。ライ、ここは任せたぞ。」

イシガヤはそう言い残しコムサイへ向かう。

「諸君、鴨が葱しょってやってきた。」

「・・・イシガヤ。諸君、敵はマゼラン一隻とはいえティターンズのエリートである。くれぐれもそのことを失念しないようにせよ。」

ブラックがそうまとめる。

「コムサイ発進！」

春菜よりコムサイが切り離される。このコムサイは強襲用に改造され、敵艦にぶちあたっても大丈夫なほどの装甲である。通常、敵艦にぶち当たった場合摩擦熱によって装甲版が解け溶接されたようになるのだが、形状と機体表面の特殊コーティングにより装甲の溶解を防ぐことに成功している。

「みんながんばってね！」

「気をつけて。」

艦をのつとる間に敵MS隊を防ぐために出撃したミキ中尉とカスミ中尉に送り出される。

「各隊、再度任務の確認をする。第一班15人は、私ことブラックの指揮の下敵艦エンジン部を制圧する。第二班10人はドメス中尉の指揮の下コムサイ周辺の死守。そして、第三班のイシガヤとドレンは通信ブロックの制圧を任せる。」

「了解。」

皆一斉にうなずく。さすがに緊張しているのだ。容易ではない作戦の上に人を殺しに行くのである。ハチスカでさえ顔が引き締まっている。中でまだのんきそうな顔をしているのはイシガヤとドレンだけである。また、緊急発進したMSが接近してくる。こちらはコムサイである。明らかに戦力差が大きい。並みの操艦ではマゼランに到達する前に打ち落とされてしまうのだ。だが、そこは強運のイシガヤである。それに加えて戦闘機のようなものの操縦はうまい。

「さて、MSどもは何とかかわしたが、対空機銃が来るぞ！しかし厚い弾幕だなあ。」

四機MSの攻撃をかわすイシガヤの腕はかなりのものである。ただ、そのイシガヤが言うとおり、突入ポイントに限って弾幕が厚いのである。ほかはそうでもないのだが、ここだけはかなりの腕前の人間が指揮をとっているのだろう。しかし、いまさら突入ポイントを変えるわけにも行かない。躊躇している余裕はないのだ。

「いざ行かん牛頭馬頭邏卒(ごずめずらそつ)を連れにして修羅のごとくに死をば与えん！舌ぁ嚙むなよ！」

イシガヤが怒鳴る。その直後、マゼランの艦内は大混乱に陥る。まさか突っ込んでくるとは思っていなかったのだ。それが通常の判断である。

「・・・作戦開始。」

「第二班は我に続け！」

イシガヤ率いる第三班5名は通信室を目指す。幸い、コムサイの突入角もよく、通信室までは距離にしてわずか30mである。直線通路であるために、道の向こう側から銃撃を

受けた場合、避けるのは困難であるがそれもない。すべてはイシガヤの操縦技術もしくは強運の賜物である。すぐに通信室にたどり着く。

「鷹はここの確保！また、琥珀は漣とコムサイへの通信確保。」

鷹と琥珀は今回動員されているイシガヤの手勢の中ではダントツのプロである。この通信室は守りやすい配置であるので二人だけでもなんとかなるであろう。

「ドレン、梟は我に続け。第二通信室を確保する。」

「・・・我々はエンジン部の確保に向かう。各員、心せよ。」

そう、例え通信室を確保しても、エンジン部ないし、艦橋の確保をしないとどうにもならない。艦橋の確保が定石ではあるが、エンジン部の方が近い以上そちらを優先するに限る。艦橋は敵MS撃破後、ミキ機にでも制圧させればいだけである。

「御武運を。ここは私達10名におまかせください。」

ドメスがブラックを激励する。エンジン部には戦闘要員かどうかは別として、人数だけは多いのだ。少なくとも30人以上である。さらに通路は入り組んでいるため、激烈な抵抗が予想される。たいては、ドメスの方はコムサイの確保であるが、こちらの方が幾分ましである。コムサイという要塞があるのだ。

「楯前進。」

ここでいう楯とは、分厚い装甲板に車輪とモーターをつけたものである。一個の大きさはさほどでもなく、艦内通路で使えるような設計であり、カーブ、階段、エレベーターなどでも運用可能であるところが心強い。

「大佐！敵兵発見！」

「マシンガンで応戦。」

ブラック自身も楯についている銃眼から応戦する。

「しかしよお。イシガヤ、おまえよくそうポンポン人殺せるな。罪悪感を感じねえのか？」

「感じるぞ？血は嫌いだし。血や傷じっくり見てると倒れるから。」

そう首を傾げながらまた一人を銃殺する。

「いや、今だってかるーく一人撃ち殺したじゃねえか。」

「？・・・敵兵だろ？」

「そうじゃなくてだな！敵兵も人だろ？」

「？・・・敵兵は兵士だろ？殺さなければ殺される。ちなみに、俺だって民間人と降伏者と非武装者はめったに殺さない。」

「いや、おまえさっきただの作業員を殺してただろ～！」

「一人は溶接機器を所持していた。あれでなら十分人を殺せた。また、もう一人は懐にカッターを所持していた。以上。」

反論は容易く却下される。しかし、ここでドレンは『イシガヤを敵に回すと危険』ということ悟った。なまじ感情のないブラックの数倍危険なのだ。

「ぼさっとしてると死ぬぞ。」

ドレンを狙っていた伏兵を撃つ。即死でなかったためにさらに近づいてクナイで咽を掻き切るとどめを刺す。

「う～わ！気持ち悪いい～！」

「とはいってもなあ。」

そう言ってクナイを投げてまた一人倒す。無論胸を突き刺してとどめを刺す。副通信室までドレンと梟の出番はなかったといって過言ではない。

「なにもしねえうちに着いちまったぜ。どうするよ？」

「お前たちはこの確保を頼む。」

「イシガヤ、お前はどうするよ？」

「つゆ払いでもしてくるさ。」

マゼランの中で戦闘が行われる一方、MS隊も戦闘を開始する。敵はハイザックと三機のジムクウエルである。旧式である分戦闘はいくらか楽ではあるが、やはり油断するわけには行かない。しかし、ハイザックの軌道は編隊とは明らかにずれている。

「カスミちゃん！あの機体なんかおかしくない？」

「そういえば……。仕掛けてみます！」

不自然なコースをとるハイザックを狙い撃ちする。カスミ中尉の射撃は一年戦争で鍛え上げられただけあって正確である。

「なっ！回避した！？」

カスミ中尉は一瞬驚く。しかし相手も選ばれたパイロットであることを思い出し再度攻撃を加える。しかし、それもまたデフリを楯に防御される。

「くっ！」

ハイザックも撃ってくる。カスミには及ばないがなかなか正確である。しかし、わざわざデフリ地帯に向かう不自然さは変わらない。僚機とは違い積極的な攻撃をするつもりはないようだ。

「カスミちゃん、あいつに接触してみるわ！ほかの二機は任せるからね！」

「了解しました。」

そうは言っても、簡単なわけではない。三機のジムクウエルに加え、敵艦への牽制をしなければならぬのだ。いくらブラック達が敵艦内で白兵戦を展開しているとはいえ、制圧には時間がかかる。それまでは艦砲は生きているも同然である。それを春菜とカスミのジム で対応しなければならない。

「イセサキ中尉、わずか三機とはいえ中尉は乗り慣れていない機体の上に七年のブランクもあります。敵はティターンズですから牽制すれば十分です。」

「言われるまでもありません。でも、不慣れなものには慣れてるから。」

確かにそうである。七年前の戦争では学徒動員され完全な教育を受ける前に戦場にでているし、よりによってイシガヤの指揮下にはいったために始終機体を改造されて慣れるどころではなかったのだ。

「対空弾幕を厚くせよ！」

「クラウン中尉、少尉の通信ジャックシステムは使えない？」

「やってみます。総員耳栓！」

直後スピーカーから大音量の不協和音が流れ出る。イシガヤ本人が使えば敵にのみこれを行うことができるが、素人のライが使えばこれが限界である。しかし、それを知っている以上味方が混乱する事はない。そして、まず一機の撃破に成功する。

「だぁ～！うっさいよライ！次使うの禁止だからね！ミキ機敵と接触します。」

ようやく捕捉したハイザックに通信回線を繋げる。さすがにイシガヤのドムである。こういう作業には恐ろしく向いている。

「こちらエウーゴ。あんた戦う気あるの！」

・・・直接すぎである。

「エウーゴですか？戦う気はあまりありません。ただし攻撃を受ければ反撃はします。」

「投降する気？」

「はい。受け入れてくださるでしょうか？」

「信じられないわ。証拠があればうけいれる。」

「わかりました。」

通信相手が人のよさそうな女性であるのに安心し、ハイザックはビームライフルを構えてジムクゥエルに向かう。

「中尉！何をしている！早くムサイをたたけ！」

ティターンズ兵が怒鳴る。無理もない。彼にはハイザックがいままで遊んでいるようにしか見えなかったのだ。

「ごめんなさい大尉。悪く思わないでください。」

ジムクゥエルの脚部をライフルで打ち抜いた後、大量のトリモチを放つ。これで動きがとれなくなる。

「ぐわあ！何をするか中尉！」

「私は謀反します。バスク・オムは嫌いですから。」

「そんなことで！」

「私は『悪いこと』をする気はありませんから。」

「曹長！中尉を撃て！」

大尉は残っている部下に指示を出す。

「遅いですよ！」

ハイザックのライフルが一機のジムクゥエルの両腕を粉砕する。しかし、さすがにもう一機の攻撃には気が回らなかったようだ。

「あんた！投降するんなら勝手に死なないでよね！」

それをミキがシールドでかばい、ライフルで牽制したところをカスミがガトリングで撃ち抜く。さすがに一年戦争の戦友である。息のあった連携攻撃だ。

「大佐殿！エンジン部にいるのは32人。うち戦闘員らしき奴が15人。後は素人が銃持ってるようなもんですぜ。」

「ふむ。各員、エンジン部に下手に攻撃を当てるな。敵は左右に展開し鶴翼の陣を敷いている。故に、楯を使い私以下五名があこのエリアに突撃し橋頭堡を確保する。想定時間は10秒。ハチスカ、援護を任せる。」

「了解ですぜ。」

そういった瞬間銃撃がはしる。左翼からである。

「作戦変更だ。一気に左翼を攻略し敵陣を崩す。」

「ですが左翼は今銃撃をしてきたところです。強い抵抗が予想されますが。」

一人の兵が言う。

「否。今の火線は一人ではなく少なくとも五名以上の発砲だ。連度が低い。攻めるべきである。」

「どうしてです？」

「そりゃ今撃ってくるってのは素人だからに決まってる。此処にいる分にはぜってい当てることなんかできねえのに撃ってきたんだかな。しかも、あんなにばらついた攻撃じゃああたるもんもあたらねえ。」

「ということだ。攻撃を開始する。」

まさに楯の真価が発揮される。対戦車砲でもなければ弾き返す装甲を持っているために、ここエンジン部では無敵である。まさか敵もエンジン部でそんなものを使うわけにはいかないからだ。

「楯二枚は背後の防御。ハチスカ以下五名はそこにて支援。」

楯は三枚しかない以上左翼に対して楯は一枚しか使えないが、勝算は十分にある。イシ

ガヤの持ってきた図面によれば、敵の左翼部分には誘爆などの恐れのある物は無いのに加え、相手からこちらに向かってはそれがあるために敵が使えるのはせいぜい小威力のマシンガン程度である。また、間取りの関係上最大でも十名の配置しか不可能である。スナイパーをおける場所も無い。

「・・・突撃。」

号令一下突撃が敢行される。まずは炸裂弾を数発ぶち込み敵を減少させ、ついでマシンガンによる白兵戦に移る。

「・・・。」

ブラックは炸裂弾でやられたのであろう重傷を負いながらなお抵抗しようとしていた士官を日本刀で斬る。此処まで接近されてなお抵抗する志は見事であるが、それだけである。

「大佐、見事な刀ですね。」

「ふむ。無名だが村正だ。」

といわれても、日本刀に詳しくない彼には何のことはわからない。ともかくも戦闘中である。敵の殲滅にすぐにもどる。

「大佐殿、殲滅終了。右翼からの攻撃は取りあえず此処の壁で防げます。」

「撃破総数は？」

「八名です。」

「後二十四名か。右翼の狙撃が出来そうな場所があったな。」

「はい。しかし、鉄製のパイプが三本邪魔をされていて不可能です。」

「太さは？」

「それほどでもありませんが、あいにく切断可能なものはありません。」

「・・・知っているか？使うもの次第で日本刀は鉄をも切れる。」

そういつてブラックはパイプの元に向かう。

「これか・・・。」

一呼吸の後、パイプを斬って捨てる。幼少から剣術を習っていただけあってその腕はかなりのものである。もちろん周囲からは驚嘆の声が上がる。日本の時代劇は宇宙世紀である現在も好評で、世界中でサムライに憧れる若者も少なくないが、スポーツとしては柔道のほうが日本のものでは主流であるし、日本刀を作る人間もかなり少なくなっているのだ。そんな中でこれだけの刀と技量をもつものはそうはいないのだ。

「その刀はどこで手に入れたのです？」

「知らん。これは五百年ほど前の、日本が江戸時代であったころから当家にある太刀の一本に過ぎん。」

「そんな高価そうなものを使って良いんですか？」

「所詮無名だ。名のある刀はしまっている。」

さすがに江戸時代に62万石もの太守であった仙台伊達家の子孫だけはある。元は分家とはいえ由緒正しい家であり伊達家縁（博物館行きクラス）の品も多数ある。また、先年、没落していた伊達家当主を保護し家督を譲ってもらい彼がはるか昔から日本に武威を示した伊達家の現当主である。

「ともかく狙撃を開始しろ。三名は此処で固定。残りはハチスカと合流し機関部を背後にして敵に接近を試みる。」

「了解！」

「はてさて、敵さんがうじゃうじゃとこないあたりがちょうど良い。」

そういいながら、敵艦だというのに通路を傍若無人に歩く。

「止まれ！敵のくせにどうしてこんなところを歩いている！」

「すみません！」

謝られた仕官は一瞬戸惑いを見せる。・・・普通侵入者が謝るはずが無いからだ。

「はい、さようなら。」

イシガヤはためらわずにその士官の肩間を打ち抜く。戦場での迷いはそく、死につながる。然らば、敵を迷わせればおのずと生につながるのだ。

「くっ！サイズが合わん。」

死体を隅の隙間に押し込んでから敵の服を頂戴しようとして気付く。イシガヤの身長は160センチに足りないのだ。女物ならともかく、普通の男の着ている服ではぶかぶかである。しかたがないので、上着を羽織るだけにする。それだけでもいくらかの目くらましにはなるのだ。

「さて・・・。策士策に溺れるとはこのことか・・・。」

着替えに気をとられてしまいつい周囲への警戒を怠った挙句、前後を囲まれてしまったのだ。もっとも、まだ敵がそうとは気づいていないだけましであるが・・・。

「そのチビどうした？」

さすがに下手な行動は取れない。

「いえ、敵がここまで侵入しているようです・・・。」

「どっちへいった？」

「右へ曲がりました。」

うつむきながら答える。

「そうか。しかし、貴様見かけん顔だな。担当は？」

「暗殺。」

さすがに観念して攻勢に移る。まずは『普通』に一人殺す。続いてチャフグレネードを放り投げ目の前の下士官室に滑り込む。

「うぬ！」

下士官室にいた見知った兵をみて一瞬動きが止まる。さすがにドアにロックをかけたが、ためらいは死につながりかねない。

「フライト、キース。わが軍門に下るか死か選ばしてやる。すぐ答える。」

「イシガヤさん！」

そういった彼等の目前を銃弾が突き抜ける。

「早くしろ！」

「えっ！死にたくないですよ！」

そう答えたフライトとキースに睡眠薬を仕込んだ仕込み針で眠らせる。さすがにこういった道具は常に携帯している。しかし万全ではない。薬は効きづらい人間もいる以上確実にとどめをさすに限るのだが・・・子悪魔の異名を持つイシガヤも人間なのだ。かつての戦友だったフライトとキースをおいそれと殺すことはためらわれたのだ。無論、刃向わなければだが。

「さて・・・。」

すぐにほかの兵がくるはずなので、ドアをあけたら小銃が発砲する仕掛けを施し通気口を使いブリッジに向かう。こういうときは体の小さいことが役に立つ。

「おいドメス！状況はどうなってんだ！？」

確保してる通信室からドレンがわめく。本来なら通信室の奪還に敵兵がうじゃうじゃくるはずなのだが、それがほとんどこないのだ。

「現在ブラック隊はエンジン部の確保を行っているはずですが、ですけど現在連絡が取れません。おそらく通信機の線が何かの拍子に切れたのだと思いますよ。」

「無線は？」

「ミノフスキー粒子の影響で使えませんよ。そんなこともわからないんですか？ですが、大佐の隊は予定どおりだと思います。仮に全滅していればここに敵兵が押し寄せてくるはずですからね。」

「じゃあイシガヤから連絡はないか？」

「ありません。そちらにいるんじゃないんですか？」

「いや、露払いに行くって消えちゃった。そんじゃあ外はどうなっている。」

「春菜からのレーザー通信では現在投降したパイロットと機体の収容をおこなっているとのことですよ。また、MS隊は現在弾薬類の再装備中で三分間は動けないとのこと。春菜とこのマゼランは現在岩塊のかげに身を潜め膠着状態です。うわっと！」

銃声が響く。正確に敵兵の親指のみを打ち抜く。親指が無ければ銃はつかえないのだ。仮に撃てば銃の反動を支えきれずに自滅するのが落ちである。やはり、人を直接殺すのはためられるのだ。

「すみません。それでですね、通信室からエンジン室へ有線通信装置を取りにくるか戦況報告するように伝えてくれませんか？それと、艦内の通信装置を使って敵を混乱させる手立てを考えてください。」

「そんなこと言ってもよ……。梟、何とかしてくれや。」

機械がからきしのドレンに代わり梟が通信機を操作する。

「ブラック大佐殿、通信機を受け取りに戻るか戦況の報告を速やかにこなしてください。また、わが隊は現在投降兵が多数のために捕虜の収容に手間取っています。」

どれほどの効果がわからないが、いわゆる流言である。投降兵が多いという流言を流して士気の低下を誘うのだ。しかし、梟はこういう作業向きではないために、この程度の流言が限界である。

「通信機を取りに戻りますか？」

「いや……。閃光弾と煙幕弾はあるか？」

「あります。」

「それを使う。レイダー、フロス、レオンの三名は煙幕弾投下後、全軍退却と偽装し第三班と合流。それ以外はノーマルスーツのメット着用後一切物音も立てるな。また、その際何かものにしがみつけ。」

「了解。」

「用意はいいな。閃光弾投下、続いて煙幕！総員！味方の流言は不利の証拠だ！このブロックより退却する！総員煙幕に隠れ各自退却！」

レイダー以下三名はあたかも大勢が移動しているかのごとく物音を立てながら移動を開始する。敵兵はそれどもめくら撃ちに撃ってくるが、訓練をつんでいる彼らにそうそう当たるものでもない。しかし、敵はことあるうちにバズーカ弾を放つ。運よく動力部には当たらなかったもののレイダーたちは即死である。壁面の一部には血と肉塊がこびりつき、ゆかには内臓が散乱している有様である。しかし、ブラック以下一切の物音を立てず静かに沈黙を保つ。

「やったか？」

「見ろよ、あそこの壁に血が飛び散ってるぜ！」

「マジかよ！」

それを見て安心したのか、メットをはずすものもいるようだ。

「……大佐殿？」

「バズーカを。……ハンムラビ法典曰く、目には目を歯には歯を。」

油断しきった敵にブラックが高威力のバズーカを放つ。バズーカ弾は敵兵をそれマゼランの装甲を貫通し漆黒の宇宙へと連なる道をこじ開ける。その道をさらに広くすべく気流の流れに乗せて二発の手榴弾をほうる。ともなれば、油断した敵兵は宇宙に吸い込まれていくしかないのである。

「ハチスカ、敵は片付いた。楯を気流に乗せ穴をふさぎ、トリモチか何かでとりあえず空気の流れを止める。」

「了解しやした。」

「うーん。なかなか可愛い奴が二人か……。他は男だな。ちょうど麻醉針は後二つ。何かあっても平気だな。見た目対して戦闘力ない奴ばかりだし。それでは！」

マゼランの艦橋に突如として天井から小男が現れる。

「やぁやぁわれこそはその名も高き子悪魔なるぞ！死にたい奴はかかって来い！」

名乗るはいいが、すでに艦長、操舵主、サイドオペレーター、索敵手1名を射殺して、残るは二十歳そこそこの花も恥らう乙女のみである。

「いやぁぁぁぁ！」

「きゃぁぁぁぁ！助けてええええ！」

当然ながらかかってくるはずも無い。

「ふむ。乙女の悲鳴こそまさに至上の調に相違ない。」

「たっ、助けて！」

「殺しはすまいよ。」

「ほ、ほんとう！？」

「眠ってもらうだけさ。」

そうやって一人のオペレーターに麻醉針を放つ。

「めっ、メイ！いやぁ！た、助けてください！殺さないで！なんでもしますから！いい命だけは！何でも言うこと聞きますから！」

「可愛い娘が命乞いとは、いい響きだ。何でもとやらをしたいところだが、いかにせん今は中尉がいる以上どうにもならんしな。ゆえに何もせんが……。そうだな、まず立て！」

「はいっ！」

「ふむ。武器を携帯している可能性があるからな。そのまま服を脱いで下着姿になれ。」

命が惜しいこの策敵手は言われたとおりにする。さすがにここまですれば武器を隠し持っていないことが分かる。投降に見せかけて反撃の隙を狙うやからもいるのだ。保険をかけておくに越したことは無い。

「よし。ではそこから降りて、ここの通信席にこい。」

メイと呼ばれたオペレーターの腕を後ろにした上で手錠をかけた後、彼女をオペレーター一席から引きずりおろして床に置く。わざわざ席を変えさせるのも武器を隠していないか調べるための保険である。

「では、死にたくなければこの艦のブリッジの制圧終了の放送と生存者の投降の呼びかけをせよ。」

「わ、わかりました。」

「さて、妙な動きはするなよ。」

そうやって通信機を繋げてやってからまずは艦橋のドアをロックする。ついで索敵席に座る。ここにも一応の通信装置はついている上に捕まえた索敵手の行動を監視しやすい位置であったからである。さらに、艦内の状況もここなら分かりやすい。

「えー、こちらイシガヤ。艦橋は制圧した。エンジン部の制圧は完了したようだな。これより通信室からブリッジまでの通路に進入可能な扉と通路にはロックをかける。ドレン

たちはブリッジまで来てくれ。あと、エンジン部からコムサイまでの通路も同様にする。残敵の掃討は任せていいよな？」

「ちゃっかり自分が指揮を下す。ブラックは当分艦内放送を使えないだろうし仕方ないからではあるが。」

「なあおい、マジで一人で制圧したのか？」

「当然だ。これも毘沙門天のお導きだな。」

「・・・修羅。」

イシガヤのドレンに対する返答に問題を感じたらしい。珍しくブラックが口をはさむ。確かに毘沙門天などという高位の神の所業というより修羅の行いといったほうが正しく見える惨状である。

「どうして女性二人は殺さなかったんですか？」

「かわいそうだろ？」

ドメスの問いに答える。しかし、ドメスとしては、男は確実に頭部を打ち抜いて殺しているのに女性には情けをかけているにくわえ「かわいそうだろ？」の発言にははなはだ疑問である。

「ですが・・・。」

「まあ、イシガヤが女好きってことだろ。」

と、下着姿の下士官を横目に見ながら、ドレンがさりげなくまとめる。それに気付いたドメスは自分の上着を羽織らせる。

「そんなとこかな。ふむ、美しいものを壊すのは人として失格だからな。」

「少尉、通信で聞こえちゃったからね！カスミちゃんに報告しとこ。」

「なっ！勘弁してくれ～！」

「ナカサト中尉、資材搬入に専念せよ。各員、敵艦を奪取したとはいえ浮き足立つな。これよりこのマゼランは春菜に続きグラナダへの進路をとる。戦闘要員は至急春菜へ移乗！」

ともかくも、ブラックの指示の下この宙域を離脱しエウーゴの拠点もある深淵の闇に浮かぶ月へと向かった。

クリア・サテライト

現在春菜艦内では黒髪の長い投降兵の引見が行われている。

「とりあえず、捕虜は春菜の牢に入れる。」

「わたしもですか～？」

彼女は戦闘中に投降したパイロットである。

「名は？」

「クリア・サテライトといいます～。階級はティターンズでは中尉でした～。」

やたら間延びした口調で先ほどの戦闘中とは別人のように見える。

「レイチェル思い出すなあ。ところで、なんでエウーゴに来る気になった？ご家族は？」

「毒ガスはいけないと思います～！わたし～武器は人を倒すためではなく～守るためにあると思いますから～ティターンズのやり方についていけなかったんです～。」

イシガヤは瞬間眉をひそめる。一年戦争で毒ガス注入部隊の一部を指揮した身としては堪える答えだ。

「・・・そうだな。ああいった過ちはもう二度と起こしたくない・・・。それでご家族はどうするつもりだ？」

「だいじょうぶだとおもいます～。私両親とはまったく血のつながっていない養子ですから～。それに、これでも～両親は連邦でもちょっとは有名な軍人の家系で～上の人に知り合いも多いですから～ティターンズも手は出さないとします～。」

「さて、キース達は・・・まあいいとして、このお嬢さんをどうしたもんか。」

イシガヤが言う。知り合いならともかく、投降者の扱いには難渋する。もっとも、知り合いが別格なのは、気兼ねなく牢屋に放り込めるからである。

「営倉入り？」

ミキが言う。無難である。

「言っていることが正しいか分からないから当分お客として空いている士官室にでもいてもらうのは？」

カスミが言う。正論である。

「副艦長にしよう。」

イシガヤが言う。もはや問題外である。

「少尉～！」

「よく考えて！」

ミキ、カスミ兩名に怒鳴られる。当然である。

「まあまあ。サテライト中尉、君の士官学校での成績は？」

「ええとですねえ、中くらいでした。」

「もっと上じゃないのか？」

疑問に思ったイシガヤが尋ねる。

「筆記試験だと解答欄間違えてしまうんです～。それがなければ満点近くになるんですけど～。」

「要するに、頭はいいがボケだと。まあ、手並みはいいから問題ないな。それで、現春菜の士官クラスは俺とミキ、カスミの三名しかいない。ミキもカスミも艦長向きではないし、ちょうどいいじゃん。」

「なんて適当な・・・。」

兩名頭を抱える。

「でもさ、いい案だとは思わないか？楽できるし。」

「本音が・・・。」

夫の暴言にさらに頭が痛くなるカスミである。

「・・・ええと～。よくわかりませんが春菜の副艦長として精一杯がんばらせてもらいます～！」

「よくわかってる上に承諾してるし。」

ミキが倒れかかる。

「万一敵のスパイであった場合は？あの状況での投降は不自然じゃない？仮にもこの子はエリート中のエリートです。」

「問題ない。この子はスパイではないからな。」

「根拠は？」

「直感。」

「大佐はどう思いますか？」

「許可する。」

「どうしてですか？」

「直感だ。」

・・・艦隊司令がこれである。もっとも、両名とも一応はNTではある。その両名の許可のもと、なし崩し的に春菜の副艦長は決まってしまった。

「総員、入港準備。入港後はCPGの技術部に作業を任せ、三日の休暇を与える。以上。」

・・・クリアには何の拘束も無いようである。

「よ～し！まずは艦長さんの戦歴や作戦の傾向を調べちゃいませよ～！定石ですね～！」

カスミの場合

「イシガヤ少尉は一年戦争で多大な戦果を挙げながら死者を一人も出さなかった名將と聞いたのですけどお、ほんと～ですかあ？」

「・・・・・・・・？名將？」

「どのような作戦をたてられたのですか～？」

「・・・・・・・・？作戦？えっと、私にはちょっとわからないわ。ただ、運が良かっただけだと思うけど。」

ミキの場合

「イシガヤ少尉は名將なんですよ～？」

「あいつが？ただのバカなんじゃないかな？」

「どんな作戦をたてられたのですか～？」

「う～ん。基本的には考え無しのドッキリ・ビックリメカ満載かな？」

ライの場合

「イシガヤ少尉は名將なんですか？」

「微妙ですね。」

「作戦はたてられたのですか？」

「・・・主な作戦は大佐がたてたと記憶してますよ。」

ブラックの場合

「イシガヤ少尉は本当に名將なんですか～？」

「暗愚ではない。だが名將ではあるまい。ただ強運ではある。」

「作戦はあったのですか～？」

「索敵に優れている。故に奇襲される心配がない。また、一撃離脱の機動戦に秀でていて、敵への奇襲が成功しやすい。そして、補給確保は一流だ。」

「質問いいですか～？いままで聞いたことを総合すると、イシガヤ少尉は、戦端が開かれる前において、この艦隊の生命維持上、大佐以上に重要な人材であり、作戦自体は大佐がお考えになったものを実行するのが主で、戦術は強運にたよる。と、ということですか～？」

「ふむ。相違無い。」

「では～スター大佐、大佐は一年戦争で黒い竜巻と仇名されたと聞いたのですが～どのような戦略をもって戦われたのですか～？」

「おもに孫子による。また、かつての名将の戦略を応用し、各員の連携によって戦術の成功率を高めている。」

「孫子ですか？ですが、大佐の戦歴を聞きますと～」

「ふむ。私は政治は出来ない。孫子は戦争を否定しているが、私は一介の将校に過ぎず戦争を肯定せざるを得ない。しかし、おもには孫子を応用し、また、戦術は日本のものの応用が多い。」

「なるほどですね～。では～ソロモン戦の布陣は偃月、ア・バオア・クー戦は鶴翼ですね～。メインはイシガヤ少尉、ナカサト中尉、イセサキ中尉、フルーレ中尉、ロウゾ中尉で～中でもイシガヤ少尉とナカサト中尉がみそですね～。イシガヤ少尉は前述のとおりですが～ナカサト中尉は乱戦などで部隊の間接指揮に高い能力をお持ちのようです～。加えて、クラウン中尉は大佐の影という存在でしょうか？」

「ふむ。よくその陣の日本名を知っている。そして、評価もなかなかの的を射ている。」

さすがのブラックもクリアの観察眼には驚かされる。なにせ、情報をいくつか調べたにせよ彼女がこの艦に投降してからまだ四時間程度である。その短時間にこれだけ理解するとは並大抵のことではないのだ。

「ですが～分からないのはイシガヤ少尉の戦績です～。どうして奇跡的な損害率と戦果をお上げになれるのでしょうか～？大佐の戦術を見ますと～イシガヤ少尉の艦やMS隊は被弾の可能性が高い配置ですし、それに、時折無謀に見える突出をなさいますが～これは戦術として問題があると思われませんが～？」

「兵書も希望的観測は否定しているが、イシガヤに限って確率を無視した現象が起こることがある。無論それは計算に入れず戦術立案しているが、確率というのも確実ではないものだ。99%被弾する可能性があっても、必ず百回撃って一回当たるというものではない。また、突出はイシガヤ機に突破口を開かせるために、半ば公認している。」

「ですが～仮にも一個小隊の隊長が戦死なさと～指揮に問題があるのでは～？」

「戦闘中はナカサト中尉がすぐに代行するので問題は無い。問題は戦闘前と戦闘後なのだが、こればかりは私にも止めることは出来ないのだ。」

それは、貴重な情報と補給を握っているのがイシガヤであるからだ。その点で、この艦隊に影響が大である以上、艦隊司令のブラックでも早々イシガヤに戦闘中止命令を出すことは出来ないのである。

「なるほど～。では～今後私はイシガヤ艦長の副長としてどのような行動をとったらよいと、総司令である大佐はお考えですか～？」

「イシガヤに義理立てする必要はない。軍略には優れているようなので己の判断に従え。また、私もイシガヤもMSで出撃することが多々あるが、その際はライ・クラウンと連携し敵に当たるように勤めよ。」

「了解です～。」

「ここにいたか。クリア・サテライト中尉、血液検査は問題ない。血液から判断すると、生粋の日本人だな。あと、強化人間の可能性も皆無だ。」

例によってイシガヤが沸いて出てくる。NTのブラックさえ気づかないのだから恐るべきである。

「ところでな、ブラック。こいつの戦略立案能力はどうだ？いろいろ調べまわっていたようだが。」

「お前より高い。」

「それは重畳。それではクリア・サテライト！貴君を正式に我が艦春菜の副艦長兼 MS隊副隊長に任命する。階級も現状の中尉とする。こいつが辞令だ。」

「了解です～！」

月面

「早かったな。マゼラン改級宇宙戦艦如月出港！」

艦の強奪からわずか一週間で改修作業を終了し戦場に送り出すだけの技術力と資金を持つCPGには驚かされたが、戦艦を動かせるだけのエウーゴの人間がこれだけ短期間に集められたことも脅威である。さらには、その中の何割かは元ジオン軍人であったことである。これらはすでにアクシズへと報告したが、これが決してアクシズのためにはならないのは確かである。なぜなら、元ジオンであるからといって、アクシズに協力的であるとは限らないからである。もっとも、だからといってどうこうできるブラックではない。

「春菜発進！」

「滄海発進！」

続いて二隻が発進する。滄海はすでにアナハイムエレクトロニクス(AE)に下げ渡し、エウーゴの正式巡洋艦に編入されている。

「艦長、エウーゴ本部より入電。出港後402ポイントにティターンズ艦艇3を捕捉。撃破せよとのことです。」

「了解したと伝えよ。操舵手、402ポイントへ向かえ。また、各艦に通達。」

「春菜了解。」

「滄海了解」

「春菜より入電。敵はサラミス級。」

「敵艦隊との接触まで約五分。艦隊は鋒矢。艦速最大。MS隊発進準備。」

「大佐、艦隊突攻ですか？」

「ふむ。ライ、MS隊の指揮は任せる。」

「艦長、エウーゴの艦隊です。」

「そうか！各艦迎撃準備！二番三番艦は左右に展開！」

「MSはどうしますか？」

「エウーゴごときに本気になるのもアレだが、無論展開する。」

「大佐、春菜より入電。敵、鶴翼に展開。現在MS展開準備中と見ゆる。です。」

「勝ったな。各艦、MSの発進は後回しだ。敵陣中央を突破する。滄海に連絡。貴艦は射程に入り次第左右の艦艇に対する威嚇砲撃を行え。」

「滄海了解。」

鋒矢の陣は寡兵が大兵の中央を突破するのに適した陣形である。対して、鶴翼と呼ばれた陣形は大兵が寡兵を取り囲んで殲滅するのに優れた陣形である。この場合戦艦がある味方のほうが戦闘力が高く、相手は巡洋艦しかなく戦闘力は低い。MSにしても、敵はティターンズである以上戦闘力は高いと予想されるが、今から展開を始めて間に合うものでもない。しかも、艦隊はMS展開のために確実に回避能力が落ちるのだ。

「射程圏に入ります。滄海は発砲せよ。如月、春菜は主砲、副砲準備。また、ミサイル管準備。」

「了解。」

「春菜より入電。前方にかく乱膜を展開する。です。」

「許可する。効果範囲は副砲射程まで。」

「了解。」

さすがにイシガヤ艦である。標準装備以外の兵装も十分に取り揃えられている。当初は

如月にIフィールドを装備するつもりだったのが、重量と消費エネルギーの問題であきらめたくらいなのだ。資金があるのはなんとも心強い。

「ハイザック三機接近します。」

「対空砲火。艦速は緩めるな。」

通常、MSを対空砲で迎撃するのは少々無理があるが、この艦隊の対空砲火をなめてはいけない。豊富な資金で通常艦と比べ三割り増しの対空砲の数が設けられている。そうやすやすと突破できるものではない。それでも、MSの遠距離武器は脅威ではあるが、見るからに実弾兵器は装備されていない。この敵部隊の兵站は他より有利であるらしくハイザックがビームライフルを装備しているが、今回はむしろ通常のザクマシンガン改の方が効果的だったのだ。ビームかく乱膜の前では高価なビームライフルもたいした効果は発揮できない。

「副砲の射程に入ります。」

「敵中央の艦に対し、一斉射撃。艦隊は速度を緩めず敵艦隊下方を突破。」

言うや否や、如月と春菜の砲撃が敵旗艦を襲う。命中精度はまあまあだが、二隻の集中砲火は効果的である。また、敵艦の攻撃はこちらの速度が速いためになかなか当たるものではない。

「中央の艦撃沈！当方ミサイル被弾1。戦闘継続に支障ありません。敵艦爆砕の下方を通過します。衝撃に注意。」

「MS発進準備。破片の流れをやり過ぎた後発進。また、カタパルトは使うな。全機同時に出撃。艦隊はそのまま前進。敵射程を抜けた後反転する。それまではMSにまかせよ。」

「春菜より入電。閃光弾の使用許可を。です。」

「許可する。MSの発進の目くらましに使い。」

「破片で如月の主砲一基と滄海の副砲が沈黙。」

「かまうな。総員対閃光防御。閃光弾放て。続いてMS発進。ただし、下方に発進せよ。ミサイルを放つ。」

「MS発進終了。」

「後部ミサイル発射。照準はおおよそでよい。牽制だ。」

.....

「イシガヤ艦長、大佐の采配はすごいですね～。惚れ惚れするご采配です～。瞬く間に敵を殲滅してしまいました～。」

「当然だ。黒い竜巻の異名をとり一年戦争時にあの若さで大佐にまで昇進したんだ。キシリア閣下も頼りにされていたのだが・・・。」

「どうかなされましたか～？」

「・・・いや。ツキのせいだな。」

一年戦争でキシリア・ザビ少将は月のグラナダに本拠を置いていたのだ。それを思い出し、キシリア少将にはツキが無かった。また、同時にブラックのツキのなさを嘆いたに過ぎない。

「艦長、エウーゴ本部より入電です。敵、別働隊接近。巡洋艦4。」

「ふむ。」

「接触まで8分。いかがなさいますか？」

「MS隊の帰還急げ。ライ、MSは私と代われ。敵のほうが多いといえど討たねばなるまい。」

「了解。」

「ミキ中尉、敵機撃墜3。流石だ。助かった。カスミ君も巡洋艦撃墜1。ブランクを感じさせなくて助かる。なんかまた戦闘になるらしいが・・・俺も出撃する。ついでにサテライト中尉の能力を確かめたい。艦の指揮は先ほど確かめたが、MSのほうはまだだ。そうだな・・・カスミ君、艦のほうを任せる。」

「だけど、艦の指揮は取ったこと無いし。」

「七年前にはちったあ習っただろ。ライとかミネルバを見習え。俺が大まかな指示はMSから出すから何とかしてくれ。」

間違っても自分を見習えとは言わない。・・・はっきり言って学んではいけない用兵だからだ。

「分かりました。何とかしてみる。」

とはいえカスミ中尉も士官であるまがりなりにも指揮を学んではいるし歴戦の猛者ではある。まあ、そこいらの新米艦長よりはましだろう。

「ということだ。サテライト中尉のMS隊の指揮能力を見る。俺もMSで出るが、指揮を取ってみる。」

「了解です～。」

「大佐、敵は魚鱗に陣取っています。」

「各艦に通達。如月を中央に春菜を右前方、滄海を左後方。偃月に陣取れ。MS隊も同様にせよ。MS隊各自発進。ライ、後は任せた。」

「ドレン、ジム 改発進するぜ！」

「ドメスジム 改スナイパー出ます。」

「ブラック、ハイザック改出る。」

ちなみにこのハイザックはクリア・サテライト中尉の元搭乗機である。これを改造し、ミサイルポッドなどの各種兵装を取り付けたうえ、黒い竜巻のパーソナルカラーとして黒くしたものである。ブラックとしては、ジム系よりも一年戦争で乗りなれたザク系のほうが操作しやすいのだ。

「春菜より、イシガヤ、リックドム 改 FA出撃する！」

「クリア・サテライト、FAジム 改出ます。」

「同じくナカサト機、いっきま～す！」

これに滄海のMS隊も続く。先ほどの戦闘で一機落とされたものの、いまだ三機が健在である。それも、如月、春菜のMS隊の奮戦のおかげである。

「大佐、MS隊の展開終了を確認。敵を迎え撃つ準備は終了しました。」

「ふむ。春菜に通達。機雷を前方に射出。逆茂木の要領だ。」

逆茂木とは、日本で言えば室町時代など戦乱に明け暮れていた時期に使用されたものである。これは木の根を逆さにして地面に植えることにより、敵の進行速度を弱め、あるいは騎馬の侵入を防ぐためのものである。春菜の機雷は破壊力こそ低い、数が多いので障害物にするにはちょうどいいのである。ついでに廉価である。

「各隊に通達。敵が半ば機雷原を抜けた後攻撃に移る。渡河作戦の要領で攻める。」

これは中国兵書によく見られる戦術の応用である。いくつかあるが、この場合は敵の約半数が機雷原を抜けたところをつくことによって、敵の前衛はいくらかの損害を受けている可能性が高く、後衛は前衛がやられていても進むに迫らず退くに退けない機雷原に翻弄されることを狙っているのだ。別種の、敵がまだ機雷原にいる最中を狙う策は下手をすると自分自身が機雷で損害を受ける可能性が高いのと、機雷が障害物になってこちらの攻撃が思うように当たらない可能性が高いので採用しなかったのだ。

「さすがは大佐。これが成功すれば戦力差は覆せます。イシガヤ隊は各機前方に出ます。」

氣勢を上げているように見せかけ、敵がより中央の機雷原に行きやすいように陽動をします。」

クリアが指示を出す。

「ねえ、少尉さ、サテライト中尉ってMS乗ると人が変わるのかな？なんか口調変わってるし。」

「・・・さっき艦の指揮を取らせたときもこうだったぞ。まさに豹変。びっくりしたが、まあ、てきぱき指示してたから問題ないと思うぞ。」

「じゃあ、問題ないかあ。」

「兩名、出来ればお静かに願います。」

一喝に近い言い方でベテラン二名が注意される。新人の割になかなか肝が据わって大胆らしい。

「イエス！マー！」

イシガヤ、ミキ兩名がふざけてそういう。

「サテライト中尉、イシガヤに連絡。討って出る。」

「了解です。しかし・・・。」

クリアが言いたいのはここで討って出る必要である。確かに囿を繰り出すのは効果的ではあるかもしれないが、よりによってイシガヤ一機である。データで見るところ、イシガヤの戦闘能力は明らかに低い。

「サテライト中尉、俺らの手並みを見て置け。イシガヤ機突貫する！」

言い残しイシガヤ機のみが先行する。

「な！？」

イシガヤ機は機雷原にいと簡単に突入していくのだ。クリアが驚くのも無理は無い。同時に敵も機雷原を甘く見ることになる。

「機雷なる三途の川を押し渡り鬼の首をば我が奪わん。ふっ、ティターンズの諸君！我こそは何を隠そう一年戦争で勇名を馳せた・・・かはともかく！死にたくなければかかって来い！」

意味不明なレーザー通信を発進することによって、ティターンズの連中はさらにパイロットの質まで甘く見ることとなる。何せ相手はエリート集団である。対してイシガヤの喋る公用語の英語は（苦手に加えジオン訛りで）うまいとはお世辞にも言えない。さらに機体は見た目には旧式のドムである。

「隊長、どうしますか？敵のドムはバカのようなのですが、それに敵の射撃能力を察するにたいしたパイロットではありません。」

「わざとであるかもしれないぞ。」

「しかし、機雷のようなものもおそらくこけおどしではないのですか？」

すると、さらに不明な通信が入る。

「ティターンズの諸君！勉強しか知らんエリートバカなど歴戦の勇士の俺には勝てはしまい！やーい、バカ！」

「な！隊長！」

「畏かも知れん。待て！」

「ですが！」

そんなやり取りの中イシガヤはあくまで前進を続ける。そうなれば、黙っているわけにもいかない。特に実戦慣れしていない連中は勝手に攻撃を始めるものだ。

「はてさて、ティターンズも弱いものよ。」

「愚弄するとは！隊長！もう我慢なりません！全軍突撃するぞ！」

すでに正気を失った副隊長が突撃命令を下す。

「三番隊、四番隊はドムの後方に回り込め！」

そうなのは隊長もそう命令せざるを得ない。

「くっ！ティターンズめ！意外とやるな！・・・やばっ！通信切り忘れ・・・ブツッ！」

イシガヤはそう通信をもらしながら退却の姿勢を見せる。通信それ自体は芝居がかっていないでもないが、イシガヤ機には退却してもおかしくないだけの弾丸やミサイルの着弾がある。もっとも、無数に着弾はしていてもダメージはあまり受けていない。まさにイシガヤの悪運のなせる業である。しかし、通常のコックピットと画像はアニメーションになっているために着弾数と大きな被弾箇所は表示されるが、具体的な損傷は分からない。ティターンズは着弾数から実体を誤認したのである。

「大佐！イシガヤ少尉機への被弾は三十を超えています！このままでは撃墜されます！」

ここにも一人誤認をしたものがある。正確には滄海のパイロットもそうだが、クリアもこういったことに慣れていないのだ。

「・・・映像をマニュアルにしてアニメ映像を切れ。」

「はい。・・・あれだけの攻撃を受けて大きな損傷が無い!？」

「サテライト中尉、少尉は殺しても死なないからあれくらいなんともないよ。」

「ナカサト中尉、しかし・・・機雷原に退却するようですが、行きはともかく帰りは交戦状態です。さすがに危険では？」

「だから少尉は大丈夫だって。第一、自分の作った機雷に引っかかりはしないでしょ。」

要するに、ある程度の指向性をもつ機雷だというのである。一定の周波を出す機体には反応しないということだろう。もっとも、そんな機材を普通のMSにつめるわけは無いが、イシガヤのドムは見た目こそドムだが建造、改造にガンダムタイプ三機分の金がかかっているのだ。・・・ガンダム三機のほうがいいと思われるかもしれないが、戦闘において他を圧倒する情報収集力、情報提供力を保有する機体は先手を取るときや、伏兵を置くなどの際に対して非常に有効であり、ガンダム三機分以上の働きをしようのだ。

「おっ、イシガヤが帰ってきたぜ。」

つられてティターンズも陣を乱しつつ機雷原に進入を開始する。感情的になっていたのか速度を落としていない敵は機雷に接触し少しずつ損害を増やす。目論見どおりである。

「各隊砲撃。ただし敵には当てるな。弾数に注意。」

ブラックが指示を出す。こちらの戦闘力を偽るためである。

「イシガヤ少尉はこの間に急いで隊列に復帰してください。」

「了解した。カスミ君、春菜を若干降下させておけ。ついでミサイルの準備。主砲は指示があるまで使えな。」

「了解。」

その間に敵機の大半が機雷原を突破する。

「各隊、全力で応戦。敵は機雷原突破と同時に艦隊による援護射撃を始められる。当方は押し出しつつ敵を機雷原近くから動けないようにし、ミサイルによって敵後方の機雷を攻撃、爆発の衝撃によって敵機のコントロールを奪う。健闘せよ。」

「了解。イシガヤ少尉は大丈夫ですね。ナカサト中尉とともに押し出ししてください。私が援護します。」

ここはさすがにベテランである。イシガヤを楯にしつつ敵機を駆逐するナカサト機の動きは凄まじい。また、ブラックとドメスの援護を受けつつ敵を粉碎するドレンもなかなかである。いかにクリアがエリートであるティターンズ出身でもこれほどの戦闘は一朝にしてできるものではない。彼らの戦闘力は滄海の兵の錬度の低さを補って余りあるのだ。

「敵三機来ます。鶴翼に展開、両翼より銃撃を！」

「悪い！俺は射撃が当たらん！」

「では偃月に、イシガヤ機は突貫、敵側面を！ナカサト機は中央に！」

とはいえ、クリアの采配も並外れている。そもそも、陣形の名前と形、効果はこの艦隊特有のものである。(日本、中国の古い陣形の名称のために通信がもれても解読される恐れが少ないため。)当然、作戦マニュアルに似た陣形もあるし効果も同様なものは多いが、即座にその陣形の名前を言い、かつ的確に使用できるあたりが尋常ではない。普通、士官学校で習った陣形の名称を使うものなのだ。

「ふむ。サテライト中尉、敵はほぼ殲滅、どう出てくると思うか。」

ブラックより通信が入る。やはり彼にしても有力なイシガヤ隊を指揮することになったクリアの手際は知っておきたいのだ。せめてかつてイシガヤの副官であったミネルバ・バイブルほどの腕は欲しいところである。

「敵はMS隊が機雷原を抜けたところで全力で艦砲射撃を始めるものと思われます。追撃を。」

「ふむ。ドレン、ナカサト、イシガヤは私に続け。」

クリアの判断はなかなか的確である。ただ、追撃するということが敵が機雷原を突破したところで艦砲を使われた際に機雷原にいる味方機への誘爆の危険が高いという問題がある。しかし、ブラックを含む四名のみはこの機雷原を敵と同時ほどには突破できる技量(イシガヤのみシステム)があるのだ。やはり追撃をするべきである。さらにいえば、味方の艦艇と敵の艦艇では圧倒的に敵が有利である。これを覆すにはMSによる近接攻撃を置いてほかはない。

「味方艦艇はわれらが機雷原突破と同時に全力射撃。同時に回避行動を取れ。MS隊による長距離射撃指揮はドメスに任せる。」

とはいえMSで艦砲並みの長距離射撃をできるのはドメス機と現在クリアの搭乗しているカスミ機のみである。ドメスの指揮能力はさほど高くないが、クリアに彼の超一流の射撃技術を見習わせるための命令に過ぎない。

「おっしゃあ！機雷突破あ！MSの残りは俺とミキに負けせとけや！」

「ドレン！呼び捨ては禁止だからね！次は後ろから撃つ！」

「ほいじゃあ俺はその辺ぶらつくんでよろしく。」

「イシガヤ、ぶらつくなら敵後衛頼む。」

ぶらつく、要するに牽制である。イシガヤは対MS戦、対艦隊戦はともに苦手だが、牽制だけはやたらと得意である。

「・・・ふむ。」

そうつぶやいてブラックはおもむろに敵旗艦に狙いを定め肩部ミサイル11発、脚部ミサイル6発、シュツルムファウスト2発をぶち込み一瞬にして鉄くずを作り出す。この場合武器の破壊力によるところも大きい、しかしどんな場合でも圧倒的な一瞬の重圧をかけて敵を粉砕するこの戦法こそが、今もってなおブラックが黒い竜巻の異名を持つ所以なのだ。

「・・・無。」

さらにもう一隻のエンジンにバズーカ三発、続けて艦橋にマシンガンを数秒ぶち込み有無を言わせず沈黙させる。

「こっちは終わったぜ。」

「残りは・・・。」

瞬間、ドメスの放ったビームが一隻に突き刺さる。もう動けまい。

「大佐、通信です。」

「こ、こちらはもう戦闘を継続するつもりはない！停戦を依頼したい！」

確かにもうティターンズに勝ち目はない。妥当といえば妥当であるが。

「・・・ドメス。」

ブラックがそういった瞬間その艦橋にビームが突き刺さり続いてもう一射がエンジンに突き刺さりその艦艇を四散させる。

「・・・任務終了。」

そう、すでに和議をする状況ではなかったのだ。敵は討てるときに討つべきものである。仮にMS隊が大半討ち取られ退却を開始した時点で和議を申し込んだのであれば以後の想定される味方の被害を換算に入れればそれまでの戦果でも十分であったので当然和議を結んだであろう。しかし敵が、敗北寸前に和議を結ぶ提案をして、それを受領する指揮官は人間としては正しいかもしれないが、指揮官としては無能なのだ。そして、ブラックはあくまで有能な指揮官であった。

人として

「大佐！あれはどういうことですか！」

「……………」

「敵はもう戦闘力がなく降伏するつもりでした！どうして撃たせたのです！」

「当然だ。」

「何が『当然だ。』です！あなたは無抵抗な人間まで殺すのですか！」

クリアがわめきたてる。通信機越しであるためにさらに苛立っているようだ。

「私はティターンズの無差別殺人が嫌いでエウーゴに来たんです！ここもティターンズと同じただの人殺しの集まりなのですか！」

「否。」

「まあまあ、サテライト中尉落ち着け。とりあえずブラックのところに連れてってやるから。ミキ、お前も来てくれ。カスミ君には後を任せる。」

イシガヤになだめられつつ旗艦如月に向かう。カスミを連れて行かないのは下手をする
とクリアの肩を持ちかねないからだ。

「よく来た。」

「あなたが殺させた人間の数がわかりますか！無抵抗な人間を！」

ブラックが出迎えた早々これである。

「イシガヤ……………」

「おそらく三百人前後だろうな。いや、最近の戦艦は乗組員が少ない。」

「…………ふむ。だ、そうだ、サテライト中尉。」

「何で落ち着いているんです！三百人ですよ！」

「彼我の人数が併せて約二千人。敵はほぼ全滅。約千二百人が死んだか…………ふむ。合戦にしては多いほうだな。」

「合戦だなんて時代錯誤なことはおいとみなさい！」

「……………」

「いいですか！あなたはそれだけの人間を殺しました！当然戦意があるものは仕方ありません。ですが！最後のあれは何ですか！」

「…………サテライト中尉、君は軍人に相違ないな。」

「当然です。」

「軍人はまず特別な人間である。戦場にあっては殺されても文句は言えまい。そして、敵は本当に無抵抗だったか。敵の主砲はわれらを狙っていた。」

「ですが！」

「いいか。現代戦で、無抵抗か否かは容易に判断はつかない。MSであれば武器を放棄すればまだわかる。しかし艦艇はそうはいかない。ゆえに撃った。」

「ですが！あの状況で撃つのは人道に反します！」

「…………私は人ではない。」

「なっ！」

さすがに絶句する。では何だというのだ。

「…………私は一個の人間である前に艦隊を束ねる司令である。私には味方人員の命を守る義務がある。ゆえに禍根はたたねばならない。ここに道徳は必要ない。」

「そうだな。司令ってのはそんなもんだ。」

「イシガヤ少尉、あなたもあの状況をなんとも思わないのですか！」

「俺はブラックほど甘くはない。殺すときは殺す。・・・だれでもな。しかし、経ぐらいは唱えるが。まあ、ブラックの言いたいことはだな、言い換えれば仲間が大事だから、殺されてほしくなかったから、万が一の恐れを消すために敵を排除したってことだな。」

ブラックが甘い理由、簡潔に言えば敵を討ったことだ。仮に敵が降伏して敵の艦艇を拿捕すればその分エウゴの戦力は増大する。あの状況で味方の艦艇は損害は受けても沈むほどの攻撃を受ける恐れはなかった。ともなれば降服を受領したほうが得ではある。しかし撃つのだ。さらにいえば、ほかであれば敵艦の拿捕はさすがに難しいため破壊したほうがよいが、ここにイシガヤ艦という特殊な艦艇がある以上、味方に損害を受けるにせよ、確実に拿捕は可能であった。

「あのさあ、サテライト中尉。あんたもし兄弟とか友達が敵になったら司令として討てる？」

ミキがそういう。

「・・・わかりません。ですが、討ちたくはありません。」

「うん、わかるよ。でもさ、一年戦争でこいつら二人ともそれをやってるのよね。でも、相手を殺せなかった。」

「それでは！」

「でもね、まったく手加減はしてない。ブラックは弟さんと戦って殺す気だったみたいだけど、弟さんが強くて引き分けになっただけ。少尉は心では殺す気なかったみたいだけど、友達だった敵の機体に組み付いて自爆してる。友達のほうが圧倒的に強かったし、あれ以外手はなかったと思うけど、少尉は強運だから助かって、相手の機体は強化されていたから危うく助かったみたいで撤退していった。」

「そんな・・・。」

「でもさ、あの時ブラックや少尉が彼らを討たなければ、味方はことごとく殺されていたと思う。私だってそのときまでにエースの一人だったけど、到底勝てる相手じゃなかった。だからブラックの発言はあながち間違っていないと思うよ。」

「・・・。」

「結局さ、戦争って殺すか殺されるかそれだけなんじゃない？でも、あんたが違った答えを見つけないならあんたにとって正しい采配を取ればいいんじゃない？幸い私たちの艦の副艦長になったんだし。私はなるべく協力するしさ。」

「わかりました～。それでは私の思う采配を取りたいと思います～。それに、大佐を何とか人にしたいと思います～。ヒステリーを起こしてしまってますみません～。」

ミキの言葉で何とか冷静になったらしい。

「ブラック、どう思う？」

「ふむ。・・・なかなかだ。」

「確かにな。いろんな意味でなかなかだあな。純情かとも思えばなかなかしたたかだしな。」

「・・・人道か。私には用のない言葉と置いていたが・・・あれが言うと人道も考えねばなるまいと思われる。」

「人道な。俺にも縁の無い言葉だな。そんなこと言ってたら商売上がったたりだし。しかし確かに人道は必要かもしれん。考える必要はあるな。ところで気づいていたか？」

「ふむ。途中から・・・。」

「あいつ、俺がミキを使って何とかなだめようとしてたのに気づいて逆にミキを使いやがった。ちゃっかり俺の艦の実質ナンバー2を味方につけやがったぜ。」

「ふむ。・・・以後人道に気をつけるしかあるまい。」

「まあな。ってか、お前さんもがんばってくれや。あいつお前を人にするって言ってたぞ。しかも何気にやる気満々みたいだし。じゃあ俺も戻るわ。そいじゃあな。」

イシガヤも忍び笑いをしながら艦に戻る。そんなイシガヤを見送りながらブラックはふと思う果たして人道とは何であるかを。彼は幼少から祖父に軍略を習ってきたが兵書にある『人道的行為』は、十中八九が兵の士気上昇のためである。もしくは対外的要因にもとづいているに過ぎない。では、兵書のとおりによればいいのかというと、クリア的には違いそうである。もし兵書のとおりならブラックの行為は間違いではない。では何だというのだ。それがわからないのである。彼は有能な司令官ではあるが、『有能』な人間ではない。

「・・・人道か。しかし・・・。」

人道という問題も重要かもしれないが、やはり彼としては意外と察しのよいイシガヤに驚かざるを得ない。

「・・・・・・・・詮索は・・・すまい。」

そう思う。詮索は下手をすれば命にかかわりかねないだろうからだ。

地球降下作戦前

「久しいなハロルド。」

「少佐……。いえ会長、ハルです。」

「そうだった。久しいなハル。補給物資はどうか？」

「問題ありません。ところで会長、火星の件ですが……。」

「わかっている。何かと苦勞をかける。そうだな、マラサイの図面は流せ。バーザム、ギャブランもかまわないだろ。サイコは……。もうしばらく待ったほうがいい。タキ少将には……。そうだな……。ガサもう流したからとりあえずキュベレイのスラスター関係の図面とアクシズの内部図面。ついで百式の図面とエウーゴ新型のいくつかあがっている設計図面を流しとけ。」

「わかりました。エウーゴには？」

「そっちはミネルバに任せてある。エウーゴからは技術を奪って代わりに銭だけを与えとけばいい。あまり協力しても得が少ないからな。やはりA Eに従属するより直接連邦にくっついたほうがいい。」

小声でしゃべっていたのを改める。

「了解です。では、お荷物はすべてお届けしました。サインを。」

「いつもすまないな。今度も頼むぞハル。」

「はい。今後ともごひいきに。」

「え～。各艦に通達。この艦隊にエウーゴ地球侵攻部隊の護衛の任務が与えられました。各艦長は、旗艦如月に集合。以上！」

「ふむ。われわれは地球に降下する必要は無いと。」

「降りるのは俺とカスミ君だけでいい。ちょっとC P Gの用があつてな。北海道に降りる。その間の艦の指揮は当然クリアに任せる。」

「ふむ。本部は？」

「そうだな……。結局お前しだいだな。ティターンズを討つもよし、隠れているもよし。まあ、なるべく地球軌道上にいて欲しいが、好きに動けばいいだろ。補給その他の物資関係はライに任せることにする。わかっているとは思うが、月の支部に直接依頼するなよ。そうだな……。月支部の爺さんに連絡をつけてくれ。」

「わかっていますよ、イシガヤさん。」

「そうか。ではこの艦隊で演習を行っていよう。先日加わった滄海と天宮の錬度が低い。」

「そうしてくれ。」

「では解散する。……。イシガヤは残れ。」

「なんだ？」

「何がある？」

「何が？」

「なぜ地球に降下しない？八十機程度でジャブロー制圧は不可能だ。」

「シャアがいるさ。」

「シャアでは無理だ。せめてわが隊も降下すべきではないか。」

「その必要は無い。お前はエウーゴじゃないだろ？エウーゴが何でそんな程度の戦力で作戦を断行するかはよくわからんが、共倒れを狙うのがアクシズの方針だったはずだ……。それに、ジャブローに戦力は無い。」

「・・・？」

「お引越して奴だ。八十機あれば制圧は可能だ。ただし・・・その後のことまでは知らんけどな。」

「・・・・・・・・ふむ。」

要するにたつ鳥あとを濁さず。ジャブロー施設を破壊するという事だろう。となればエウーゴの連中を巻き添えにすることは十分に考えられる。

「しかし・・・。」

「それが政略。俺とてエウーゴやティターンズがのさばるのは困るんだ。連邦かアクシズなら歓迎だが。」

要するに、ジャブローに降りると死ぬ可能性が高いのでやめておけといっているのだ。漁夫の利を得るのがもっとも無難である。悪く言えばエウーゴを見捨てることになるが、べつに義理立てする必要も無い。そしてティターンズには渡りをつけていないので仮にのさばっても得は無く、エウーゴではA Eの下にいつまでもついていなければならない。たいてい連邦なら技術部のタキ少将以下数名の高官と昵懇であるし、アクシズならハマーンと面識がある。しからば、そうがんばる必要ないのだ。

「そうだブラック、俺の艦のエンジンが少し不安定でな、支援に30分ほど遅れそうだから。よろしく。」

護衛さえ適当にやればいいということだ。

「各艦に通達。当方春菜の不調により三十分ほどエウーゴ艦隊との接触が遅れる。想定接触時間までおよそ三時間。整備班は先の戦闘における被害の応急処置を行え。戦闘員は各自休息。また、進路上に敵は無し。ただし春菜は監視を怠るな。以上。」

「おっしゃあ！休みだ休みだ。酒もってこいや！」

「・・・はあ。ドレンさん、それはさすがにまずいですよ。」

「ドメス！しみったれたことを言ってんじゃねえ！ウーンと、そうだ！あれだあれ！ブラック！日本の風習だ！なんだったかあれは？」

「『三献の儀』か？出陣前の杯の後に『打鮑』『勝栗』『昆布』を食べる。」

「それだ！昔の偉いやつも気が利くよな。だから酒飲んでもいいんだぜ、ドメス。」

「どういった意味があるんですか？」

「ふむ。日本語で、『打ち勝ち、喜ぶ』の語呂合わせだ。ドレン、ほどほどにな。酒以外にもある。食べておけ。」

「大佐～。お届けものですよ～。きゃあ！」

ドス。その鈍い音に艦橋の一同が振り返る。

「痛いす～。」

そこには見慣れぬ闖入者、クリア・サテライト中尉がもの見事に転んでいた。

「おう、クリアちゃんかあ！真っ平らなとこでこけるたあ、やるなあ。一緒に酒飲もうぜ。」

「ふにゅう。」

「大丈夫ですか？どうぞ。」

「ありがとうございます～。クラウン中尉～。」

ライの腕につかまってふらふらと立ち上がる。・・・これがなかなかの采配を持つものとは思えぬドジっぷりである。

「あれ？」

その当事者は自分の手を見やるが持ってきたものが無い。果たしていずこに？

「・・・・・・・・む。」

「おいブラック、そいつは新しいファッションか？」

「……………」

「きゃあ！すみません！すみません！」

まさしくブラックは頭から刺身の盛った皿をかぶり、その刺身は頭から体にかけて散乱している。さらに、刺身にはしていないらしい大きめの魚一匹は、どうやらブラックの鼻に当たって足元に落ちたらしい。彼の鼻が赤くなっている。

「なかなか新鮮そうな鰹だが……。北条か。」

北条氏は先ほどの三献の儀において勝つに通じる鰹も食べたらしい。

「あの、ブラックさん？河童じゃないんですから早く皿はどけたほうがいいと思いますよ。」

「ふむ。ドメス、悪いがタオルを持ってきてくれ。ライ、お前はそこの魚をさばいてこい。」

「いやあ、この刺身もうめえな！あんまり生魚はくわねえからどうかと思ったけどよ。なかなかいけるぜ！」

「ふむ……。しかしこれは？」

「それはですね～、さきほどとどいたんですよ～。少尉さんのところに怪しい配達屋さんが来たんですが～、産地直送らしいです～。」

「ふむ。おそらく地球直送だろう。なかなか上物だ。」

「そうなんですか～。でも～、少尉さんがCPGって会社の会長って言うのはわかるんですが～、なんで地球に大きな支部があるんでしょう～？」

「確かにCPGは現状そこまで大会社というわけではないのですが、うまく連邦軍の将校に取り入ることができたので、極東の日本でさらに極北の北海道ではそこそ地理に恵まれた釧路といわれる土地を格安で誘致していただいたんですよ。」

「では～、なんでエウゴに組しているんです～？」

「まあ、そのあたりは大人の事情ってやつですよ。サテライト中尉のような見目麗しいお嬢さんは知らなくてもいいことです。」

「うわ～！おめえが言うとそのくさい台詞も全うに聞こえるから不思議だあな。」

「いえ、そんなことはありませんよ。まるで百花乱れ咲く天上より遣われし天女かと思われれるサイレンスさんを射止めた、ドレン中尉の話術こそご教授願いたいところです。」

「クラウン中尉、すごいです～。」

「ライさんにはファンクラブがありますからね。特にイシガヤさんの艦には女性が多いですから。」

「ああ！知ってます～、ロウゾ中尉。私も誘われましたけど～。」

「花さえも色あせるサテライト中尉も私のファンクラブにお入りいただけたのですか？」

「えう！あの、その、ご辞退させていただきました～。私には使命がありますから～。」

「なるほど。仕事に燃える女性も、なかなかどうして美しいものですからね。」

「えっと、そうじゃなくてですね～、スター大佐に……。？大佐は何をお読みになっ

ていられるんですか～？」

「先祖の伊達政宗公の小説だが。」

「知ってます～。あれですね～支倉使節団ですよ～？」

「ほう。そうだ。」

「えっと、確か伊達政宗は一部では伊達者の語源とも言われ、とってても派手好きな人でしたよね？また、独眼竜とも呼ばれ、日本の戦国時代末期の人物としては最大級の名将だったはずですよ。」

「名将ってのはわかるけどよ、派手好きたぁブラックと似てねえなぁ！」

「確かにドレンさんの言うとおり、ブラックさんは地味ですね。」

「ですが～、伊達政宗の鎧は黒で統一されていたので～、スター大佐のパーソナルカラーとはおなじです～。それにヘルメットやMS頭部の弦月の飾りもです～。」

「ふむ。私は伊達家得意の政略は苦手だが、幸い軍略のほうは似て一軍を指揮しうる地位につけたが、しかしサテライト中尉はなかなか日本史に詳しい。」

「スター大佐～、ありがとうございます～。私も日本人らしかったので、学校にいたときに興味を持って勉強したんです～。特に戦史をですね～。」

「う～ん。クリアちゃん！これからはみんなファーストネームにしよう！ロウゾとかスターとか言われてもなんかしっくりこねえや。俺もフルーレじゃしっくりこねえ。」

「よろしいですか～？スター大佐～？」

「・・・ふむ。」

「すでにティターンズとの戦闘になった？」

「そうらしい。敵はなかなか強く苦戦中だよ。」

「しからば、最大戦速。」

多少の損害はエウゴに与えておいたほうがいいのだが、さすがに壊滅されては元も子もないのだ。そもそも、ティターンズのほうが戦力が多いのである。それに、苦戦中に見捨てるのはあまりにも体面が悪い。

「イシガヤ、何か情報は？」

「MAがまず攻めてきて、次にMS隊が現れたそうだ。MAって言うとティターンズが開発してはいるが、宇宙用は聞いたことが無い。あるとすればジュピトリスだが・・・。」

「・・・？」

ブラックにはそれが何かわからないらしい。当然のことではあるが。

「輸送船団だ。木星から資源ガスを採掘するのが任務の部隊だが・・・うわさだと隊長が切れ者らしい。」

「切れ者とは？」

「・・・第一に地球圏到着と同時にジャミトフに取り入ったらしくかなりの権限を与えられている。第二に、天才らしい。中でもMSの操縦、開発センスが飛びぬけているといううわさだ。第三に・・・木星帰りだ。」

「シャリア・プル大尉と同じなのか？」

シャリア・プル大尉とは一年戦争でガンダムに撃墜されたNTである。彼は過酷な木星から帰還し、その過酷な状況下にてNTに目覚めたとされる。それと同様だというのだ。

「ともかくも、俺はこれ以上は知らない。その切れ者の名前は確か・・・シロッコだったはずだ。階級は・・・大尉か少佐。」

「そうか。MAとすれば、機動力が高いな。各員に教えておけ。」

「少尉さん、敵との接触まであと十分だそうです～。」

「そうか。そいじゃあ、俺のMSには慣れたか？」

「はい。見た目がドムなので心配でしたが～、性能はハイザック以上で驚きでした～。また～、操作性も多少繊細さにかけますが～長距離射撃にも対応できるので～大丈夫です～。」

「よし、じゃあ今回はMSで指揮を執れ。ビームバズーカは用意してある。」

「了解です～。」

「艦長！レーダーで捉えました。映像まわします。」

「如月に回せ。」

「ふむ。多少劣勢だな。各隊 MS 発進準備急げ。如月はライに任せる。」

「了解です。」

「エウーゴ、ティターンズともに地球に降下するようだが、残るティターンズ MS も多い。我が隊がエウーゴ艦隊撤退のしんがりを務める。心せよ。」

「大佐、アーガマより通信。」

「こちらはアーガマです。スター大佐の高名は耳にしております。」

「ノア中佐か？戦況は？」

「可変 MA にかく乱され味方艦艇にも被害が出ました。現在ガンダムを対応に向かわせました。また、MS 隊の攻撃が激しくなり。」

「ふむ。すぐ向かう。そちらの艦隊だが、その陣形では少々不利だ。もう少し密集させ弾幕による防御に専念させたほうがいい。後二分でそちらに着く。攻撃は我が隊に任せたまえ。」

「わかりました。」

「ドメス機へのブースター追加できました。」

「先行発進させろ。ドメス、無理はするな。長距離によるガンダムの援護。」

「了解。」

高機動 MA と近接戦闘しようものなら当然その機動性に翻弄されるのは必然ではあるが、長距離戦では翻弄される心配は無い。それでもその高機動さのせいで射撃命中は格段に落ちるが、しかしここはドメスである。彼はなまじの NT には直撃させ、かなりの腕の NT にも致命傷を与えうる射撃の鬼才である。だからこそ、彼も士官学校を飛び級し、一年戦争当時十九歳で四十機以上の戦果を上げたのである。現に、ブラックとの模擬戦での勝率は四割近く、射撃命中率も四割である。オールドタイプとしては恐るべき能力である。

「ブラック！こっちもミキ機にブースターをつけたぜ！」

「そうか。ドメスの護衛に先行させろ。」

「わかったわ！任しといてよ。」

前述のドメスの欠点は近距離戦にあるが、しかし、まさに風の如く戦陣を駆けるミキを護衛につければ問題は無い。彼女もまたかつて三十機以上の戦果を上げたエースなのだ。ちなみに繰り返すが、ドメスとミキの連携の前に黒い竜巻と恐れられたブラックが勝てたことは一度たりともない。

「ドメス、発進します！」

「ミキ、いっきま〜す！」

ブースターがそくつけられたのは幸いである。まさに兵站充実の賜物なのだ。

「あれですね。」

発進してすぐである。ドメスはもう視認したようだ。

「あんたやっぱり目がいいよね。わたしには何にも見えないし。」

「射程はもうすぐですね。．．．．．撃ちます！」

ドメス機の射程は艦砲よりも長い。連続射撃には向かないが、精度、破壊力ともに抜群である。

「どう？」

「はずしました。なかなか早いですね。」

「．．．．．撃ちます！」

「くっ！何だ！プレッシャーも無いのに私を掠めただと！」

そう叫んだのはシロッコと呼ばれる天才である。

「どこだ！」

今の攻撃は目前のガンダムと百式ではないのは確かなのだ。しかも、メッサーラのレーダー内にはそれらしい敵を捉えられない。では、そんな長距離から撃ったと言うのか。

「どうだった？」

「掠りました。・・・・・・・・・・撃ちます！」

「またか！」

再度掠ったビームの粒子に驚愕する。そもそも掠っただけでもかなりの被害である。運よくそれだけの被害ですんだものの、しかし次ぎに当たらないと確信は出来ない。

「このプレッシャー、ガンダムらもなかなかやる。・・・やむをえまい。」

「今度はどう？」

「また掠っただけです。しかし撤退するようですよ。」

「てか、わたしにはまだ視認出来ないんだけどさ。ともかくその MA ってのはそんなに強いわけ？」

「回避能力は大佐以上ですね。ですが、見た限りだと射撃能力は大佐以下です。」

「どっちにしろ化け物ってやつよね。それに掠るあんたの射撃もだけど。」

「ひどいですよミキさん。」

「あっ！やっと見えた。如月へ、わたしも戦闘開始しま〜す！」

「ミキさん、こっちのライフルはあと二発しか撃てないので援護はよろしく願いします。」

「あんたほかの銃火器は？」

「質量の問題で持ってません。このライフル重いですから。」

たしかにドメス機のビームライフルは長射程、高威力ではあるが、そのために射撃回数は五回が限界でカートリッジによる弾数の追加も不可能である。これは五回撃つと銃身が高熱を発生し仮に六発目を撃つと銃身が溶け落ちるからである。先ほどの三発にしても、かなり無理をして連射したのである。次に撃てるのは五分以上先だ。これが技術の限界であって、整備不良や設計ミスという問題ではない。また、その熱を抑える冷却装置のためにかなりの重量を持ってしまったのだ。今度の作戦では一刻も争うために他の火器は持たないで速度を重視したのである。

「その銃かして。あんたは私の銃を使いなさい。ちょっと待ってて。」

そういい残しミキ機は目前に迫っていたアーガマの甲板に降下し、あろうことか許可も得ずに勝手に格納庫に侵入する。

「そこのジム！なにやってんだ！」

「どうした、アストナージ。」

「ブライト艦長！ジムが勝手に！おいこらなにやってんだ！」

「あんた、メカニックよね？」

「女？」

「この銃、弾は入ってる？」

「その前に何で！」

「非常時よ！弾は入ってるの！」

「入っているが。だが何だって言うんだ！」

「じゃあ、借りてくね。私の銃は後続が来るまで預かっというて。」

そういってリックディアスのビームピストルを借用する。

「そいつはリックディアスのだ！ジムには使えないぞ！」

「大丈夫。でも試すのにちょうど良いか。」

そういってアーガマに接近してきた敵の頭部を撃ちぬく。さすがに腕は良い。また、機体も対応しているようである。さすがイシガヤの用意した機体だ。

「ほらね。借りてくから。艦長もいいでしょ？」

「しかたない。許可する。あとで返してくれ。」

「了解。」

ブライト大佐も先ほどの射撃の腕を見せられては貸したほうが得だと判断するしかないようだ。現在守備 MS の数が心もとないのだ。腕のいいパイロットは貴重である。そもそもエウゴの MSパイロットはティターンズに比べ劣っているのは否めない。

「ミキさん、ついに押し入り強盗しましたね。」

「人聞きの悪いこといわないでよね。ちょっと借りただけじゃない。非常時なんだからいいのよ。」

「でも・・・。」

「大丈夫だって。なんか小言いわれるとしても、責任者ってのは責任取るためにいるんだし。」

「うわぁ。ブラックさんもイシガヤ少尉も災難ですよ、それ。」

「ともかく！」

そう言いながら一機撃墜する。

「こいつら何とかしないと。」

数で言えば十機程度だが、味方の艦艇を守りながらの戦闘は面倒なのだ。下手に流れ弾を撃つわけにはいかないからだ。しかも相手は撃ち放題である。

「そういえば、大佐はあまりこの支援に力を入れてないようでしたね。」

「どうせ少尉の入れ知恵でしょ。アクシズに都合がいいとかいったに違いないよ。」

「なるほど。ブラックさんはそういうのには疎いですからねっと。」

ドメスもサラミスに取り付く寸前だったハイザックを撃墜する。しかも、爆発させないところがミソである。爆発させては味方のサラミスに被害が出るのだ。

「ですが、ミキさんも勘がいいですよ。政略とか得意そうでも無いんですが。」

「女の勘よ。私だってか弱い『乙女』なんだから当然でしょ。あんたが鈍過ぎるのよ！」

「か弱いって、今だって男勝りに一機撃墜、いえ、二機目じゃないですか。」

「戦う乙女ってすばらしいじゃない。」

音声はつながっていなくても、端からみれば遊んでいるようにも見える動きである。しかし、それでいて敵を落としていくのは驚きではある。言うておくが、戦闘に集中していないわけではないのだ。

「しかし、敵の攻撃が散漫ですが、どうしたんでしょうか？」

確かにそうである。なにか気をとられているように思えるのだ。しかし、敵方優勢の現在、その理由がわからない。

「アーガマ！なんか変わったこと無かった？」

「どうした？」

「なんか敵が浮き足立っているみたいなんだけど。」

「先ほど、強力なレーザー通信がされた形跡がある。」

「わかったわ。ありがとう。」

イシガヤの仕業である。おおよブラックの指示によって春菜搭載の特殊通信装置を利用して流言のひとつも流したのであろう。

「アーガマ！やっぱ敵は浮き足立ってるわ！おそらく長続きはしないけど、うちの後続がなんかやったのよ。」

そう言われてブライトの指揮するエウゴ艦隊は攻勢に移り始める。さらに、あと一分もすればブラックの艦隊も戦場に到達する。先ほど攻撃はブラック隊に任せるといったブライトであるが、状況が変われば別である。

「君たちは継続して艦隊を守ってくれ。」

「了解！」

「スター大佐。ご支援ありがとうございました。高名な戦術家としてのご采配の一部でも拝見させていただき光栄でした。」

「いや。ノア中佐ほど私は有名ではないし、采配も良き部下のおかげである。それほどものではない。・・・しかし、ノア中佐、私の噂はどこで？」

確かに疑問である。なぜならばブラックの情報を知っているのは地球圏では一握りのはずなのだ。まして元ジオンでもなく、戦後閉職にいた程度のブライトが知っているのはおかしいのだ。

「ええ、私はブレックス准将からお聞きいたしました。」

「なるほど。」

おそらくはブラックの戦果（これだけは連邦の記録にある。）をもとに、一人の英雄がエウーゴいると宣伝する政治上の理由から噂を作ったのだろう。

「ともかくノア中佐、何とか敵を撃退できたとはいえ、今回は遅れてすまなかった。このまま月に戻るにしろ戦力が心もとなかろう。私には当分遊撃の任務しかないのだからこちらの三隻を護衛につける。」

「ありがとうございます。」

ブラックの隊はこれよりコムサイの降下作戦を行うのである。すでに敵は撃退したのでこちらには問題なく、むしろ滄海、鵬翼、鳥海のエウーゴ艦を遠ざけるほうが都合良いのだ。如月も乗員はエウーゴであるが、元ジオンが大半で連帯意識は高く機密漏れの心配は低い。それだけイシガヤが地球に下りるのは機密であるのだ。

女神

「さて、何とか無事に着けた。」

あれから数時間、すでにイシガヤとカスミは北海道の大地にいる。

「まさかこんなに整備されているとは思わなかった。」

カスミが漏らす。確かにそうだ。コムサイが離着出来るだけの滑走路が CFG 支部の横に建設されている。さらに支部自体にもある程度の防衛装置が建設されている。また、それ以外にも天然の地形を利用した上で周りをビームライフルにも耐えうる 15 m 程の塀で囲んであるのだ。まるで日本の城を拡大したような構造である。

「かっこいいだろ。本丸、二の丸、三の丸を作って、ゲリラとかが攻めてきても何とか耐えられる構造だ。さらにミサイルランチャーになってる矢倉も作って、防備は万全だ。」

「どこにこんなお金があったの？」

「えっ……。っまあ、人生いろいろさ！」

別にやましい金で建てたわけでもなく借金でもないのだが、言うには少々はばかられるのだ。まず、費用の半分は連邦から引き出している。これは民間企業を使って MS などの技術開発を行っているからである。CFG は AE と比べるまでも無い小規模でしか軍需産業には手を出していないが、しかしジオン系の技術力は AE を凌駕している。これは連邦でもジオンの技術を生かすために CFG の旧ジオン兵擁護も黙認していたためである。AE のほうでも似たようなものだが、会長や支部長などの経営の中枢にいる人物が旧ジオンであり、会社自体ももともとジオン系であった CFG のほうが、人材収集の点で有利であったのだ。また、技術としてはフレーム関係、特にアーム、マニピュレーターの技術力は高い。連邦としてはこの技術を生かさぬ手は無い。しかし民間で兵器開発をするにはセキュリティーに問題があったため、ゲリラ対策として資金を連邦から支給されたのである。もっとも、正確にはイシガヤが連邦に資金を支給させたのである。軍というものは金に関しては疎いものでその要求はすんなりと受け入れられたのである。また、残りの半分は当然 CFG の利益から出ている。正確にはイシガヤ個人の利益であるが、例えば CFG 製の軍艦で AE に払い下げた滄海、鵬翼、鳥海であるが、あれは形式としては、イシガヤ個人が CFG に注文し、完成後イシガヤが AE に払い下げたことになっている。CFG で軍艦を作っても、性能は安定していてまた、AE と比べて若干安く仕上がるのだが、(これは CFG より AE には下請け会社が多く点在することで仲介料が発生するため。また、軍艦は大量生産するわけではないため。) 安く仕上がった分をイシガヤが仲介料として懐に入れていたためである。言い換えれば、AE が注文をキャンセルしても、イシガヤの被害になって CFG には被害がない。他にもいろいろ狡い手を使って正当に手に入れた資金を使っているのだ。

「会長、お待ちしておりました。お車を用意しております。」

ミネルバが用意したのであろう。

「悪いな。じゃあ支部玄関までたのむ。」

そうやって自分でドアを開けて乗る。車自体も普通のエレカだ。いちいちドアを運転手や秘書に開けさせるのは面倒だし効率的ではない。また、大物と会うとき以外は車も特別なものを使うことも無い。リムジンの類が無いわけではないが、そんなものをいちいち使っていたら整備が面倒なのだ。それに、正直乗り心地が悪い。

「会長、ようやく着きましたか。」

「おう。大気圏突入は気持ち悪くてならん。一週間はこっちにいるつもりだから部屋を用意しておいてくれ。そうだ、カスミ君はしばらく席をはずしてくれ。公務がある。」

「わかったわ。」

そういつて見送ったあと、再度ミネルバのほうを向く。」

「会長、どうやら会長を暗殺しようとする動きがティターンズに見られます。」

「知ってる。まあ、ちょっとやそつとで殺される俺ではない。」

「それはわかっています。」

「わかっている。だから部屋は支部内の宿舎で良い。空きがあるだろ。さすがにこのゲストルームや外の民宿とかは危ないしな。それに、俺は見た目あまり会長には見えないし顔もあまり知られてない。お前とかが会長って言わなきゃまず大丈夫だ。しばらく別の言い方にするように。」

「ではビリーさん、」

さすがにイシガヤはずっこける。あからさまな日本人に見えるイシガヤにビリーは無いのだ。

「いや、ビリーはちょっと。イシガヤにしておいてくれ。ファーストネームは・・・トモアキで。俺の親戚ってことにしとけば良いだろ。多少危険は残るが、別人にするよりは信憑性が高いし。」

確かにそうである。顔があまり知られていないとはいえ、まったく知られていないわけではないだろう。また、小柄であるのが特徴的すぎて、別人になりすますのはあまりにも危険なのだ。親戚なら顔が似ていても、背が低くてもおかしくは無い。

「わかりました。ではイシガヤさん、たまった仕事を片付けてください。」

そういつていくつか資料を渡す。ほかのは私室にでも戻ってからだが、今いくつか決めるべきものがあるらしい。

「そうか・・・。誰だこんなもんを提案したやつは。うちはあくまで技術開発に伴う試作生産における軍需産業は是としているが、本格的な戦闘用MS生産なんぞせんぞ。リスクが大きすぎるしAEが強大すぎる。こっちは受注生産かオーダーメイドか作業用だけの生産しかするべきじゃない。戦争なんてそういつまでも続くもんじゃない。・・・これは・・・戦争で需要が減ってきているから、生産を減らす案？却下だ。戦争中がチャンスだろ。製品の家計を預かる客には耐久性や安全性を押し出すとか、若者には戦争のかつこよさを強調した商品開発とかで今の不況に対応してブランド名を上げろ。各社の半数は生産を抑えている今こそ売り出すべし。しかし戦争特需に関係する商品の生産は抑えておけ。戦争は長くてもせいぜい二年だ。下手に作りすぎると在庫が出る。う～む。食品産業への進出案？・・・まだまて。進出したいが時期尚早だろ。・・・しかしこんな程度のことを重要視するとは。爺やお前がいてどうしたことだ。」

「そうですが、重役方は聞いておけとうるさくて。」

「あと、三年で重役の大半は定年だ。しばらく俺も自重しないとな。勝手なことはできんし。火星進出だって相当苦勞して説得したしな。しかし、三年後にはお前やオニワ、ライを中心に活躍してもらわんとならん。しばらくは旧体制を一新できず苦勞をかけるがよろしく頼むぞ。」

「わかりました。おまかせください。」

有能であるミネルバはイシガヤに引き立てられ若くして五つある支部の一つを任されている。しかも、この釧路支部はオニワの爺が会長代行として兼任している本社直轄の月支部に次ぐ支部である。かなり思い切った人事であるが、これに問題が無いわけではなかった。ミネルバは会長推薦でかつ半ば無理やりにグラナダの本社でオニワの爺の直轄の部長として入社して以来とんとん拍子に昇進し、わずか七年で支部長である。しかも現在25歳。当然羨望や嫉妬は多かったときに妨害をされたこともある。現在は重役陣にもその能力を認められているためにそれほど問題は無いが、一時期はイシガヤの愛人だからこ

ういった人事が起こったのだとのでたらめな流言まで舞い、イシガヤにまで非難の声が上がったのである。

「それで女神は？」

「はい。現在二番機、四番機が組みあがりました。三番機は兵装に問題があり現在組み立て中です。一番機は組みあがってはいますが、あくまでも実験機としての機体です。」

「三番機の問題とは？」

「はい。近接戦闘における武器としてのビームサーベルについてですが、当社にはあの機体の出力に合わせたビームサーベルの技術が無かったためにそれ自体の開発をしていたのですが、予定よりずれ込んでしまいました。」

「しかたあるまい。じゃあカスミ用に開発していた二番機の起動テストを行うから。」

「はい。しかし、装甲が薄いのが難点ですが。」

「それはアキトにフルアーマーシステムを組み込ませたからだいじょうぶだ。では見てくるか。カスミ君に勝手に休むように言っておいてくれ。」

「はい。」

「・・・そうだ、ちょうどいい。ミネルバ、これをナリッジの親族に渡してくれ。」

イシガヤはそういってどこから取り出したのかアタッシュケースを二つ渡す。

「これは？」

「言い忘れたが、先日の戦闘でナリッジを討った。」

「なっ！」

ミネルバは驚く。彼女にとってもナリッジは戦友だったのだ。確かにティターンズに入ったことは知っていたが、よもやすでに死んでいるとは思っていなかったのだ。しかも、よりもよってイシガヤの手によって。

「ティターンズからそろそろ戦死報告が親族に通達されたはずだ。一つには金塊。もう一つはナリッジを撃墜した際の記録映像と音声のコピーと、経文の書写だ。ナリッジは仏教徒ではないが、それぐらいしか謝罪の仕方を思い付かなかった。」

経文は百巻書写してある。それが多いか少ないか判らないが、しかし暇を探しては書いたものである。イシガヤとて罪悪感を全く感じない冷酷な人間ではないのだ。

「流石に名前は名乗れんし、直接会って謝罪するわけにもいかんが、匿名で宜しく伝えるようにしてくれ。」

「・・・わかりました。黒臙巾のイシカワにでも命じておきます。ですが・・・本当に会長がナリッジを？」

「冗談でこんなことは言えないだろ。どう殺ったかは覚えていないが、あのこちらに不利な戦闘で手加減なんてできなかった。俺だって死んでおかしくない戦闘だったからな。俺は運がよかつただけさ。」

「・・・あの時の戦闘ですか。・・・確かに常人では死んで当然でした。・・・そうですか・・・あのナリッジが・・・」

悲しく無いわけではないが戦死は戦争屋の常である。イシガヤが悪い事をしたわけでもないし、ティターンズが悪いわけでもない。しかし怨むべき対象がないというのも酷なものだ。ナリッジの親族の嘆きはより一層なものだろう。そして、生者は死者を弔う事しかできないものだ。

「ランス、久しぶりだな。」

「えっと・・・イシガヤさん。久しぶりです。」

「女神の状況は？」

「ごらんください。」

そこには曲線美のMSが直立している。頭部後方には特殊な線状の排熱板が設置され、まるで長髪のようなものである。また、四肢はすらりと長く手弱女のようなものである。コクピット周りの腰部はこれでMSかと思わせるほど細く、胸部も女性を思わせるに十分な形状である。また、肩にしてもなで肩に作られている。MSの無骨のイメージを全く見せ付けないうまさに女神と形容するに値する機体である。

「NGM 001 コスモ・ガディス。駆動系は地球圏最高です。特にアーム関係はどんな作業だってする繊細さを持っています。医療用マニピュレーターを大型化したものより感度がいいですから。」

「流石だ。システムは？」

「はい。一年戦争のEXAMやAEで開発中のALICEを参考にイシガヤさんが研究されていたものを組み込みました。しかしまだ難点が多いようで性能的には補助的なものに過ぎません。しかしパイロットの脳波に反応し指定されたパイロット以外では動かすことも出来ないのはいかがでしょうかと思います。」

「いや。この機体は極秘だからな。セキュリティは万全にする必要がある。追加装甲は？」

「はい。ガーディアンと呼ぶ追加装甲です。こいつを付けるとガディスの運動性は30%減少しますが、防御力はガンダムクラスに匹敵します。」

ガーディアンという装甲は曲線美ではあるが、これを付けた場合女神らしさは半減する。しかし、これを付けないことにはジムタイプにも装甲が劣るのだからやむをえない。装甲材質はいまだ研究中である。ただ、運動性は落ちるといってもつけたところでおジムタイプを軽く凌駕するあたりがすばらしいのだ。

「武器は？」

「アームガン二門、固定式ヒートナイフ四つ、ハンドガン一基、固定式シールド二枚です。これに各パイロット用として追加装備を開発しています。奥さん用には肩部および脚部用三連ミサイルポッド各二基、計四基、長射程ガトリング一門、マシンガン一門、シールド固定のヒートナイフとの交換でマシンガン二門です。」

「やはりビーム系はアームガンのみだな。まあ、フィールドとかに影響受けないから実弾のほうが良いが・・・ビーム系も開発できるようにしておいてくれ。・・・連邦系の技術者ももっと集めないとな。」

「そうですね。あてはあるんですか？」

「無いこともない。年で退役した技術やならかなりいい者をてにいれられる。先方に問い合わせているからしばらく自力でがんばってくれ。」

「はい。」

「では明日から稼動試験を行う。」

「これがMS・・・」

カスミの目の前にあるのは当然ながらコスモ・ガディスと名付けたMSである。やはりその機体形状に驚きがあるようだ。

「凄いだろ？MSにしちゃあ美しい。」

「否定はしないけど・・・こんなに細くて大丈夫なの？」

「追加武装が出来るから大丈夫。で、テストパイロットを頼む。」

「私だってやりたいことがあるんだけど・・・」

ちょっとムツとする。

「まあ、そう言わずに頼む。もうパイロット設定してカスミ君かミネルバしかまともに動かせないようにしちゃったし。」

「そもそも、私CPGに就職してないし、そのシステム書き換えれば？」

「こいつは直接にはCPGの機体じゃない。むうう、何分極秘だからなあ、特に専用として設定したカスミ君が承けてくれないとしばらくミネルバとベッタリか……システム書き換えれないし。」

カスミはそう言われると流石にうける気にならざるを得ない。イシガヤがミネルバにベッタリするといってもまず間違いはおこらないし、おこそうとすればミネルバに返り討ちにされるのが関の山だが、同じ場所にいるのに夫が妻より職場の異性の部下にベッタリというのは噂がたつと自分の立場がないのだ。それにやはり若干のヤキモチはある。

「後で埋め合わせしてよね。」

そう言って渋々同意する。

「なにっ！この動き！？」

乗り込んでみてマニピュレーターを動かした彼女が驚嘆の声を上げる。恐ろしい位の繊細な動きをしたのだ。

「ザクでも整備と設定次第で生卵をもてたけど、この機体はそれ以上……。しかも……。」そうつぶやいて、マニピュレーターをもう一度動かす。今度はパイロットの指に連動するシステムを使ってだ。

「人の手に近い……。感触もあるし……。」

「必要なら温度もわかるようには設計してある。まあ、これで文字を書いてみてくれ。」

市販されている大きめの筆を床に置き、紙も重石で押さえて用意する。その筆を器用にとり文字を書き始める。すると、間違いなくカスミの癖が表れた文字が並ぶ。普通、例えば癖を出さないのであれば機械のシステムで補助すれば充分できるのだが、流石に癖まで表すことは出来ない。しかし、この機体にはそれができるのだ。

「これなら絵だって描けるわ。」

「当然だ。本当はそれも脳波を利用して動作補助をしたいのだから技術が足りなくてな。しかし、それでも良い機体だろ？次はセンサーテストだ。まず、近くからだな。いろんなセンサーがついてるだろ？」

「赤外線センサー、エックス線カメラ、サーモグラフ……他にも無駄にいろいろと……。」

「無駄って……。試作機だし否定はしないけどさ……。」

「ん？ねえ、服とか建物とか透けるセンサーがあるけど。ご丁寧に映像に補正がかかるようにまでなって……。悪用するつもり満々？」

「そっ、そんなことはないぞ！たぶん……。つうか、アキトなに載っけてんだ！」

「許可くれたじゃないですか！」

そういい返したアキトの口を慌てて塞ぐ。

「アキト、試験の前に補正位停止させとけよ……。誤解っていうか……。無駄に怪しまれるだろ。使うなら二号機以外でこっそりやれ。」

「この機体小さな音声も拾えるみたいね。まる聞こえだけど。後でお仕置き。」

「うっ！まあ、まあ、センサー類は完璧という方向で……。」

「ごまかしは却下。」

「と、ともかく！今日はシミュレーションとかも試してくれ。野外実験は明日以降だから。」

「了解。」

このようにして平和な数日が過ぎていった。

来襲

イシガヤが地球に降下して四日目のことである。

「ティターンズが来るだと！」

「はい。タキ少将から緊急連絡が入りました。間違いありません。」

「なんてこった！ティターンズとの話し合いの余地はあるか？無かったら何とか作れ！俺は防衛体制を敷く。ハロルド、そっちは任せる。」

そうやって急いでミネルバのいる支部長室に向かう。途中、地下工場へと向かうアキトを発見する。

「アキト！茶だ！支部長室まで茶あもってこい！」

「どうしたんすか？そんなにあわてて。」

「敵襲だ。茶を持ってきたら工場の機密の処分の準備を整えろ。交渉に失敗したら攻撃が始まるだろう。万が一負けたら機密は処分。工場も爆破だ。」

「わっ、わかりました！」

こういうときはやはり実戦慣れしたもののほうが理解が早い。アキトはすぐにすべきことを悟ったようだ。これで工場のほうは安心である。

「ん！そこにおわすはミネルバの秘書のルイーゼか！ルイーゼ！」

「はっ、はい！」

突然怒鳴られて驚いたようである。

「ルイーゼ、これより連邦兵器の緊急のかつ超極秘の実験が行われる。近隣の民間人および一般社員は釧路地区より緊急退避、もしくは防空壕への避難をさせろ。」

「会長のご親戚のイシガヤ様ですね。しかし、支部長からそのようなご予定は・・・。」

「実は俺は会長だ。親戚じゃあない。ミネルバにはおって話す。ともかく緊急事態なんだ。いいか、二時間だ。二時間以内に今言ったことを行え。いいか、近隣の民間人および一般社員は釧路地区より緊急退避、もしくは防空壕への避難だ。」

「はっ、はい・・・。」

さすがに戸惑う。そもそも突然会長といわれても本当か判断できていないのだ。

「復唱！」

「はいっ！ルイーゼ・アルスマン、二時間以内に近隣の民間人および一般社員は釧路地区より緊急退避、もしくは防空壕への避難をおこないます！」

「よし！これを持って、今から緊急処置としてお前を会長補佐官として権限を委譲する。言うことを利かない奴の権限は剥奪してよい。また、おまえの補佐として特務課のタクト・イシカワを付ける。奴を参謀に使い。いいな！」

「はい！」

そうやって紙切れを渡す。よく見るとメモサイズながら正式の辞令である。筆跡は知らないが、そこに今書かれた花押は間違いなくCPG会長のものである。この任務は彼女には大任かもしれないが、黒脛巾のイシカワなら特務をこなすのに慣れているし、ミネルバの選んだ秘書ならばまず何とかこの仕事をこなせるはずだ。それに、他にこれを出来る人物を探している時間がないのだ。自身は交渉に当たらなければならないし、ミネルバには防衛体制を整えさせて、参謀として手伝ってもらわないとならない。カスミにも自衛MS隊の準備をさせないとならないし、アキトの任務も重要である。他にあてはあるが、接触するまで十五分以上はかかるはずなので探している暇はない。ともかく支部長室に向かう。

「ミネルバ！敵襲！防衛準備！戦略を！緊急回線まわせ！」

「？はい。」

単語過ぎて内容を理解できなかったが、回線をまわす。

「諸君、私は OPG 会長のタカノブ・イシガヤである！黙って聴け！緊急退避だ！緊急退避！これより超極秘の実験を行う。一般社員と民間人は至急釧路地区より退避。もしくは防空壕に退避だ！これについて支部長秘書のルイーゼ・アルスマン、ルイーゼ・アルスマンに権限を委譲した。容姿は 25 歳くらいの女性、身長約 165 センチ、痩せ型、金髪のロングだ！彼女に従って近隣の民間人を退避させつつ諸君も退避しろ。二時間ほどは猶予がある。落ち着いて行動しても間に合うのでそれを忘れるな！」

社内は一瞬騒然とするが、まだ時間の余裕があるので落ち着きを何とかとりもどしつつある。黒脛巾の活躍もあり、ルイーゼも、人員配置をそつなくこなしているようだ。

「イシガヤさん、お茶です！」

「おっ、アキトすまない。工場は任せる。そのブロックにはカスミ君がいたな。カスミ君をとりあえず責任者にして MS 隊の戦闘準備をさせる。使えるやつは全部出せ。それで……これがお前のとカスミ君への辞令だ。」

「はい！」

「会長、ティターンズですか？」

「そうだ。連邦のタキ少将から緊急連絡があった。現在ハロルドに交渉のために接触を試みさせている。」

緑茶を飲みながらそういう。緊急事態であるために落ち着かなければならないからだ。

「首尾は？」

「相手は現在太平洋上。約三時間でここに到達する。どんなに早くても二時間半だ。戦力は航空空母数機に MS40 機ほど。フライトサポートユニットは少ない。また、護衛艦などはいない。威嚇ではなく本気でここを攻める気だ。」

「なるほど……。交渉は難しいですね。」

「ああ。金で解決できればいいが、そうもいかないようだ。」

「どうするつもりですか？連邦軍を敵に回すわけにはいきません。開城しますか？」

「いや、連邦首脳の見解は現在もわれわれに同情を寄せるもの、ティターンズの暴挙に反対するものが圧倒的多数だ。ただ、表立ってティターンズをとめることは出来ないらしい。また、今東北にいるタキ少将は、ここで試験に使っているマラサイを戦闘に投入してかまわないからティターンズを叩けといっている。」

「では……。」

「交渉が失敗すれば迎え撃つ。この支部を放棄するのは大きな損失であるし、タキ少将以外の反ティターンズの連邦将校に恩を売りつけるチャンスだ。何とか戦略を立てておいでくれ。」

「仕方ありませんね。」

「ん、通信が入ったな。」

「どうした？」

「ハロルドです。一応ティターンズに通信がつながるようになりました。」

「つなげ。」

支部長室のメインパネルに映像が映し出される。ただし、まだかなり不鮮明である。

「私が討伐隊司令のカワグチだ。」

「私は OPG 会長のイシガヤだ。早速だが、どうしてうちを攻める。うちは連邦軍の兵器開発工場でもある。エウーゴとの戦闘が起きている現在、仲間割れはエウーゴの得になるだけだぞ。」

「戯言を。エウーゴにも加担しているのだから。しかし……聞いたことのある声だな。」

「気のせいだ。それに、うちは連邦政府お墨付きの優良会社だ。AE の連中と一緒にして

もらっては困る。」

「ふむ。もっともな言い分だ。しかし、私にはこれをとめる権限はない。これはティターンスの総意である。覚悟しろ。」

「なるほど。しかしこちらにはそちらが望むなら千億円の融資をする準備がある。これでいかがか？」

「聴けん。」

「では一千三百億円に加え、貴公に三十億円ではどうか。」

「いや。それは OPG を制圧してからその物資を売却でもして手に入れさせてもらう。小遣いの心配をしていただく必要は無い。」

「残念だ。何とか戦闘は回避したいのだが。」

「では、すべての物資を残し、退去すればよからう。」

「商人としては、ここの物資は命より大事だ。それは聞けない。ただ、こちらを攻めるということは連邦軍にも刃を向けることになる。こちらには、連邦軍の技術部の総意として、関係者以外は絶対に排除という命令が下っている。ことは穏便に済ませたいが。」

「貴君に明日はない。私は直接攻撃はしないが、それで事足りる。用件はそれだけか。通信は切らせてもらう。」

「ちょっとまで、確か貴君は札幌に配属されるはずだよな。しかし家族は現在フィリピンにいるんだよな。あそこはカラバの連中がいると聞くが。」

「ふん。尻尾を出したな。すでに家族は札幌にいる。貴様とつながりのあるカラバにどうこうされる心配はない。脅しは効かん。」

「そうか。札幌ね。残念だ。まだフィリピンにいるなら連邦軍の特務隊に要請して、カラバの連中から守ってもらうように手配しようと思ったのだが。しかし、札幌なら安心だな。すぐに貴君が到着するはずだし、札幌なら当分カラバもエウーゴも手は出せまい。そうか札幌か。仕方ない。戦いたくはないが、われわれは連邦軍の命令がある以上ティターンスといえど排除させていただく。札幌のご家族に OPG の晴れ舞台を面白おかしく伝えてくれ。それではごきげんよう。」

カワグチはそこでしまったと思う。うっかり自分の家族の居所をしゃべってしまったのだ。いつにもないミスである。つい OPG の尻尾をつかんだことで油断してしまったのだ。しかし、OPG の様子は多少わかった。OPG の背後にいる連邦将校はタキ少将をはじめとするティターンスを嫌う連中である。甘くみていたが、実際はかなりの勢力を有しているようである。これは本部に連絡する必要がある。また、OPG も宣戦布告に動じないということは流石に戦力がいかほどか存在するということであろう。おそらく MS にして三十機近くあるはずだ。こちらは計 40 機。そしてティターンスの精鋭クラスである。勝算はある。ただ、

「ハリー少佐、私はこれから全速で札幌に向かう。ついて MS 十機はこちらの護衛および到着後の警備にまわさねばならない。貴君は残存部隊を率いて OPG の釧路支部を制圧なされよ。」

「はっ！了解しました中佐！」

「敵は意外と強いかも知れん。注意しろ。後は任せる。」

一方。

「はぁ。ちっとあせって交渉失敗。仕方ない、俺は現場の激励に向かわないとならん。あと、札幌の情勢をかく乱しないとしない。黒脛巾に連邦軍基地周辺を徘徊させる。徘徊するだけでいいから。」

「分かりました。こちらはおまかせください。」

「アキト、立体映像装置はどこだっけ？」

「あれですか？しかし遠めになら本人かどうかわかりませんが・・・。」

「司令室に置くだけだ。それで十分。司令室（支部長室）にいるって見ればいいんだし。俺は前線で遊撃するぞ！落ち着いてられるか。」

「ははは。確かに昔から落ち着きないですよ。司令官がうるちよる遊撃だし。」

「だな。そりゃあもう、風来坊たあ俺のことだ！ってかんじだし。ぐはっ！」

イシガヤは後ろから近づいてきたカスミに後頭部を叩かれる。

「ちょっとは自分の地位とかも考えて。」

「むう！会長自ら遊撃！これぞ日本人型リーダー・・・ぐはっ！」

再度叩かれる。

「ごたくはいいから。それより戦力が心細くない？」

「まっ、ガンタンクとか旧式も多いしな。幸いマラサイ十機は動員可能なのが都合いい。あれは新型実験中の改良機だから各機癖は強いが高性能だ。」

「じゃあ、私は何で出ればいい？私向きな機体がないようだけど。」

「女神を使ってくれ。テストもできて一石二鳥だ。それに、普通の量産機に載せるのは心もとないし、カスミ君の技量を生かせない。が、あれなら完璧だ。」

「分かったけど・・・いつもいきなり実戦よね。」

「中尉なら大丈夫ですよ。それに俺たちジオン技術者はいつもこんな感じでしたから。連邦と違ってこういったノウハウは万全です。」

「ありがとう、アキト工場副長。戦闘終わったら、会長からたっぷりご褒美もらっていいから。会長にはお説教だけ。」

「うわっ！会長よばわりだ！」

「つかイシガヤさん、普段なんて呼ばれてるんですか？」

「知りたいか、俺はバカ呼ばわりとか普通にされてるぞ。」

ボスッ！

イシガヤは後頭部にカスミから一撃食らう。

「すまん・・・ともに君付けた。ただいまの不穏な発言は撤回させていただきます。」

「完全に尻に敷かれてますね。」

とはいえいつまでも遊んでいるわけには行かない。MSの整備はほとんど完全であるが、CFGにとっては今回がはじめての本格的な戦闘なのだ。しかも、宇宙ではいくらかゲリラと交戦経験があるが、地球では流石にゲリラが頻発に現れることはない。ましてこの釧路、北海道自体が狭い島であり、MSと隠して運用することなどできるものではないのだ。したがって、この支部ではゲリラとさえ交戦経験がないのだ。

「旧式の長距離支援MSが三機、新鋭機マラサイ十機、コスモ・ガディス二機、俺専用グフ改一機、グフ二機、ドム三機、旧式MS九機。MSはなかなかもって厳しいな。防衛兵器があるだけですが。アキト、俺のグフにはアレとかソレとかくっ付けておいてくれ。ド・ダイはいくつある？」

「三機です。」

「ちょうどいいか。グフ隊で遊撃しよう。パイロット連中を急いで召集。司令室に集める。カスミ君、そろそろミネルバが作戦の大要を決めたはずだ。軍議に参加するぞ。」

「ええ。」

「そいじゃアキト、グフとか任せるからな。立体映像装置は急いで司令室だ。だが、MSの整備のほうが優先度は高いからそのつもりで。」

次は作戦立案とパイロットである。急ぎ司令室に向かわなければならない。

「さて、集まったかな諸君。何人いる？」

「はっ！総員40名中4名が不明です。よって36名であります！」

「そうか。思ったより訓練が行き届いているな。」

イシガヤは、あるいは半数近くが逃げ出すと思っていたのだ。召集段階では戦闘になることは伝えていないが、パイロットなら、工場区画の状況を見れば、何が起こるか予想がつく。」

「えー、一応私が最高司令官？で、バイブル君が私の代わりに全軍の采配を取る。」

「質問よろしいですか？」

「何だ？」

「バイブル支部長の戦闘経験は？」

これは確かに重要な質問である。よもや素人に命を預けたくないのが心情というものなのだ。

「戦闘回数は・・・大小合わせて18回くらいかな。戦闘指揮能力は一流だ。一時期私の愛人だから出世が早いとかうわさが流れたらしいが、当然そんなことはない。そんなことしたら命がいくつあっても足りないしな。彼女の抜擢はその類まれなる用兵が経営に十二分に発揮されているからである。彼女はかつて学徒動員ながら、とある艦隊の主要艦の艦長代理を務め上げ、あまたの戦果を上げている。何なら十時勲章とかもあるが。」

そういわれると確かにミネルバの経営力は確かにすごい。これはこの支部にいる誰もが知っていることである。とすれば、それが戦場でも役に立つだろうことは分かる。それに、勲章自体後ろの壁にかかっている以上嘘ではあるまい。(イシガヤの勲章ではあるが。)しかし、必ずしもそれが戦略のうまさとは限らないのだ。

「で、一応、連邦軍司令部に知り合いがいるので彼女に一回連邦軍の昇格試験とか受けさせてもらったんだが、すぐにでも少佐か中佐くらいなら務まるって回答だった。これが証拠な。」

そういつて、日本方面連邦軍スズキ中将のサインが入った紙切れを見せる。そこには確かにそう書かれている。うそにしてもここまで周到なうそは用意にはつけない。よって、うそであったとしてもこれは十分に知略に優れている証拠になるのだ。

「これでいいな。次に、MS隊の顧問格として、こちらの・・・ミキ・ナカサト君を作戦指揮の補助に当たらせる。彼女はバイブル君の所属する艦隊でMSを駆り、一年戦争では33機のMSを撃墜したパイロットだ。」

そうカスミをさして言う。カスミはCPG社員にあまり知られていないが、万一会長婦人だとばれると厄介になるからである。CPGの会長があからさまにジオン系です、と公表するわけにはいかないのだ。

「諸君らもなかなか優秀な人員ではあるが、彼女ら一流の采配や意見は重要だ。いいな。これより軍議に移る。」

作戦開始

「これが作戦要項です。我が方は支部の周りに配置された三重の防壁に拠って、敵を迎撃します。いわば籠城戦です。理由としては奇襲が不可能だからに他なりません。当方の飛行ユニットはド・ダイ三機、戦闘機五機です。また、水中戦闘可能なMSはありません。また、今日は快晴のため空中での隠密行動は不可能です。これでは奇襲は成功しません。援軍は期待出来ませんが、敵も多くは陸戦用です。地形を生かせばMSの性能差を補えます。」

普通、籠城は城の内外で呼応する事により真価を發揮するが、やむを得ないこともある。ただ、城攻めには十倍の戦力が必要と言われるので、たとえ味方の戦力価値が敵に劣っていても、十分な勝算はある。

「なるほどな。しかしミネルバ、やはり後巻き・・・遊撃戦力は必要だろ？」

そうイシガヤが口を挟む。

「はい。ド・ダイを使います。三機のMSはド・ダイに載せて手配した民間施設に隠しておきます。敵が来次第発進。防壁に誘い出します。」

「ふむ。トモアキをその隊長にしよう。」

「？トモアキ・・・！？またですか！」

「だって適任じゃん。遊撃隊長は私の従兄弟のトモアキにする。彼は前大戦でも若くして一小隊を指揮している。戦果も十五機撃墜。決定だ。」

結局黙って座っていられるイシガヤではない。それに、遊撃戦だけは得意と自負しているのだ。

「わかりました。確かに適任です。では本隊についてですが、長距離砲撃隊の指揮はナカサトさんに任せます。旧型MS隊は私が直轄指揮をとります。それ以外は、トウドウ隊長にお任せします。よろしいですね。」

「はっ！」

「トウドウ隊長は三の丸よりまずバズーカ砲撃。続いて敵の侵攻を見計らい二の丸に撤退。敵が三の丸を占領した時点で矢倉ミサイルランチャー、他、特殊ミサイルランチャーでの攻撃を加えます。主に二の丸を盾に防戦します。直轄部隊は機を見て縦横に移動しつつ攻撃。ナカサトさんの部隊は本丸から支援砲撃を任せます。」

「なァ、花火あげない？」

「はっ？」

「花火な。ビックリさせようと思ってな。覚えておけよ。それはともかく、通信についてだが、新たに導入した装置により 1535回線は暗号化される上にミノフスキー粒子下でもかなりの通信が可能だ。ただし、敵に解読されない保証はないが。通常は防壁の光通信回線を使えばいいわけだが、一応覚えておけ。1535だ。」

「はっ！」

「ところで陣型ですが、当方は主に鶴翼に布陣します。敵はあるいは鋒矢に構えるかもしれませんが、その場合ナカサトさん方の砲撃が重要です。敵の侵攻を止めさえすれば敵側面を突けるので勝てます。それ以外の陣であれば奮戦有るのみです。また、戦術面では必ず一騎打ちは控えてください。」

「なぜでしょうか？マラサイの性能はこちらが上です。」

「蛮勇は賞賛に値しますが、一人の英雄より、相互協力下の部隊のほうが、戦力価値が高いからです。仮に敵が精鋭だとしても、束になってかかれば倒せます。」

「しかし、」

「よろしいですか、今回の作戦は個人の戦果を上げることではありません。あくまで支部の防衛。いくら戦果を上げたいといっても支部を破壊されてはなりません。ですから、束になって確実に敵を破壊する必要があるのです。」

ともかくも大まかな作戦は決まった。奇策はないが、しかしもっとも効率的な作戦である。

「では各員持ち場に移りなさい。」

「あなたがトモアキ殿ですか？確かに会長とそっくりです。」

「ああ。そんな名前になった。お前たちはケイとビスだな。よろしく。」

とはいえ、まったく戦士らしくないイシガヤに驚いたようだ。これで戦果が15機である。

「一応先に言うが、俺の遊撃は感性だ。機を見ては攻め、機を見ては引く。勝手な行動は慎め、俺の動きは不可解だからな。」

「はっ！」

「お前たちはジオン出身だったな。」

「はい。一年戦争ではアフリカに居りました。」

「そいつは大変だったな。俺は地球にもしばらくいたが、宇宙にもいて戦場が固定していなくてな。キシリア閣下の直属部隊として行動していた。」

本当であればなかなかすばらしい能力を持っているのだろう。ひとまずは安心である。

「遊撃の基本は負けないことと、敵の邪魔をすることだ。敵を落とすことはおまけみたいなもんだ。そんなことにこだわるなよ。第一グフだし無理はいかん。撃墜は本隊に任せるように。では待機しろ。音を一切たてるなよ。」

「はっ！」

「敵は？」

「釧路港に到着したようです。攻撃しますか？」

「いいえ。引き付けてから討ちます。」

「ドダイタイプ三機、MS三機が後方の湿原に向かいます。」

「こちらの対空砲は万全です。おそらく敵は湿原に降下、陽動をかけるつもりでしょう。ですが、敵はハイザック。ドム隊三機は迎撃に向かいなさい。」

「司令、ドム三機は旧式です。不利では？」

「湿原で二足歩行ユニットは機動性に劣ります。しかしドムはホバー走行ですから問題ありません。敵のスラスタ移動は脅威ですが、長時間は使えませんから適当にあしらいつつ機を見て撃破しなさい。」

「了解です。」

「敵27機は魚鱗に構えた模様です。」

「なるほど。トウドウ隊に伝えなさい。作戦は初期のとおり。また、迫撃砲も使いなさい。」

「アキト工場副長、迫撃砲の準備は？」

「出来ました。弾数は二発きりですが、拡散弾です。破壊力は乏しいですが、広範囲攻撃が出来ます。」

敵が多い以上拡散弾でも効果はある。さらに密集しているのだ。攻撃力が低くても防御力を下げたり、機動力を下げる事が出来れば旧式でも充分に対抗できる。

「敵が射程に入ります。」

「総員砲撃準備。……撃て！」

敵に迫撃砲やバズーカの嵐を見舞う。

「なにっ！」

直後、正面のモニターは粉塵に包まれる。さらには白煙が立ち込める。

「何事だ！」

「流れ弾が地面をえぐり粉塵が発生したようです。また、敵が煙幕弾を放ったようです。」

「アキト殿はすぐに退避してください。MS隊は敵の攻撃に注意。」

すでに目視による敵の識別は出来ない。さらにミノフスキー粒子を散布し続けているためにレーダーも使えない。

「トウドウ、あなたも下がりなさい。すぐに兵を退くのです。」

「了解です。」

ミネルバの指令に従う。いかんせんこうなっては不利だからだ。こちらは陣を敷いていた以上位置がばれている。現に敵の砲撃が始まっている。

「全員無事に二の丸へ退避せよ。破損したMSは放棄してもかまわん。」

当初の作戦以下の戦果しか上げていないが、止むをえない。ここで応戦しても不利であるからだ。しかし、退避するにしても数機が撃墜されるのは確実である。

「急げよ！うわ！」

直後閃光がきらめく。トウドウは撃墜されたようである。隊長機が撃墜されるというのは本来大打撃である。指令系統が壊滅しかねないからだ。

「ガモウ、貴方が後任です。トウドウの後を引き継ぎなさい。オペレーター、イシガヤに連絡。敵を攪乱、あるいは分断して進攻を食い止めよ、と。」

「了解です。」

イシガヤ隊の潜む倉庫である。すでに戦闘が激しくなっているのはここからも判るが、幸い敵には位置を知られていない。MSに火は入れてあるが気付かれないのにはわけがある。この倉庫、実は巨大な冷凍倉庫の隣に隣接した倉庫軍であり、冷凍倉庫からの冷気を引き入れることにより熱センサーにかかるのをカモフラージュしてあるのだ。しかも、機械工場がいくつか近くにあるため、MSの起動音もいくらかは隠せる。敵に偵察専用機がいればばれる可能性も高くなるが、敵はいたって普通のハイザックである。改造機も見当たらない。ならば、かなり近くに潜む彼らに気がつかないのも無理は無い。

「さて、出番が来たぞ。我が隊はこれより敵側面を討つ。敵は精強なれど、我が隊三機の奮戦あれば必ず本隊が敵を打ち砕かん。出撃！」

しかし、グフ三機である。

「ゲーツ隊長、高速で飛来するMS三。」

「ナッシュか。機種は？」

「・・・グフです。ド・ダイに搭乗。それより通信はいります。」

「なに？」

瞬時驚く。交戦中に通信である。あるいは敵の内部分裂かと期待もするが・・・。

「え～。オホン。訊いているかね敵諸君。何を隠そう我こそがCPG社の会長、タカノブ・イシガヤである。貴君らは連邦軍施設を攻撃するのと同義なことをしているわけだが、心に恥じることは無いのかね。」

「フン！何を言う。所詮影武者だろう。これからはティターンズの時代だ。屑な連邦兵にかまっていられるか！」

「ゲーツ隊長！」

「何だ？」

「通信がただ漏れです！」

「何だと！」

ゲーツの暴言にティターンズ兵の比較的まとまな連中に動揺が走っているのだ。ゲーツもまさか通信が漏れるとは思っていなかったが、これを利用し(わけのわからん)機材で通信を漏らしたイシガヤも小賢しい。しかも、イシガヤと名乗る人間が、会長かどうかはつきりしないものの、しかし、まがりなりにも会長自ら出撃してきたというのは一種の脅威を与えている。

「ビス、ケイ、行くぞ！」

「このままですか！散開しては！」

「ならん！今が好機だ！雑魚に構うな敵中央を突破するだけでいい！」

要は更なる攪乱である。敵の撃破が目的ではないのだ。

「しかし！」

「つべこべうるさい！お前らも元ジオン兵だろ！俺に遅れず死にやがれ！戦の基本は兵の集中。進め者ども敵滅ぼして、討てや者ども敵の首・・・」

イシガヤは詠いながら敵のミサイルを防御する。これから先は敵の重火器全ての射程圏である。いくら動揺しているとはいえ無数の弾丸が飛んでくるのだ。

「ビス、ケイ、足は止めるな！弾の雨向かう彼方に降りしとて汝続けや我が旗に！」

「はっ！？」

イシガヤの詠うような口調にいささか困惑を覚えるが、しかし何とか意味を理解し、ともかくもイシガヤ機に続く。しかし、敵も体制を整えつつあるので深く進攻するのは危険である。が、突然。

「花火ってえのはこうやって使う！」

イシガヤのグフ改のランドセルに装備されていたミサイルポッド？が開く。

「見るや者ども！」

瞬時大輪の花火が空に咲く。夜でないのが残念ではあるが、特殊な素材で作ってあるのでそれでもいくらかの華はある。

「続いてもちいだしたるはなんと閃光弾六発！減光フィルターも無視する威力！目えつぶれ！」

戦闘中に目をつぶるなど正気の沙汰ではないが仕方がない。流れ弾が当たらないのを祈るしかない。

「なっ！何が！」

続けての珍事に敵のうち十機あまりが立て直しつつあった編隊を再び崩す。すでに彼らはガモウ隊どころではなく、イシガヤ隊わずか三機に釘付けである。

「ビス、ケイともかく撃てるだけ撃て！下手に狙わずともいい！」

そもそも悠長に狙う暇は無い。もたもたしていれば確実に囲まれるのだ。

「少尉、聞こえますか？下方に。」

本部より若干距離はあるがこれも通信の中継装置のたまものである。

「各員降下！」

「下は釧路川です！」

「じゃあ川に落ちるな！」

問答無用である。川に落ちたところで命に別状無いだろうが、味方に撃たれれば命が危うい。

「よろしいですね？」

「ああ。」

了解を得たミネルバは矢倉状の防衛ミサイルポッドのスイッチを押す。なにげに作って

あったものが役に立った。放たれたミサイルは小型とはいえ百発ばかり。さて何十億の花火ではあるが使うための花火である。

「どうだミネルバ？」

「二の丸に防衛線を引き終えました。背後に敵陸戦隊3機が降下していますが足場の悪い湿地帯ですので十分迎撃出来ます。問題は正面の敵機です。先ほどのミサイルがあまり効いていません。」

「確かに防衛線を後退させれば他の矢倉からの攻撃も可能か……。我が隊も後退する。三の丸に敵を誘き出せ！」

何気に戦国時代の戦いのようになり始めたが、しかし防弾壁を基地周囲、町周囲に設置し防衛線を作るにしても、三の丸、二の丸というネーミングセンスは恐ろしくイシガヤの趣味が反映されている。当然基地は本丸である。勿論天守閣などという無用の長物は存在しないが。

「ガモウ隊長、バズーカからビーム兵器に変更しては？」

「そうしよう。ビームのほうが粉塵が少ない。ビームライフル搭載機はビームライフルに武装変更。」

そういつてトレーラーや倉庫に配置された兵装に換装する。

「敵は三の丸への進攻を渋っているようだな。ん！？イシガヤ殿はどこに行かれた？」

「ガモウ、気にすることはありません。二の丸には高性能索敵装置がありますね。それをナカサトのところへ繋ぎなさい。」

敵が分散し始めているために、MSの索敵器では処理が追いつかないのだ。本丸の機器は戦術用に必要のために予備を発動させる必要がある。

「こちら……。ナカサト機。レーダー繋がりました。これより敵本隊と思われるものに狙撃を開始します。」

言うな否やガトリングによる狙撃が開始される。コスモ・ガディスの高性能のおかげで彼女の能力は十分に発揮される。

「隊長、こんなところでバレませんか？」

「大丈夫さ。バレた様子は無い。ここでしばらく様子を見よう。」

木材置き場の水中の中である。このあたりはミノフスキー粒子が濃くされているためにレーダーでは判別できない。まして、水中に巧妙に隠れている以上、そう簡単には見つかることは不可能である。

「まあ、ここでしばらく昼寝だな。上ではミネルバが上手く指揮するだろうし、ナカサトが露払いをするだろう。十五分くらいで打って出るから。」

「そんな悠長に構えていいんですか！」

「ああ。敵襲は忘れたころにやってくるってな。」

「しかし！」

「いいから黙ってる。喋ると見つかりやすい。さて。」

イシガヤは光ファイバー通信をマニピレーターから基地本部へと接続する。

「ハロルドハイルカ？」

「コウクウウボデスカ？」

「ソウダ。アレヨオトサネバナラナイガ……。ワガMSハサケナイ。シカルニ、センネンツクッタセンソウハクブツカンニハスイチュウヨウMSガ5キアル。ズゴックカイ・ズゴック・ハイゴック・ゴック・ガンダイバー。コレヨモツテクウボラゲキハセヨ。」

「リョウカイ。」

「セイビ・ダンヤクソウテンハバンゼン。ゲンザイクウボヲマモルテキMSハナイ。ケントウライノル。」

幸いにして、敵はこちらの戦力を大体把握していたのであろう。こちらの戦力がほぼ陸戦兵器と判断して空母の守りは薄い。そもそも、すべてのMSを戦場に投入しているようなのだ。これを水中用MSをもって撃破するのである。敵の目を欺くべく作った戦争博物館は臨海立地の上に、博物館の下にはMS発進装置が備えられ、そのまま水中へ出撃することが可能である。

「ミネルバ殿、会長からの命令で、我ら黒脛巾が水中用MSで出撃、敵母艦を撃破します。」

「水中用？ハロルド、そのようなものが・・・。」

「博物館ですよ。」

「なるほど。よろしい、支援をします。あなた方は至急敵母艦を撃破しなさい。想定時間は？」

「はっ、出撃まで五分。接触までプラス五分です。」

「そうですか。会長に五分後に奇襲をかけるように連絡もしておきなさい。」

「了解しました。」

「ナカサト機、これより煙幕弾、及び攪乱用兵装を使用。また、声東撃西でMS博物館と逆方向の敵に砲戦部隊は集中砲火。私もガディスで出撃し、その方向へ討って出で、時間を稼ぎます。」

「ええ。了解。」

声東撃西は読んで字のごとく、東で声をあげ敵の注意をひきつけた後、西から攻撃を加える策である。いたって初歩的な戦略ではあるが、意外とこういったものに引っかかるのが人間である。

「各隊煙幕弾発射！」

敵位置よりまず南西、博物館方面に一斉射した後、東北東へ煙幕を集中させる。これに気をとられる。さらに、博物館方面に一時気が向いたとしても、東北東に集中した煙幕によりむしろそちらに気が回り、博物館方面への注意は低下する。低下した注意の上に煙幕による視界低下である。

「各員突撃！目的は時間稼ぎ、かつ陽動です。ガモウ隊も続け。健闘を祈ります。」

ともあれミネルバも攻勢に出る。彼女のガディスは追加装甲ガーディアンで守られ、武装は近中距離用の通常兵装である。本来武装も彼女専用にするつもりであったのだが、そもそも素人同然のパイロット能力のために適正がいまいち判らないのである。ミネルバは優秀な指揮官ではあるが、正規のパイロット訓練を受けたわけでもなく、MSでの実戦はこれが初めてである。それでも何とか戦えるのは、彼女の日ごろの努力と擬似人格プログラムによる操作の補正のおかげである。それを以てすれば、何とかティターンズ兵ともたたかえる。

「私の隊は無理をしないように。旧式ですから。ガモウ隊のマラサイはなるべく奮戦しなさい。」

「ミネルバ、敵が退くわ。」

「カスミ・・・いえ、ナカサトさん、本当ですか？」

「ええ。映像を。」

そう言って転送する。

「ね。追撃か・・・」

「いえ。ガモウ、追撃はしないように。こちらも少し下がらしましょう。」

「何ですか。ここは追撃を！」

「いえ。敵後方が全く崩れていません。おそらくは罠でしょう。」

「前方が敗走するんですよ、後方まで崩れることはないでしょう。ですが、集団心理でどうせ崩れますよ。」

「ですが、前衛が崩れれば普通後方に何らかの動揺が走るものです。しかしそれがありません。」

「ちっ！女が！臆病なだけでしょう、司令殿は！」

「女でも臆病でも、私が司令です。退きなさい。」

静止を振り切ってガモウ隊数機がティターンズを追撃する。しかし、当然それは罠である。ガモウ以下の数機に集中砲火が加えられる羽目になる。敵は、パイロットさえ脱出させずに機体をボロ雑巾にするつもりなのだ。

「まずいですが・・・ナカサト機、援護を頼みます。イシガヤに緊急連絡、すぐに打って出ると。」

いや、ミネルバ機はガモウなどのパイロット脱出の援護に回る。仮に死んでいても、援護に回るそぶりを見せなければ、たとえそれが非合理的でも、ともに戦って日が浅く忠誠心の薄い部下についてはこないものだ。武田勝頼が滅んだのも、一説には部下を見捨てたことで家臣団の崩壊が始まったといわれるし、反対に、毛利元就は増水した川の激流の中にまで馬を乗り入れ、対岸の部下の救助に回るまでして部下の掌握に腐心している。

「なるほどねえ。ミネルバもパイロットとしては技量が足りないのに良くやる・・・ミキ、悪いがミネルバは死なすな。あれは戦友でもあるし、得がたい人材だ。」

「わかってる。どうせ会社もミネルバさんとライ君とオニワさんがいないとどうにもならないんでしょ。でも、私も近接戦は苦手だから、早く援護に。」

「解ってるさ。一分でいくから。」

直後水中からイシガヤ機が単独で飛び出す。

「ビス、ケイは残ってるナカサト隊の援護。」

それを言い残し最大加速をする。敵側面をつける配置である。

「こういったシチュエーションは比較的得意さな。」

イシガヤのスキルは、(何故か)弾がそれる。(何故か)弾をふせぐ。(何故か)弾が爆発しない。の他は、攪乱である。攪乱に成功すれば、敵の攻撃が弱まり援護になる道理である。

「やっぱ基本はこれだよな。スイッチ・オン。」

イシガヤの常套手段、通信ジャックだ。

「たっ！隊長！敵です！横に敵です！殺される！死にたくない！なんて強いんだあのグフ！まるで赤い彗星！たすけてくれ〜〜〜！」

と、のたまわる。部下がパニックを起こしたと勘違いすれば、隊長機はそれに気を取られるだろうし、同僚も気が取られる。

「各機、側面に備えよ！取り乱すな！」

「隊長！敵が強すぎます！助けて！たすけてえええ！」

「さっきから叫んでるやつ！誰だ！」

部下A。 通りすがりの旅人。 CPG会長。この中の誰かです。」

「くそっ！騙しやがったな！」

「やあ〜い、ばかっ！」

相手を怒らせればこちらに注意が向くものだ。さらに、冷静な操作が出来なくなる。なにぶん、ここまでしなければミネルバの隊が危険なのだ。

「まいったな。敵強いし。ミネルバ、さっさと退け・・・ミキ、何とかならんか？」

「無理。」

「そうか、無理じゃあ仕方ない。乱戦を收拾せんと不利だし。俺が隊長機をやるから後は任せる。」

「了解。」

ともかくも、イシガヤ機が特攻する。恐るべきはその強運である。偶然にも敵隊長機と思われる機体までは一直線に敵がいない。

「一駆けに大将首を狙いては鋒矢となりてただ攻め入らん！」

「くっそ！ナッシュ！どこにいる！俺を守れ！」

「ゲーツ隊長、こっちも強いやつがいます。マラサイクラスはほぼ駆逐しましたが、やつの攻撃を防ぐのが手一杯です！」

「何だと！たかが民間企業のパイロットだろ！」

「いえ、我らよりよほど戦場慣れしています。特に射撃は半端じゃありません。接近戦を挑んでいます。……」

「さっきのガトリングの奴か。」

「はてさて、それなる者は我妻なり。戦場往来三年なれど先の大戦参陣し、敵を討つこと三十三機。今また討つは汝らの首。死ねや死ねや死ねや死ねや！」

「くっ！」

「その首貰った！」

いうや、隙のあったゲーツをイシガヤ機が討ち取る。が、イシガヤ機も流石に無傷ではない。ゲーツも通信して隙があったとはいえ、ティターズのパイロットである。イシガヤ機のシールドは損壊、左腕・左脚損傷である。

「まずった。そっちは？」

「ミネルバさんは退却させたけど、部隊の損害が……。」

「そうか。もう別働隊が敵空母を攻撃する時間だ。よく守備を固めていれば退くだろう。」
希望的観測ではある。が、敵とて今は互角の戦と自覚しているだろう以上、退くに違いない。

富良野攻略

「ふむ。戦死者35名。思ったより少なかったな。」

「はい。ですが、貴重な命でした。」

「判っている。しかし、敵も退いてくれて一安心だ。討ち取った敵は十八機。味方の被害は、修理不能が十機、小破程度は八機だ。まずまずだな。半月はここが攻められることもあるまい。」

「そうですね。連邦高官への工作はお任せください。黒脛巾に指示を出しておきます。この支部はどうしますか？」

「まずは、作りかけのマラサイの完成を急げ。修理もだ。また、通常の業務は当面停止。戦後処理・戦闘準備を主とする。遺族への慰労も丁重に行え。あと・・・ブラックをこちらに呼べ。至急だ。このさい北海道を席卷すべし。」

「会長、戦火を拡大するのはいかがなものかと・・・。」

「わかっているが、カワグチはすでに大陸へ援軍を要請している。一ヶ月もしたら再度ここを攻める気だ。先守防衛でティターンズを駆逐し、反ティターンズの連邦軍に基地を譲っておかないと・・・。まずは富良野だ。」

「ですが、修理中で使えるMSがありません。」

「いや、幸い富良野の戦力はMS三機だけだ。黒脛巾で乗っ取る。」

「できますか？」

「俺がグフで支援し、ミドルMSで一気に制圧する。地形も既に把握して、臍巾を各所に貼り付けたり潜入させたりしている。」

「勝算は？」

「八割。脛巾は精鋭『緋の目』だ。ミドルMSは六機。パイロットはいずれも優れている。」

ただ、問題はイシガヤがたてた戦略である点だ。いささかぬけている彼の戦略には穴がある場合が多い。

「いいたいことはわかる。が、作戦開始直後に人質を得る準備は出来ているし、基地司令を暗殺してからことを起こす。失敗すれば兵を引く。」

「ですが・・・やはりMSをあるだけ動員した方が・・・。」

「いや、うちじゃなく、エウゴかゲリラが攻めたと偽装したい。グフは別として、うちのMSは使えまい。」

「・・・では、グフよりもドムをお使いください。」

「なんだ、カスミ君のドムの改修が完了してたのか。そいじゃあそれを使う。」

「ハロルド、首尾はどうだ。」

「司令のオオウチは防備が甘いですから予定通りです。人質に関しては大陸のエン大佐の娘がいるようで、それを。」

「なぜエンの娘が？」

「わかりませんが、エン大佐は先に逃げたようです。」

「それでは人質としては不足だな。政治の駒には使えるから良いが。」

「申し訳ありません。」

「では作戦を開始するか。」

イシガヤはおもむろにドムを起動させる。このドムは迷彩に塗装され、いくらかのステルス性が確保されている。もっとも、それにどれほどの効果があるかわからないが。

「ハロルド、狼煙を上げろ。」

直後遠方の基地から爆音が届く。しかけた爆弾が爆発したのだろう。甘いセキュリティーである。オオウチという司令は実力もないのにコネで出世をしたといわれるが、実にその通りのようだ。

「会長、御武運を！」

「ああ。制圧は任せる。」

正直なところ、ミネルバにああは言ったが何としても富良野、それを足がかりに札幌を攻略しておきたいのだ。十勝や宗谷、の道東・道南は CFG と昵懇の連邦軍部隊やシティなのだが、それ以外はまだ CFG の影響が少ない。特に札幌は今なお企業が多く、市場は混戦状態であり、市場占有率は各事業平均でまだ 24% である。が、今回 CFG がティターンズを撃破すれば周囲の企業に無言でも大きな圧力を加えられるし、製品の優秀さをアピールできる。さらに、昵懇のタキ少将影響下の連邦軍かスズキ中将旗下の連邦軍あたりが派遣されれば CFG の影響力は強まる。そして、現在日本に派遣されるとしたらティターンズを除けばその二人の旗下の部隊しかないはずだ。後一つ言えることは、インガヤには、たとえ攻略できてもカラバに基地を明け渡す気は毛頭ない。大した戦力とは見ていないからである。後ろ盾は強力に限るのだ。

「さて、まずは。」

おもむろに多弾頭ミサイルを放つ。MS 格納庫に向けてだ。あわよくば敵の MS を使用不能にする策である。続いてチャフグレネードを放つ。敵の通信機などを攪乱し、内部の緋の目作業員を助けるためでもある。

「やっぱ基本は声東撃西だよな。」

ともかくも陽動である。ドムはあくまで敵をひきつけなければならないのだ。

「しかし、MS が出てこないな。」

流石に不思議である。あまりにも反応が薄いのだ。

「ハロルド、連絡ないか？」

「いえ。緋の目が捕まった可能性が・・・。」

「そうだな。ちょっと強襲かけてみるさ。」

あるいはこの静けさは敵の罠かもしれないが、確かめるすべがない。様子を見る手もあるが、もし敵の罠の場合むしろ時間をおけば危険である。ともかくも強襲するほうが、インガヤの気性にも合う。

「これは・・・。」

なんともはや、この静けさの理由は、簡単な話敵兵が一目散に逃げ始めていたのだ。しかも、まさに脱兎のごとくである。

「少佐、・・・いえ、子悪魔殿、申し訳ありません。我々は初期の作戦に失敗しました。」
潜入した緋の目から連絡が入る。

「どうしたのだ？」

「はっ、作戦を失敗。基地司令と誤って、この基地の参謀格を討ちました。その際、それを目撃した兵士たちが一斉に逃げ始め、基地はすでにほぼ空です。また、オオウチは降服。身柄を確保しています。エン大佐の娘や、数名の兵士も降服しています。」

総連絡を受けたインガヤはハロルドに通信を繋ぐ。

「緋の目の言うことは本当だろうか。あっさり行き過ぎて多少怪しいが・・・しかし、緋の目が裏切るとは思えん。」

「同感です。しかし、確かに逃げる兵士を多数目撃しました。」

「そうか。お前たちは MMS でそいつらを殺せ。降服すれば命までとる必要もない。森のガウに監禁しろ。」

指示を出す。

「緋の目に告ぐ。捕虜を連行しろ。」

「緋の目は武装解除。これよりハロルドの隊がこれらの捕虜を連行する。」
追討作戦が終わったのち、イシガヤがドムの中から彼らにジャイアントバズの銃口を向けつつ外部音声にして話す。万が一緋の目が敵に寝返っていた場合を想定してのことだ。あまりにも作戦が簡単に成功したためだ。

「緋の目は、一路釧路へ向かえ。報酬はイシカワに貰え。」

とりあえず、捕虜と引き離すに限る。緋の目も、自分たちが多少の疑いを持たれていることを意識して神妙にしている。なにぶん特殊部隊の性である。こういったことには慣れているのだ。それに、イシガヤは疑いはしても暴君ではないために、すぐに疑いが晴れることもまず確実なので、心配をするほどのことではないのだ。全ては一応のことである。

「オオウチ、といったな。ゲリラに捕まる気持ちはどうか！」

「たっ、助けてくれ！金か！？親父に言えば金くらいやる。命だけは助けてくれ！」

「・・・きさまなど殺してやりたいが、助けてやってもいい。貴様の親父はティターンズの大佐だったな。エン大佐と昵懇とか。まずは北海道にティターンズの援軍が来ないようにして貰おう。また、それが後は、北海道にティターンズ以外の連邦正規軍を治安維持のために来るようにしてもらおう。」

「そうすれば助けてくれるのか？」

「ああ。半年くらいは知り合いのところで謹慎してもらうがな。そこは安全だ。ついでにそれが成功すれば十億くらいならのしをつけて解放してやる。」

「何でもする。助けてくれるなら何でもする！」

「とりあえず、捕虜はガウに運べ。」

このガウというのは一年戦争で墜落したガウであるが、基地をとして急遽改装したものである。

「ほお、この娘が中国大陸で羽振りを利用するエン大佐の秘蔵っ子か。」

「はい。名前はメイリンで間違いありません。」

「オヤジはどうした！」

「キャア！わっ、私は知りません！助けて！」

「ヤダ。」

「何でもしますから！殺さないでえ！」

「殺されたいのか？」

そう言って銃口を突きつける。

「いやあああ！本当に、本当に何でもします！だから！お金ならお父さんに頼めば好きなだけ！」

「金はある。金で解決するとは思うなよ。」

「ひっく、そんなぁ！お、お願いします殺さないで！」

「まっよい。ガウに連れて行け。」

ブラック参陣

「それで、昨日からの基地の修復はどうなっている。」

「ほぼ完了しています。先ほど釧路にブラック・スター様が到着なされたようです。」

「すぐはこちらへ向かうように頼め。また、ここを足がかりに次の手も打ちたい。」

札幌のことである。

「会長、緊急連絡です。札幌のカワグチが兵を動かし始めました。」

「なにっ！カワグチさりとてはの者だな。想定より動きが早い。迎え撃つにはMSが足りない……。やはり、ブラックに作戦指示を願おう。しかし……。敵の動きがこうも早いとは……。」

「……。ふむ。富良野は捨て、帯広を攻めたほうが早くはないか？あるいは太平洋経由なら。」

「いや、帯広の連邦は友好的だが、こちらの兵を進めれば討ってくるだろう。たいした数じゃあないが、敵に回すと後で面倒だ。太平洋は船がない。幸いにして、ティターンズ影響下にあるのは札幌、苫小牧、室蘭あたりだ。また、函館、旭川からは武器弾薬および食料などの補給が受けられる。都合、釧路 富良野 旭川 札幌のラインで攻めるのがベストと思ったんだが。」

「そうか。では太平記だ。」

ブラック曰く、京都に入った足利軍を楠木が粉碎した策を応用し使うそうだ。

「基地がもったいないが……。しかし、近代戦において使えんのか盆地は？MSの武器の射程は普通最大二十キロ近く届くぞ。」

「ふむ。しかし、心理的効果もある。かつ、狙いやすい。」

確かにそうである。富良野盆地はMSの視点からすればたいした広さではない。しかし、ないよりはいい。

「軍事施設は破壊。居住施設の破壊はまかりならん。酒は用意できるか？」

「当然できるが……。」

「アルコール濃度は高めのものがよい。居住施設の冷蔵庫などに入れておけ。食事も作るように。酒席の準備を整えて置け。」

一種の計略である。敵軍がここを奪還した際にOPG側は酒席の準備中にあわてて退却したと見せかけたいのである。軍事施設の破壊はもったいないとはいえOPGがここを使うことはないため壊しておいたほうが都合がいいのである。小さな軍事施設とはいえ作るのはただではないし、ティターンズにしても連邦にしても再建するならそれだけの資金を消費しなければならない。

「しかし実のところどうするよ？敵が全軍で攻めてきた場合こちらの戦力ではやはりきついが。」

「札幌周辺の不平分子をあおって置け。」

「なるほどな。不平分子に心当たりはないが何とかする。カラバの連中でも大陸からせめて来る準備をさせようか？間に合わなくてもそういう流言なら間に合うが。」

「いや、軍勢で刺激するのはまずい。ティターンズも戦力を集結し始めたら元も子もない。」

「了解。」

そうやってイシガヤは少し席をはずし電話をかける。

「小春日和だな？陽気がいいと、いずれ札の幌武者に長槍もたせ暴れてみたく思われる。」

まあ、禄高に不満があるとかで謀反起こすのがベストか？伊達政宗公の本陣から狼煙が上がるまでの辛抱だけだな。よろしく。」

すなわち、春 = ハロルドの別名・札束の幌武者 = 札幌・長槍 = 長槍を兵装としたミドルMSなど・禄高に不満 = OPG社員の給料などでの不満・謀反 = デモ・伊達政宗 = その子孫のブラックである。さしあたって悠長に暗号を送る時間がないので解読はされやすくとも手っ取り早い手段を講じたのだ。まあ、盗聴されていても通常回線を使った連絡なので、歴史国盗りゲームのこととでも勘違いすることであろう。

「しかし・・・。」

ブラックが驚くべきはイシガヤが不平分子を用意できるとすぐ答えたことだ。まさかとは思ったが、実際に用意の連絡をしに行ったことに驚かされる。

「なんだあ？副長、敵は逃げちまったみたいだぜ。」

「いや、ミノフスキー粒子濃度はまだ高い警戒は怠るな。MS三機は警戒を続行。ほか五名は私に続き基地内部の様子を伺う。後続の隊長にはそう伝えてくれ。」

そういつて副長のロイスは無傷の基地居住ブロックへ向かう。どうやら爆弾などの怪しい仕掛けはひとつもない。が、突き当りの部屋に人を発見する。

「だれだ！」

「そっちこそだれだ！連邦軍なら助けてくれ！」

「なぜそこにいる！」

「この基地のエルロイ少尉だ。先の戦闘でつかまった。」

「ほかには？」

「十五名だ。味方なら助けてくれ！」

「今照合する。」

そういつて端末からIDなどの確認をする。怪しいものはいないようだ。

「現状までの経過を話せ。」

「俺たちはゲリラに参謀のシャル中佐を殺されて、びっくりして逃げ出したんだ。司令のオオウチ大佐は当てにならないからな。敵はMS1、MS3だった。ほかに作業員がいたみたいで基地内部からも爆発があり、あつという間だ。敵前逃亡なんかじゃない！どうにもならなかったんだ・・・。それで・・・大体三割近くが殺されたんじゃないかと思うが、ほかは逃げおおせたか捕虜になったみたいだ。よくわからんが、俺たちはここに押し込まれた。まだほかに捕虜はいるはずだ。で、数時間前々にはぎやかだったんだが、一時間ほど前、急にあわてた感じの足音に変わってあとは静まり返っちゃった。あんたらがやつらをやっつけてくれたのか？」

「いや・・・。まあいい。詳しくはほかで話す。」

ロイスは通信設備に向かうが破壊されていたためにMSの通信機を使う。

「隊長、敵は撤退した模様です。捕虜にとらわれていたこの基地の人員を救出。とりあえず危険はないようです。いかがなさいますか？」

「そうか。基地設備は使えないのなら守備を固めるように。我らが到着するまで待機だ。」

「了解！」

そして食堂のほうに向かう。

「何をしている！」

・・・彼の部下が酒を飲んでいたのである。毒はないようだが問題である。

「馬鹿野郎！」

「小夜ふけて 月影さえも なき闇の 静寂を裂く まつ虫の音」

「・・・ふむ、いまいちだな。しかし即興にしてはまずまずか。」

「そうか。出撃まだか？」

「・・・頃合だな。作戦開始だ。」

暗闇にまぎれてブラック指揮下の軍勢が動き出す。

「各隊『車懸かり』で攻める。敵にこちらの実態を知られるな。」

戦術としてはまずまずの策である。新手新手に変わることによって実態を隠し、かつ敵をかく乱するのである。いかにせん、友軍はMMSが主体で12機あるが、MSはインガヤのドム一機とジムスナイパー二機だけである。対して敵は10機のMSである。まともに戦っては勝ち目がないのだ。

「じゃあ、俺はバックアップな。」

インガヤは索敵情報支援である。

「ナリタ、お前の隊は肉眼で索敵だ。ワキヤ、通信関係は任せる。随時敵展開情報を回す。」

「了解。」

「・・・まず私が先陣をきる。各隊続け。スナイパー、照明弾撃て！」

ブラック機が突撃する。敵は照明弾で照らされているが、反面照度の差によって、こちら側は見えなくなる。そのわずかの間にブラックはMS以外の守備兵器を破壊する。MMSにとってはそれが脅威となりうるし、通常そういった兵器の操縦者のほうが緊張度が高く反応が早いのだ。それはMSと違い防御力が低く、機動性もなく危険が多いためである。

「一番隊攻撃にかかれ、二番隊は追従、三番隊は待機。スナイパーは随時援護。」

ブラックの指揮下に一番から三番に分けられた部隊が入れ替わり立ち代り攻撃に移る。敵が把握しているのはこちらの半分程度であろう。彼の絶妙な指揮の賜物である。ゆえに、敵はこちらの戦力を侮ることとなる。

「各隊、敵を引き付けつつ後退。引きずりむ。」

敵はおいそれとそれに続く。一機ほど止める機体があるが、集団にはかなわない。その一機を残してすべての機体がしだいに山岳へと足を踏み入れる。

「各機分散、鋒矢で乱せ。」

突撃陣形である。一撃離脱によるかく乱は、山岳の森林ではそれなりに効果がある。

「ブラック、後方の一機はこちらの戦術をかなり読んでいるようだ。周りは聞く耳ないようだが。」

「どういう人物だ？」

「ロイス・モルゲン中尉だ。戦術家としてはなかなか。義心篤き若者らしい。っても、俺らと同年くらいだが。で、心ならずもティターンズにいるらしい。」

「・・・内応を。」

「やってみる。」

通信機をジャックする。

「やあ、ロイス中尉。私はエウーゴの隠密部隊隊長、マサキヨ・インガヤだが、貴公、われらに降るつもりはないか？」

「何だ！」

驚くのも無理はない。通信機から不意に声が流れるのである。

「いやさ、実はあんたが不満持ってるってことは知ってるのさ。で、あんたが寝返ってくれるならエウーゴは大尉くらいにすぐしてくれるぜ。実際そういう連中多いしな。」

「・・・言いたいことはそれだけか！俺は寝返るような卑怯者じゃない！」

「そうか、寝返ってくれるか。助かるな。まずはこいつからから殺そう。幸いあんたは

こいつらの背後をとっている。」

「??？」

意味不明である。断ったのにもかかわらず。

「ロイス！貴様！寝返るのか！」

「はっ!？」

隊長が怒鳴る。やはり意味がわからない。

「ロイス中尉、ごめん。あんたの通信は奴らに聞こえてないから。俺の通信は聞こえただろうが。」

「なっ！はめられた！隊長！流言です！」

すなわち、イシガヤの通信だけが隊長その他に聞こえていたのである。ということは、彼が寝返ることになっているのだ。

「ブラック、内応は難そうだったから、はめた。あの隊長頭弱そうだし。」

「・・・まあ、よかろう。」

そういう間もロイスは味方に反撃する羽目に陥っている。当然敵は逆上しているし、こちらの攻撃が容易になるのは確実だ。

「かく乱はよいか・・・。各隊集結。魚鱗。」

「スナイパーに散弾バズーカを。ブラックの支援よろしく。」

ビーム砲よりは目立たないし、ちまちま撃つよりは、敵の装甲を削って、MMSで一気に片をつけるほうが楽であろう。

「ロイス、あんた、隊長に恵まれないな。ほんとに寝返らないか？」

「知るか！」

もうロイスは混乱状態である。ともかくも生き延びたい一身である。・・・こんな死に方誰でもいやに違いない。

札幌戦線

「と、いつの間にか敵を壊滅させたわけだ。」

「・・・ふむ。」

「よくロイスを助けたな。」

「好ましい者を感じた。筋はいい。」

ロイスは現在監禁中である。さすがに今逃がしてやるわけにも行かない。

「・・・旭川はどうなっている？」

「平定完了だ。カワグチは札幌に兵力を集中させたな。後は室蘭に少し。」

「なかなか手ごわい。分散を避けたか。」

カワグチの手勢、仮に分散させた場合各個撃破を行えるが、集中されるとそうも行かない。ただ、援軍はそう望めないだろう。エン大佐を抑えているからである。が、ないとは言いきれないし、用兵しただけは現状の打破も可能である。すなわち、帯広、宗谷、網走の連邦軍小隊である。各々せいぜい三機しかいないとはいえ、カワグチ側についた場合大戦力になることは目に見えている。こちらの戦力も少ないのだ。ゆえに、兵力展開の水面下では、政治駆け引き、諜報戦が激しく展開されている。現に、帯広、宗谷の企業がカワグチ側につく姿勢を示し始めている。反面、こちらはそれらの妄動を阻止すべく、黒脛巾によって妨害、先の釧路戦に対する連邦政府への抗議と、正当防衛なる専守防衛策、北海道席卷の正当性を唱えているのだ。

「まあ、ビデオレターとかで脅してやるさ。」

イシガヤがつぶやく。

「・・・阿蘇岩山に長距離砲台を敷設したいが。苫小牧で何らかの陽動は可能か？」

「張りぼてなら。」

「・・・難しいか。・・・・・・・・イシガヤ、三十億円と人員を用意できるか？」

「んっ！？作戦に必要なんだな？わかった。当面として五十億円と人員？十五名で良いか？クレイ参れ！大佐の指揮下に入るように！」

「ふむ。思い出した。室蘭と洞爺湖にはおじい様の知り合いがいる。また、札幌にはカタクラという名士がおられ、この方は幼少お世話になった方だ。いずれもこのあたりでの影響力は強い。」

「調略か。んじゃ、任せる。必要なものはクレイに言ってくれ。あと、小樽の陽動は任せてくれ。」

「敵は・・・途中で指揮官が変わったな。戦術に差がある。組織が違う可能性が高いな。前者はゲリラ、後者はエウーゴかカラバか。しかし・・・CPGがこれほどの影響力を持っていたとは・・・。援軍もなし。戦力を集中させ撃破するしかないな。幸い戦力はこちらが上。」

「カワグチ中佐！」

「なんだ？」

「室蘭、洞爺湖近辺に、不穏が見られます。」

「？」

「プチモビや大型車両を近辺から借り上げている者がいるのです。両者の合計はプチモビが四十ほど、車両が三十ほどです。」

「陽動か。おそらく陽動だろうが、捨てては置けないか。警察組織に監視、および目的

を聞きださせろ。」

「ですが・・・」

「どうした？」

「警察にはすでにそれを要請しましたが、目的は伊達地域に大型博物館を建造するためだといっております。」

「警察は敵よりか。」

「それと、小樽においてデモ隊が発生しました。先の札幌でのデモと呼応しているようです。」

「CPGへのデモだな。しかし・・・おそらく裏で糸を引いているのはCPGだろうな。自作自演に違いない。」

「カタクラ様がおいでなさいました。」

「通せ。」

初老の紳士が司令室にはいる。

「これはカワグチ司令、始めまして。私はケイ・カタクラというものですが、聞くところによりますと、このたび札幌での戦闘を想定されているとか。しかし、地元のものもしそのような暴挙を考えているようなら、ティターンズなぞ追い出せと勢い込んでおるのです。」

「どこで聞いたかは知らないが、安心してくれたまえ。当然市外で迎撃するつもりだが、ひとつ聞きたいが、それほど人気がないのかな？我が軍は。」

「市政に干渉はなされないようなので、司令に対する評価は悪くありませんが、ティターンズ兵のモラルの低さを示すビデオレターが有力者の間に届きまして、また、深夜には通信ジャックがありまして、公開されたのですよ。あのようなむごいことをなさるのであれば、こちらとしても考えねばなりません。」

「そうか。ところでカタクラ殿は現在の情勢をどう見る？」

「・・・ティターンズには不利でしょう。」

「よくわかった。その件についてはご安心ください。」

その後カタクラは退席する。

「敵のほうが謀略が上手か。土地の名士カタクラ殿にまで手を伸ばすとは。そして、三方からのゆるい包囲体勢に加え、苫小牧方面はがら空き。城攻めの基本をとっている。」

「三方包囲が完了したな。」

「・・・ふむ。しかし、敵もさる者。こちらの策に気がついているようだ。兵力をなお集中させている。手ごわいな。」

「兵力だが、富良野までミデアで空輸、この旭川に結集させた。MS 13、MMS 24、PMS 48、その他だ。」

「・・・具体的には？」

「MSはジムクウウェル8、マラサイ4、俺専用ドム1。兵装はビームライフル主体。スナイパーライフルは2門。MMSは当社開発、治安用、対MS試作機『槍兵』だ。兵装は長槍。これはMSのビームサーベルと同破壊力だ。ヒート系だけだな。PMSは当社開発治安用先行量産機『足軽』。兵装は90mmライフル。破壊力はザクマシンガン並みがせいぜいだ。そして、失敗作、対空迎撃用MA『飛鳥落』だ。こいつは対空迎撃なら、MSだろうと戦艦だろうと十分に対応できるが、機動性は皆無。陸戦兵器なら61式戦車にも撃破されうるすぐれものだ。」

「・・・ふむ。敵戦力については？」

「おそらくハイザックタイプが24機。マラサイのカスタム機が1機だ。こいつの性能

はガンダムクラスと思われる。ほかに防衛兵器が点在するが、ミサイルランチャー類、ビーム砲類だけで特殊なものはない。位置は不明。」

「・・・ふむ。後は、ゲルググのカスタム機が1機ある。識別コードに入れるように。」

「なに？」

「・・・三方は包囲した。が、城攻めには最低3倍、できるなら10倍の戦力を必要とするが、こちらはせいぜい敵と互角。・・・これをもって敵を破るには内外呼応しかない。幸いおじい様の会社の下請けだった企業に、武器・MSマニアの社長がいて知りあいた。購入させてもらうことにした。追加費用を頼む。」

「わかった。おまえんとはこないだ合併吸収したが、そこは知らん。何の会社だ？」

「・・・採掘機械の装甲開発。が、一年戦争ではMSの部品、主にビーム兵器の部品生産をおこなっていたところだ。が、戦争が終わって、負債を抱えている。」

「まがりなりにもビームライフルやサーベルを作れる技術はあるところか？」

「ふむ。」

「よくわかった。なあ、MSだけといわずに会社ごと欲しいわ。戦闘終了後でいいから頼んでおいてくれ。」

「・・・ふむ。戦術だが。」

「了解。各隊隊長を集める。」

しばらくして軍議が始まる。

「では、軍議を始める。当方はこれより札幌の敵戦力を一掃する。この際、苫小牧方面へ逃げる敵の追撃は禁止する。窮鼠猫を噛むのを防ぐためである。作戦展開としては、『釣り野伏せ』、および『ファランクス』を以って敵を討つ。」

「どういう作戦ですか？」

「『釣り野伏せ』とは日本の戦国時代島津氏が得意とした戦術であり、おとりが敵を引き付け、そして引き込み、伏兵で敵を撃破する策である。ファランクスとはアレキサンドリア大王が使用した戦術で、長槍隊が密集隊形でひたすら猛進し、敵を撃破する戦術である。今回はMS隊がおとりの役目、PMSが伏兵として鶴翼に展開。充分引き付けたところでPMSの支援を受けつつMMSのファランクス隊を突撃させる。」

「なるほど。しかし、緒戦で成功したとして、その後乱戦になると思いますが。」

「ふむ。その後はMS戦を展開する。MMSは分散し敵支援兵器の撃破に向かえ。MS隊は二隊に分離。両舷攻撃を行う。」

「ですが、ただでさえ少ない戦力を分散するのは・・・。」

「いや、動揺した敵を挟むのは効果的である。戦術の基本は戦力の分散と集中。かつて源義経は寡兵を以って京都の平家大軍を囲み、敵の心理を動揺させて勝利している。」

「しかし、敵が動揺するとは・・・。」

「策はある。また、現代戦でファランクスを使用した例はないが、それが敵を動揺させる一因ともなる。はじめての戦術を見て、的確に対応するのは難しい。そして、突撃は一瞬である。」

「なるほど。策とは？」

「いずれわかる。」

「・・・。CPG会長から派遣されたマサキヨ・サイゴウさまは何かないのですか？」

イシガヤに聞く。特殊メイクを施し、マサキヨ・サイゴウと偽名を使っているのである。さすがに会長自ら札幌攻略に向かうのはまずいのだ。ちなみに、西郷政清は後石谷姓を名乗り、女系ながら系図上イシガヤの先祖に当たる人物で、島原・天草の乱に初期段階で徳川幕府の副使として現地の赴き鎮圧部隊の指揮を執ることになった石谷貞清の祖父に当たる人物である。

「ブラック・スター殿は名将にあられる。私が水をさすところはない。」

そういいきる。CPGのブラックに対する軍監である彼が、絶対の信頼を置いている以上、それがCPGの決定であるのだ。

「では、1番隊、マラサイとドムの5機は私が指揮をとる。2番隊ジムクウウェル6機はトモエ・ナカハラが指揮を執れ。続いて3番隊MM24機はSは、ゴウ・リュウゾウジ殿に一任する。4番隊ジムクウウェル(スナイパーライフル)1機、PMS24機は、ヤマト・オオトモに任せる。5番隊ジムクウウェル(スナイパーライフル)1機、PMS24機はアッシュ・マツマエ殿に任す。なお、PMSについてはサイゴウの干渉がありえるが、その場合は私の策よりそちらを優先するように。」

「敵が動き出したか。」

「はっ。」

「展開状況は？」

「ミノフスキー粒子が濃くて・・・。」

「・・・・・・・・。」

「さてナリタ、作戦通りミノフスキー粒子が散布された。カタクラという人物、なかなかやるな。情報収集を開始。飛鳥落を前進。対空迎撃も同時進行する。」

イシガヤはやはり情報収集の係りである。自ら前線に立ってもいいが、情報はより重要だからである。そもそも、力攻めをするならカスミなどもこの戦場につれてくるべきだがそれをしていない。ブラックの智謀と采配に全幅の信頼を置いているからだ。それに、釧路の防衛の戦力も必要ではある。

「サイゴウ、敵は？」

「ミノフスキー粒子が濃すぎる。ケーブルでカメラつないだが、分析はまだ。」

「敵のカメラは？」

「あらかた潰した。味方の死者は5名。」

「・・・そうか。トモエ、先行しておとりとなれ。私の隊がこのあたりに伏せる。」

「？了解。しかし・・・。」

「これも策だ。3番から5番、さらに後方に伏せる。作戦通りにだ。」

当然ただ伏せるだけではない。伏兵のための道具は事前に準備してある。が、1番隊のものはない。

「ブラック、敵は想定通り。」

「司令！敵接近。」

ハイザックに乗るカワグチに通信が入る。通常機である。そもそもMSの操縦が特にうまいわけではないのだ。司令にとっては枝葉の技術である。

「6機か。少ないな。」

トモエ隊が仕掛けて来る。まずは前哨戦といったところであろう。

「まさかこれだけではあるまい。」

が、トモエ隊の攻撃は激しい。本軍と思いたくなるほどである。

「？退くか・・・。」

味方が1機撃破したようである。敵は退却するように散開して後退していく。味方の半分以上がそれにつられて追撃を開始するようである。

「・・・・・・・・。」

カワグチは一考する。策略ではあるまいか？

「司令！」

「どうしたタネガシマ！」

「はっ！追撃の禁止を！『釣り野伏せ』です！」

「わからんがわかった！全軍、敵に伏兵がいる！かかった振りをして逆に撃破しろ！おそらく岩見沢の山地側だ！」

「司令……。」

「『釣り野伏せ』伏兵のことか？」

「はい。かつて島津氏が使ったものと聞いています。当家はかつて島津氏の傘下にあっただけで、家伝にそういったことがあると祖父が言っていました。」

「そうか。おそらく岩見沢だ。カメラの破壊率が多い。お前に与えたマラサイは伊達ではない。奮戦せよ。」

「は！」

2番隊は岩見沢に向かっている。カワグチの読みどおりである。当然そこにはブラック隊が伏せている。

「スター大佐！かかりました！」

「そうか。三笠に退け。MSを隠す場所がある。行けばわかるはずだ。」

「了解。」

「18機か。イシガヤ、後続は？」

「進撃速度はゆるい。」

「……分断できるか……。マラサイ……。」

「ドムか。あそこだ！気づかない振りをしろ！」

速度を上げる。もっともらしく演技をするためである。

「敵は気づいていないようですね。」

「……いや。気をつける。」

双方ともに距離が縮まる。有効射程など当に入っている。後は撃つだけである。

「撃て！」

「撃て！」

そして同時に砲火が交わる。

「何！気づいていた！ぐわ！」

ブラック指揮下の1機がやられる。ブラックの配下が敵の反撃を想定していなかったためだ。

「美唄に退け。」

そう指示をだし、ブラックが殿軍を引き受ける。マラサイのカスタム機を食い止める必要があるのだ。

「……こちらの策にはまるとて、多少の知恵がなければここで撃破できたものを。」

そうつぶやく。確かに、知恵があるからこの伏兵を読んでいたのだ。が、しかしである。

「そこだ！」

「……。」

タネガシマの銃撃を容易によける。いかにタネガシマが優れたパイロットとはいえ、ブラックのほうが経験も多い。が、敵の銃撃は激しい。タネガシマのマラサイ一機ならとも

かく、地上で18機も相手にするのは難しい。それは、アムロ・レイほどのパイロットでも同様である。

「……………」

とはいえ、一機のハイザックを撃墜する。ともかく十キロほど後退しなければならない。

「あのやろう！逃げるくせによくやる。」

ティターンズ連中はいい加減に血がのぼせているようである。ブラック機以外に多少の損害を与えたとはいえ、ブラック機だけは防御が完璧である。もっとも、防御と回避で手一杯なわけだが。それにしても、障害物のあいだを高速で縫いながら、なおかつ盾にしているのである。

「…ふっ……………」

彼にしては珍しく笑みを浮かべる。もっとも、微妙な表情の変化でしかないが。ともかくも、作戦通りである。

「2番隊は美唄よりさらに2キロほど後退。待機せよ。3・4・5隊準備。」

伏兵は美唄にある。

「通信がつながったな。ブラック、そういえばそのドムには煙幕装置がある。というか、被弾したように見える装置だが。」

「了解。」

わざと一撃を食らう。もっとも、かすり傷でしかないが。それにあわせて煙幕を使う。優れた作戦とはそう淡々と押し進めるものである。

「やった！追撃の手を緩めるな！」

ティターンズ隊が美唄に入る。

「3・4・5隊、かかれ！」

偽装していた部隊が瞬時立ち上がり、かつ4番隊のファランクス陣が敵軍に突入する。性能差があるとはいえ、突然の敵の反撃に対処できるわけではない。大阪の陣で伊達の騎馬鉄砲隊が、伏せて引き付けておき充分敵が迫ったところで長槍で反撃した真田の軍勢に蹴散らされたとき以上の効果がある。なにせ、ファランクスでの突撃が加わっているのだ。

「…ふっ。『釣り野伏せ』は二段におとりを使うこともあったのだ。1・2番隊、戻れ。反撃せよ。」

「くそっ！全機ジャンプしてかわせ！所詮MMSだ。」

「隊長！それは不可能です！対空砲火が厚すぎます！MAがいるようです！」

「何だと！ともかく撤退だ。カワグチ司令のところまで退却！」

的確な判断である。勝ち目が薄くなった以上撤退をすることは有効であるのだ。そもそも、この状況で一か八かの攻撃に移るのはまさに自殺行為である。後退すれば味方の陣地、前進すれば不確定な敵陣地である。

「1・2番隊、敵を追撃せよ！トモエは主に敵の退却の阻止。また、敵後続に気をつける。接触前に我が隊と合流。」

三笠に伏せた部隊と挟み撃ちを仕掛ける。ただ、2番隊はあくまで射撃による攻撃にとどまる。退却中の敵を遮るのは危険が増大するためである。

「深追いしすぎた！くそっ！」

タネガシマも優れた士官であるが、やはり冷静さを失ったことが痛い。それに経験の差はかなり致命的であった。

「カワグチ司令！味方は10機が撃墜され、残りも損害多数。申しわ、ぐわ！」

「……………」

ブラックがスナイパーのライフルを使用し、タネガシマのマラサイが四散する。直撃で

あった。

「・・・惜しい将であった。」

それで終わりである。いかに名将といえ、死はかくもあつけない。

「サイゴウ、狼煙の準備を。」

「タネガシマも撃墜されたか。各機V字陣形。残存部隊は我に続け。」

カワグチもさすがの将である。即座に立て直しをはかり、MMSの攻撃を避けつつ反撃を行う。それによって、所期の目的である支援兵器の破壊は防がれた。

「MSに備えよ。ミサイル準備。また、この位置であれば支援兵器であるミサイルランチャーの攻撃可能範囲である。迎撃に専念せよ。」

V字陣形は鶴翼のことである。かくして、両隊は膠着状態に陥る。なお、カワグチ隊のほうが火力が上であるために、なまじの進撃は命取りとなる。そして、カワグチの方が仕掛けるにしても、やはりスナイパーの射程に入る以上、命取りになりやすい。

「スター隊長、いかがなさいますか？」

「狼煙を上げよ。各隊動くな。」

ブラックも隊列を雁行に整えて待機する。

・・・・・・・・

「カワグチ司令、札幌より通信はいりました。旧式のゲルググが1機出現。敵対の意思がはっきりしているそうです。」

「やはりな。」

「ご存知でしたか？」

「膠着した直後に気づいた。基地が後方にある以上、時間がたてばこちらに分があるのに、敵は攻撃を仕掛けないばかりか撤退もしない。敵は優れた指揮官である以上、何らかのアクションがなければここで膠着はない。」

「では、基地に戻りますか？」

「いや。下手に退却すればやられるに違いなく、かといって救援にMSを引き抜けばおそらく前面の敵を支えきれない。どの道支えきれない基地は放棄する。通信機を。」

「はっ。」

「敵指揮官に告ぐ。我らはこれより札幌を放棄する用意がある。その際に追撃は遠慮願いたい。また、追撃をしてもかまわないが、その際は相打ちを覚悟してもらいたい。その覚悟も実力もある。が、双方無益な血を流すこともないと思うがどうか？」

「・・・承った。退くがよかろう。追撃はしない。」

司令間の交渉は簡単に成立する。が、ブラック隊は完全な掌握がされているもののカワグチの側には不満者がいるようである。

「司令、簡単に交渉が成立したということは、敵の戦力が見た目より少ないということです。攻撃を！第一、基地を放棄するのは問題です！」

「敵の戦力は見た目より多い。また、基地に戻ってもまず支えきれない。」

「どうしてですか！臆病なだけですよ！」

「あのドム、先日戦ったことがあるが鬼神だった。量産機ではなさそうである以上、パイロットもおそらく同様ほどの腕であろうし、現にタネガシマというエース級が撃墜されている。また、敵にマラサイもいる。損傷しているとはいえ、おそらく射撃程度には大きな問題はないだろう。それに基地だが、どこからゲルググやミノフスキー粒子が出てきた？町には敵分子が多く潜んでいるはずだ。そんなところに帰って支えきれると思うか？戻れば袋叩き確実。退却したほうが良い。」

「しかし！」

「敵もまさか相討ちまでしようとはしないだろう。敵は冷静で優れた指揮官。黙って退却させてくれるなら、後日戦力を立て直せるし、MSも無駄に失わない。とにかく、私に従え。」

「ちっ！了解。」

「退却開始。横2列で砲は構えておけ。」

カワグチ隊の退却が開始される。行く先は苦小牧である。そこから大陸か東南アジアへ向かうことになる。北海道はかなり敵性勢力圏になっているからだ。

「各隊、銃口は空へ向けよ。攻撃の意思のないことを見せてやれ。」

ブラックが命じる。約束の履行を明確に示すためだ。追撃をしてもおそらく損害は増大するし、それに対する戦果は小さくなる。敵が退くのならそれで充分なのである。それでももし敵が頑迷な指揮官であれば、殲滅戦を行う必要もあるが、幸いにして利害損得に長けた将であるようなので問題もない。実に見事な退き際である。ブラックであるから、その彼に勝利したものの、彼の副官であるライや、釧路を守りきったミネルバではこの一戦では互角がせいぜいであるし、イシガヤでは敗北は必定である。